

2017 年度
法政大学国際文化学部

国際文化情報学会
プログラム

2017 年 11 月 25 日 @ 外濠校舎

国際文化情報学会実施要項

開催日時：2017年11月25日（土曜日）

12時30分～13時20分 学会総会

13時30分～17時50分 研究発表会

18時00分～20時00分 表彰式 懇親会

場所： 総会：外濠校舎 S405

研究発表：外濠校舎各教室 1、3、4F ギャラリー

表彰式・懇親会：さったホール

総会議題

- 1、2017年度学会運営方針
- 2、国際文化情報学会会則変更について
- 3、2016年度会計報告
- 4、優秀論文の「異文化」掲載について
- 5、次年度以降の運営方針の提案
- 6、その他

懇親会&表彰式スケジュール

- 1、学部長挨拶
- 2、乾杯、懇談
- 3、学部パンフレット表紙コンペ結果発表と表彰
- 4、FIC サロン（国際文化学部生対象就職セミナー § 懇親会）のお知らせ
- 5、学生審査員および学会発表者への連絡事項
- 6、学会各部門最優秀賞、奨励賞結果発表と表彰

1、研究発表部門

審査ありと審査なしの二つの発表区分を設ける。前者は従来とおり、教員、学生、院生の委員による審査を実施するが、後者は発表のみとし、審査を行わない。審査の有無にかかわらず、発表教室にはレスポンスシートを置き、学会参加者は一つでも多くの発表を聴講し、感想を書き込む。

(A) 論文発表：質疑応答を含め30分。

(B) ポスター発表：模造紙1～6枚まで。補助の机をボード前に設置可。審査の都合上、審査員対象に行うプレゼンテーションにかかる時間は5分以内、その開始時間の指定はできない。

(C) 映像作品：質疑応答を含め30分、ただし学部紹介ビデオ本編は10分以下。

(D) インスタレーション、パフォーマンス：一教室を用いて70分。

2、審査

審査は学会当日の発表を見て、行う。論文の審査は学会当日の発表を見た教員二名、学生または院生審査員三名による採点（各10点満点）の合計によって、ポスター、映像作品、インスタレーション発表の審査はそれぞれ教員三名、学生または院生審査員四名の採点（各10点満点）の合計によって、最優秀賞1件、奨励賞2件を決定する。万が一、審査員に欠員が生じた場合は控えの審査員を派遣するが、事情によりそれができなかった場合はその発表者の審査に当たった教員、学生審査員全員の評点の平均点を欠員分の評点として加点する。

3、表彰

審査ありのA,B,C,Dの部門ごとに最優秀賞1件（現金2万円）、次点に奨励賞2件（現

金1万円)を贈る。ただし、A部門の論文発表については学部学生と院生の二部門に区分し、それぞれに賞を贈り、教員および外部参加者は除外する。同点で最優秀賞が2件以上、奨励賞が3件以上出た場合、教員の採点が高い順位で決定する。それでも差がつかない場合、同点の両者に該当の賞を与える。ただし、最優秀賞が2件でた場合、奨励賞は1件とする。応募が3件以下の場合是最優秀賞1件のみとする。受賞者に対して、点数を発表する。講評に関しては、学会終了後に発表者の要望に応じて、閲覧できるようにする。発表者から評価をめぐる疑義が生じた場合、企画広報委員会のなかに、審査調査委員会を立ち上げ、審査員に評価の確認を依頼し、審査が厳密に行われたかを調査する。

4、制作補助

B部門の発表については1万円、C,D部門の発表については、3万円までの制作費を実費で支給する。制作にかかった費用のリストに領収証を添えて、11月29日午後5時までに学部事務に提出すれば、企画広報委員が審査し、妥当と思われる金額を支給する。

5、『異文化』への掲載

優秀賞受賞論文は学会終了後に全文を『異文化』に掲載する。それ以外の発表概要は電子データで保存し、閲覧できるようにする。

6、評価基準

発表の評価基準は以下に示す通りです。これを目安に審査員の責任において最終的な評点を出してください。審査用紙には講評欄を設けるので、その評価にいたった理由を書き込んでください。

① A部門（論文）

1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？
3. 論理展開はしっかりしていたか？
4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が示されていたか？
5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？
6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？
7. プレゼンテーションに説得力はあったか？
8. レジюмеや資料、パワーポインター、映像に不備はなかったか？
9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？
10. 持ち時間を有効に使い、時間内に発表を終えたか？

② B部門（ポスター）

1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？
3. 論理展開はしっかりしていたか？
4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が明示されていたか？
5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？
6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？
7. ポスターの表示や機材に不備はなかったか？
8. ポスターの完成度は高かったか？

9. 口頭説明は規定時間内（5分以内）に終わったか？
10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？

③ C 部門（映像）

1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？
2. ストーリー展開や論理展開に説得力はあったか？
3. 印象や記憶に残るフレーズやシーンがあったか？
4. 手法に独創性や意外性があったか？
5. 映像編集に工夫が見られたか？
6. 音声は聞き取りやすかったか？
7. 出典を明示するなど、映像や音楽の引用は適切に行われていたか？
8. 機材の操作に不備はなかったか？
9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？
10. 持ち時間を有効に使い、時間内に発表を終えたか？

④ D 部門

1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？
3. 展示の仕方やパフォーマンスに工夫が凝らされていたか？
4. 展示の仕方やパフォーマンスのエンターティメント性は高かったか？
5. 印象や記憶に残る要素があったか？
6. 作品の完成度は満足のいくものだったか？
7. 引用や参考資料は明示されていたか？
8. 機材や装置の操作に不備はなかったか？
9. 口頭説明に説得力はあったか？
10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？

評点の指標として以下を参照。

- 10～9 優秀賞に値する。
- 8～7 奨励賞に値する。
- 6～4 可もなく不可もない。
- 1～3 劣っている。

国際文化情報学会の教員審査の結果通知を希望する人へ

学会発表に対する教員審査員による評価を知りたい発表者は、以下の事項を書いて

12月1日(金)17時までに、国際文化学部事務窓口で書類で申請するか、メール（国際文化学部事務：jkokusai@hosei.ac.jp）で申請すること。12月11日(月)より、教員審査員投票用紙一式を学部事務窓口で渡す。なお、グループ発表の場合、教員審査結果通知の申請をすることをグループ全体で確認してから、学会プログラムに出ている代表者が申請を行ってください（発表グループ内の一部のメンバーだけが知るといった事態を避ける必要があります）

教員審査結果通知 申請用フォーマット見本

【直接学部事務窓口に提出する場合は、本プログラム最終頁のフォーマットに記入・切取の上、提出すること】

発表部門(いずれかに○)	A B C D
発表者名(グループ発表の場合は代表者名)	
学生区分(いずれかに○)	学部生 大学院生
発表タイトル	
ゼミ名	
※グループ発表者のみ記入すること 教員審査結果通知の申請を行うことは グループ全体で確認済みですか？	はい いいえ

A.論文部門【学部生・院生・教授】

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 S301	13:30~14:00	サン＝テグジュペリ論－『星の王子さま』を中心にして	江川玲 (熊田・桐谷ゼミ)	1
	14:05~14:35	小倉百人一首競技かるたにおける女性の参加の変遷～明治末期から戦後まで～	影山沙樹(佐々木一恵・月野ゼミ)	1
	14:40~15:10	現代における黒人女性学生の苦悩～「犠牲者の文化」と Black Girls Rock の役割～	服部大(佐々木一恵・月野ゼミ)	2
	15:15~15:45	日本における難民受け入れに関する世論調査のメタ分析	村上奈緒 (松本ゼミ)	3
	15:50~16:20	楽園のバリ、日常のバリ	矢村亜沙美 (曾ゼミ)	3
	16:25~16:55	英語の発音は矯正されるべきなのか	濱根亜矢子 (興石ゼミ)	4
外濠 S201	13:30~14:00	手書き文字の情報構造と自己呈示について	佐々木葵(佐々木一恵・月野ゼミ)	5
	14:05~14:35	大田洋子論－文学作品による被爆体験の継承	樋川聖佳 (熊田・桐谷ゼミ).	6
	14:40~15:10	Who is English for? —From the point of English as Lingua Franca—	松尾萌(興石ゼミ)	6
	15:15~15:45	バタヤはなぜ消えた？—開発途上国が抱えるウェイト・ピッカーの問題についての考察—	羽角綾乃 (松本ゼミ)	7
	15:50~16:20	海外同郷人会の役割とは—1世紀の海外同郷人会の変遷から—	森中颯太 (松本ゼミ)	8
	16:25~16:55	日系カナダ人の歴史から見るカナダの多文化主義—「日系移民百年祭」の持つ意義—	高崎由梨 (今泉ゼミ)	9

外濠 S303	13:30~14:00	ソーシャルキャピタルとしての仏教寺院—「イベント寺」の事例から—	松井一樹 (月野ゼミ)	10
	14:05~14:35	風の学校の足跡をたどる—受け継がれる国際協力の技術と思い—	村上舞帆 (松本ゼミ)	10
	14:40~15:10	見られる男性と見る女性の関係性~2.5次元ミュージカルの事例から~	柏木菜々子(佐々木一恵・月野ゼミ)	11
	15:15~15:45	日本におけるエコツーリズムと癒しの消費—飯能市エコツアーの事例から—	中野佐紀(佐々木一恵・月野ゼミ)	12
	15:50~16:20	「対抗」から「平和」へ—サプールの出現から現在までの考察—	生畑目あかね (松本ゼミ)	12
	16:25~16:55	古着援助の功罪とNGOの挑戦—WE21 ジャパンへの参与観察から—	幸坂悠菜 (松本ゼミ)	13
外濠 S304	13:30~14:00	ポケモンと育った僕ら~ポケモンを通じたアイデンティティ構築~	坪倉圭吾(佐々木一恵・月野ゼミ)	14
	14:05~14:35	家族観の変容から見るペットの家族化	森西綾美(佐々木一恵・月野ゼミ)	15
	14:40~15:10	笑いから考えるコミュニケーション	川野颯太 (興石ゼミ)	15
	15:15~15:45	ご当地キャラクターの多様な影響力と今後の展開	浅野ひかり (曾ゼミ)	16
	15:50~16:20	ミャンマーの民主化と難民の将来—本国帰還をめぐる支援団体の動きに着目して—	杉江千紘 (松本ゼミ)	17
	16:25~16:55	オリジナリティの力~ヨハネス・フェルメールを例に~	露木理久(熊田・桐谷ゼミ)	17
外濠 S401	13:30~14:00	ある地方圏の国際協力—なぜ山形のNGOは規模を拡大できたのか—	遠田梓(松本ゼミ)	18
	14:05~14:35	地域活性化におけるコンテンツツーリズムの有効性	小林早恵(曾ゼミ)	19
	14:40~15:10	東京・葛西におけるインド人社会の変化—10年以上暮らす定住者の視点から—	ラージ夢 (松本ゼミ)	19
	15:15~15:45	タイの移民教育はどのように変化しているのか—ミャンマー人移民の子どもたちに開かれている将来—	細井はるな (松本ゼミ)	20
	15:50~16:20	台湾先住民のアイデンティティ—皇民化教育を受けた世代の考察から—	阪本由布 (今泉ゼミ)	21
	16:25~16:55	自立する女性ボールルームダンサー~男女雇用機会均等法第一世代から~	土屋麻梨恵(佐々木一恵・月野ゼミ)	22
外濠 S402	13:30~14:00	集団的日本の再考~なぜ窮屈さを感じるか~	久松翠(興石ゼミ)	22
	14:05~14:35	戦前日本の中等教育の大衆化—桃園尋常高等小学校を事例に—	青木宏太 (松本ゼミ)	23
	14:40~15:10	沖縄における遺骨収集——身元を判明することの意味——	高橋洋朝 (今泉ゼミ)	24
	15:15~15:45	ソ連崩壊から見るロシア人女性像	長田花純(熊田・桐谷ゼミ)	25

	15:50~16:20	第二言語習得理論と英語教育への提言	浅野聖仁 (興石ゼミ)	25
	16:25~16:55	中国に進出した日系企業における海外派遣事前研修に関する考察—X社の事例を中心に	楊金(中島先生)	26
外濠 S202	13:30~14:00	映画『鏡』に創造されたタルコフスキーの詩的世界と表現手法	原友理枝(熊田先生・佐藤先生)	27
	14:05~14:35	エドワード・ヤン監督の作品における日本表象	年静(佐藤先生)	27
	14:40~15:10	台湾人若年層による日本のポップカルチャー受容に関する研究 —台湾人が抱く日本に対する「親しみ」の変遷—	原口直希(鈴木靖ゼミ外部生)	27
	15:15~15:45	中国貴州省・石門坎の観光資源化プロセス—価値を見出す多様なアクターの考察—	汪牧耘(曾先生・松本先生)	28
	15:50~16:20	「フロー体験がレジリエンス状態と異文化適応に与える影響について」	マヒブレット・シュケレット(浅川先生・松本先生)	29
	16:25~16:55	中国における日本式経営の導入をめぐる課題について—松下電器を事例として—	孫傑(中島先生曾先生)	30
外濠 S404	13:30~14:00	日本のアフリカ観形成における『朝日新聞』の役割——1980年代の「飢餓救済キャンペーン」を通して	吹原春海 (粟飯原先生)	30
	14:05~14:35	沖縄における歳時記	安里恒佑(川村湊先生・廣松先生)	31
	14:40~15:10	90年代張芸謀の映画から観る父権社会における女性	王丹(佐藤先生)	32
	15:15~15:45	夢中の力で困難を乗り越える—フロー理論が異文化ストレスにおける応用の可能性	劉德嘯(浅川先生・曾先生)	32
	15:50~16:20	中国“八五芸術運動”における表現主義の変容	キン シン (森村先生)	33
	16:25~16:55	トランスシネマにおけるトランジションの考察	児玉美月 (佐藤先生)	33
外濠 S204	13:30~14:00	三遠南信—県境を越えた地域連携の新ビジョン策定にあたって	高柳俊男 教授	34
	14:05~14:35	The River Arakawa 現象とその意義について	興石哲哉 教授	35

B.ポスター部門【学部生・教授】

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 3階ギ ャラリー	13:30~15:00	プログラム初級者によるコンピューター エンターテインメント創作の試み	柳川実智 (重定ゼミ)	36
		アクティビティ、空間、そして建築～自然に人が集まる広場～	桑原優(甲ゼミ)	36
		場所からわかる「風立ちぬ」	木村望(岡村ゼミ)	37
	15:30~17:00	Paellaとパエリア ～日本におけるスペイン料理とその伝播～	近藤笑子 (大西ゼミ)	37

		「祖先と繋がる現在を生きる」チャモロ・カリニアン～南国のビーチにとどまらないサイパン～	清水広平 (今泉ゼミ)	38
		東京再発見！～東京・巣鴨・原宿エリアからみる地域特性～	山田愛(衣笠ゼミ)	39
外濠 4階ギ ャラリー	13:30～15:00	「世界遺産の真の価値の伝え方、知り方 沖縄を例に」	金田優輝 (佐々木直美ゼミ)	40
		日本のワークライフバランス ～女性社会進出するより男性家事進出するべき！？～	廣川菜(興石ゼミ)	40
		走馬灯	KIM JUAH (島田ゼミ)	41
		スマトラ島ブキツラワンにおけるエコツーリズム	石川知季 (中島ゼミ)	42
	15:30～17:00	海外フィールドスクール 芸術コース 2017年度研究の成果発表	新崎椋司(稲垣先生)(海外FS芸術コース)	42
		伝統と革新が交差する場―「祭り」の再興と経済化からみる神田祭―	伊藤啓太 (月野ゼミ)	43
		多文化社会の中で生きる人々の暮らし ―タイとミャンマーの国境の町メソットの事例より―	森金芽衣 (松本ゼミ)	44
外濠 メディア ラウン ジ	13:30～15:00	2017年度海外フィールドスクール 環境コース 受講報告	木内真穂(島野先生)(海外FS環境コース)	44
		PureDataによるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み―Minimoogを例として―	小俣柚里 (大嶋ゼミ)	45
		PureData や Arduino を用いたメディア系授業の試み―音楽音響と電子楽器の製作を中心として	大嶋良明 教授	46

C.映像部門

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 S307	13:30～13:55	戦後補償に潜む不条理～韓国人元BC級戦犯の闘い～	布施恩実 (鈴木靖ゼミ)	47
	14:00～14:25	無人駅	吉野そめい (島田ゼミ)	48
	14:30～14:55	芸人という生き方	野明菜々子 (島田ゼミ)	48
	15:00～15:20	法政大学国際文化学部学部生4年本多彩夏をモデルに武術太極拳のプロモーションのための映像作品。	若宮樹(稲垣ゼミ)	49
	15:25～15:45	百年の杜 ―生き方が語るNGO―	後藤亮介 (松本ゼミ)	50
	15:50～16:20	『3.12 栄の灯火』	鳥越浩暉 (島田ゼミ)	50

	16:25~16:45	映像のアート ミュージックビデオの表現	矢富百夏 (稲垣ゼミ)	51
	16:50~17:00	The Rose	日計美咲 (島田ゼミ)	51

D. インスタレーション・パフォーマンス部門

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 S501	13:50~15:00	#小さなアフリカ見つけた	青木璃紗 (粟飯原ゼミ)	52
	16:00~17:10	「世界遺産の真の価値の伝え方、知り方」	金田優輝 (佐々木直美ゼミ)	52
外濠 S601	13:50~15:00	表裏一体 ~精神病者のリアル~	大瀧愛莉 (森村・川村ゼミ)	53
	16:00~17:10	スマホを失くした日	伊東 菜南 (桐谷ゼミ)	54
外濠 S602	13:50~15:00	WILL・意思と未来	矢富百夏 (稲垣ゼミ)	54
	16:00~17:10	ツナグ~教科書とリアルを~	安井一起 (甲ゼミ)	55
外濠 S504	13:50~15:00	テンプル大学日本校アート学科+法政大学国際文化学部稲垣ゼミによる 共同制作のためのアートワークショップ	飯高光輝 (稲垣ゼミ)	56
	16:00~17:10	“Million Dollar Baby” of America	佐藤健志朗 (栩木ゼミ)	57

A. 論文部門

発表者氏名：江川 玲

所属ゼミ：桐谷ゼミ

発表タイトル：サン＝テグジュペリ論 - 『星の王子さま』を中心にして

発表概要：この論文ではサン＝テグジュペリの作品を通して人間の生き方の普遍性を探る。彼の遺作となった『星の王子さま』は読者に何を伝えようとしているのか。また子供向けの本として人気のあるこの作品はなぜロングセラーとなったのか。王子さまが六つの星、パイロット、キツネやバラとの交流を経て何を得て何を学んだのか。以上のような問題点について、彼の他の作品と比較しながら考察する。

絵柄が愛らしく、短編である『星の王子さま』はこれまで何度か読んでいた作品だった。しかし、就職活動中に自分と向き合った際、他の作品とは一味違う真剣に読み込む必要のある作品だと感じた。それはなぜだろうか。「子供向け」として知られ評価される作品であるが、今の私の心にどうして響くのだろうか。そこには子供から大人まで通じる普遍性があるからだろう。その普遍性を探るために、本論文では次の三つの論点を考察していく。

第一に“サン＝テグジュペリの紹介と彼の作品群について概要を整理する。第二に、より具体的かつ普遍的な議論として「大人とこども」について考察する。彼の作品の中で描かれる生と死について、そして大人とこどもについて議論を行う。第三に、彼の作品を通して「人間関係」について考察する。具体的には絆と責任について着目し、作品に登場する人物や動植物から普遍的意味を探る。この議論を踏まえ責任を持つこと、人間への愛おしさという作品のキーワードから探求し、人間関係を考察する。以上の現考察として、彼は理想的な生き方や他者との関わり方について作品を通して私たちに述べていると考える。

本論文では、彼の処女作『南方郵便機』（堀口大學訳、新潮文庫、1956年）から『夜間飛行』（堀口大學訳、新潮文庫、1956年）『人間の土地』（堀口大學訳、新潮文庫、1939年）『戦う操縦士』（堀口大學訳、新潮文庫、

1945年）最後に『星の王子さま』（河野万里子訳、新潮文庫、2006年）に至るまでの作品を参照し、考察する。主な先行研究としては、甲田澄生『「星の王子さま」を哲学する』（ミネルヴァ書房、2006年）とリュック・エスタン／山崎庸一郎訳『サン＝テグジュペリの世界』（岩波書店、1990年）がある。甲田は『星の王子さま』を哲学書として解釈し、文芸批判という形でこの作品を考察・分析している。エスタンはパイロットとしてのサン＝テグジュペリの人生と文学者としての彼の人生とを比較しながらサン＝テグジュペリという人物を著書のなかで分析している。これらの参考文献・先行研究を踏まえながら、彼が生涯を通じて世界をいかに認識し、いかに自己を位置づけてきたのかを探り、本論文では彼が理想とする人間の生き方の普遍性を考察する。

発表者氏名：影山 沙樹

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表タイトル：小倉百人一首競技かるたにおける女性の参加の変遷～明治末期から戦後まで～

発表概要：小倉百人一首競技かるた(以下競技かるた)は明治期に成立し、各時代の世相を反映した変遷を遂げながら現在まで続いている。

競技かるたの誕生は一般的に1904(明治37)年とされ、女性や子供の遊びであったお座敷かるたを試合形式に改良し、知識層の娯楽として始まった。この競技が人気になった背景として日清・日露戦争と新聞の効力があげられる。対外戦争をしていた日本では軍国主義的風潮やナショナリズムが高まっており、日本の伝統遊びを生かした好戦的な「競技」が歓迎され、新聞というメディアを通して競技かるたが全国に普及していった。競技かるたの普及が進むと2つの変化が起こった。1つは「全国組織の結成」であり、もう1つが本発表の出発点となる「競技からの女性の締め出し」である。競技かるたは当時男女が唯一交流できる場であったため、女性目当てにかかるた同好会に入会しようとする不健全な輩を防ごうと女性を競技から締め出した。また世間からの非難もあり、競技に女性が参加することを是としない風潮もあった。その後太平洋戦争中は競技かるたそのものが禁止されたが終戦後す

ぐに復活、女性の参加も再度可能となった。
一方当時の社会情勢を見ていくと、産業の発展や教育改革の影響により徐々に女性の社会進出が進んでいた。競技かるたが誕生したころは対外戦争により多くの死者が出たため女性が働きに出ざるを得ない状況もあった。また女性が競技かるたから締め出されていた大正・昭和前期にはそれまで男性主導で行われてきた女性運動が平塚らいてうなどにより女性だけの活動も起こり、その影響で一定の技能・知識を持った職業婦人が登場したが差別や偏見も大きかった。終戦後日本は連合国軍による支配を受け「非軍事化」と「民主化」が進められ、日本国内外の女性組織の活動もあり徐々に日本女性も男性と同じ権利を有するようになった。同時に競技かるたの世界でも女性の参加が再度認められ今日に至っている。
本発表では主に明治末期から戦後に焦点を当て、かつて加が禁じられた競技かるたに女性の参加が再度認められた理由を歴史的資料やかるたに関する会報等の分析を通じて考察していく。女性運動の変遷や当時の社会情勢が競技かるたに影響を及ぼしたという仮説を立て、検証していく。

参考文献

- ・阿部恒久・佐藤能丸『通史と史料 日本近現代女性史』2000年、芙蓉書房出版。
- ・谷口直子『小倉百人一首競技かるたの普及過程』2005年、お茶の水地理学会。
- ・吉海直人『百人一首研究資料集第四巻 かるたの本』2004年、クレス出版

発表者氏名：服部 大

所属ゼミ：月野ゼミ（佐々木一恵ゼミ）

発表タイトル：現代における黒人女性学生の苦悩～「犠牲者の文化」と Black Girls Rock の役割～

発表概要：アメリカの差別問題を語る上では「白人」と「黒人」という二項対立がしばしば用いられる。しかしその中で男性・女性というジェンダーによる違いは軽視されがちだ。

そこで本報告はその中でも最も立場が弱いとされる黒人女性に注目する。彼女らについては岩本裕子氏

が映画（1999）やその歴史（2010）をまとめ考察を行っているが、いずれもメディアや著名人に注目しつつマクロな視点から彼女らの現実を描き出そうとしている。

当報告ではアメリカ・マサチューセッツ州にあるウェストフィールド州立大学をフィールドとして、黒人女性学生にスポットを当てマイクロな視点から考察する。（日本人によって唯一マイクロな視点に特化したものは藤本（1982）があげられる。）今回は大学内で行われた **Black Girls Rock** という黒人女性のエンパワーメントを目的としたイベントにおいて、表彰されたメンバー3人にインタビューを行った。

調査を行ったマサチューセッツ州は全人口に対する黒人の比率が約6%と全米の中では低い。またウェストフィールド州立大学の黒人比率は全校生徒約5600人のうち5%で、決してダイバーシティに富んでいるとは言えない大学である。

インタビューでは以下の三つの点に注目し、考察を行っていく。

- ① 現代の黒人女性学生はどんな行為や事象に対して差別意識や不快感を覚えるのか。
- ② ①で明らかにした事象に彼女らはどのように打ち勝とうとしているのか。
- ③ ②を踏まえた上で **Black Girls Rock** というイベントが彼女らに対してどんな役割を果たしているのか。

①～③を明らかにするために本報告では、ブラッドレイ、ジェyson（2014）によって提唱された「犠牲者の文化（culture of victimhood）」という概念を用いる。これは「名誉の文化（culture of honor）」と「尊厳の文化（culture of dignity）」に続き近年（特に大学など）平等性が高い場において出現しやすいとされている社会統制システムある。この概念を手掛かりに、対象者の行動や思考の様相を明らかにしていく。

【参考文献】

岩本裕子「物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）絶望から希望へ」明石書店 2013年

岩本裕子 『アメリカ黒人女性の歴史-20世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』 明石書店 1997年
R・E・ニスヘッド+D・コーエン 『名誉と暴力-アメリカ南部の文化と心理』 北大路出版 2009年
Bradley Campbell, Jason Manning (2014) “Microaggression and Moral Cultures” COMPARATIVE SOCIOLOGY 13 (2014), pp 692-726.
Derald Wing Sue (2010) Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation.

発表者氏名：村上奈緒

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表タイトル：日本における難民受け入れに関する世論調査のメタ分析

発表概要：日本の2016年の難民認定申請者数は10,901人、難民認定数は28人、認定率は0.3%であり、日本は「難民鎖国」と批判されているが、過去にはインドシナ難民を1万人以上受け入れた経験がある。受け入れの実績だけでなくこのような変化は世論調査にもあった。1982年の内閣府のインドシナ難民問題に関する世論調査では、難民受け入れ拡大賛成が49.9%、反対が29.1%だったが、2017年2月の毎日新聞世論調査では、賛成15%、反対69%であり、インドシナ難民の時と比べると、日本社会は難民受け入れに消極的になったと考えられる。

先行研究では、日本社会の難民に対する受容度は低くなり、経済状況などの社会的要因が世論に影響を与えていると述べているが、難民と外国人労働者という異なるテーマの世論調査を用いており、難民に対する世論の変遷や、変化の理由は明らかにされていない。そこで本研究は、世論調査の結果だけではなく、実施方法にも着目し、日本の難民に対する世論がどのように変化したのか、また、世論調査はどのように実施されてきたかを1979年～2017年の内閣府と新聞社の世論調査を分析対象とし、メタ分析を行った。

世論の変化は二点ある。第一に、インドシナ難民を受け入れていた時代は、賛成派の方が反対派よりも多かったが、1996年以降の世論調査で賛成派が反対派を上回ることはなかった。また、1980年代よりも受け入

れ拡大賛成派と反対派の差は大きくなり、反対派の増加がみられる。第二に、受け入れ賛成と反対の理由に変化があった。受け入れ反対の理由は、1980年は国土が狭く、人口が多いからという理由が半分以上を占めていたが、近年は少子高齢化、労働力不足によって、人口問題は受け入れ賛成の理由になった可能性がある。また、治安悪化という理由は1980年代前半の世論調査で約20%を占めていたが、当時の治安が意味していたものは地域でのトラブルであり、テロではなかった。

世論調査の実施方法で明らかになったことは三点ある。第一に、難民受け入れに関する世論調査の11回中10回は難民が話題になった直後に行われており、難民が社会的関心を集めた時の調査結果をみるだけでは、通常の日本人の対難民観は正確に把握できない可能性がある。第二に、難民発生の経緯、日本の難民受け入れの現状の説明がある世論調査と全く説明がない世論調査があり、日本がどの程度難民受け入れに消極的なのかかわからない状態で回答した可能性がある。第三に、難民とテロなどのネガティブな要因を結び付けて質問している世論調査もあり、難民は危惧すべき対象であるという認識のもとで世論調査が実施されていると考えられる。

メタ分析の結果としては、日本社会は難民受け入れに消極的になっているが、調査の実施時期や質問項目を分析する限り、そうした世論の変化は誘導されている部分もあるのではないかと考えられる。

発表者氏名：矢村亜沙美(ヤムラアサミ)

所属ゼミ：曾士才ゼミ

発表タイトル：楽園のバリ、日常のバリ

発表概要：1.研究目的

「神々の凄む島」や「最後の楽園」として多くの観光客を魅了しているインドネシアのバリ島。しかし、その裏側では過剰な観光開発によって起こる環境問題や開発から取り残された住民の「日常」がある。本論文は観光開発のいわば光と影について探求する。

2.観光地としてのバリ島

バリ島の外国人訪問者数は2015年度に3,952,354人、2016年度には4,885,062人であり、主にオーストラ

リアや中国など比較的近い地域からが多いが、近年は欧米諸国からも支持を得ている。人気の秘密はその景観の美しさや伝統文化などから来る神秘的なイメージにある。バリ島観光の始まりはオランダ政府が植民地バリを人々の心を癒す「楽園バリ」として売り出したことに始まる。

独立後は高級ホテルが次々と建てられ、リゾート地化して行き、観光客に向けた様々な取組みが行われた。こうして現在の観光地としてのバリ島がある。

3.過剰な観光開発とその影響

観光開発とその後の発展はその土地に大きな影響を与えるものである。伝統文化をより豊かにすることもあれば、その逆もある。また地元住民の生活にも大きな影響を与え、数多くの問題も起こっている。

バリ島の2013年度のGDPは94兆5,557億ルピアであり、そのうち観光産業(商業、ホテル、レストラン)が29.89%と最大の割合を占め、観光産業の従事者が労働人口の27.64%を占めるなど、いずれも2位の農業従事者を上回っている。しかし、観光産業従事者と農業従事者等との所得格差、東部や北部における貧困層の存在などの問題が生じている。ホテルの過剰建設による環境破壊や観光バスやレンタカーの普及による島の大渋滞、観光客によるゴミ問題などの問題が懸念されている。また、伝統芸能が観光客用となり本来の姿を失っているなどの声もあがっている。

4.貧困地域での支援活動

島内における貧富の格差を緩和する支援活動を調査した。バリ東部の貧困地域で「イーストバリカシューズ」というバリ島で人気のカシューナッツを作る工場である。そこでは地元の女性を雇用することで貧困地域の生活を向上させ、また他国とのフェアトレードを行う貧困救済活動が行われている。本発表では実際に工場、併設されている託児所に訪問をし、見えてきたことを論じたい。

<参考文献>

林田秀樹「インドネシアにおける中央地方間所得格差の変動 農・鉱業部門生産の動向に焦点を当てて」『社会科学』83, 1-32, 2009-02 (同志社大学)

貫名貴洋「インドネシアにおける地域間所得格差について」『広島経済大学経済研究論集』33(2), 63-66,

2010-09

足立浩一「バリ島における観光開発が伝統社会におよぼす影響に関する考察」『福山大学経済学論集』39(1・2), 73-90, 2015-03

永野由紀子「インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体 —デンパサール近郊プモガン村の事例—」

『専修人間科学論集』社会学篇(1), 119-131, 2011-03

山下晋司 1999 『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会

株式会社秀 HP East Bali Cashews <http://shu-inc.jp/eastbalicashews/>

発表者氏名：濱根亜矢子

所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイトル：英語の発音は矯正されるべきなのか

発表概要：1 私の主張

世界中で外国語として英語を話す人が増えており、日本人も英語を学ぶ機会や話す機会が増えた。本論では、日本語音声体系と教育の在り方に着目し、母語の干渉によって、英語の発音を直すのは難しいため、お互いの話が通じればコミュニケーションは図れたということになり、無理に矯正する必要はないと主張する。SAでどの国の人にもうまく発音できなかつたり特に苦手な発音があることがわかり、それは本当に直さなければならないのかということに疑問をもったためである。

2 先行研究

・外国語への憧れ

歴史的背景から、日本人は外国に対して憧れをいだき、日本語に対して劣等感を感じている点がある。

・母国語の言語体系による

日本人の多くはRの発音に難しさを感じているが、実際にはLのほうがきちんとできていないのが9割である(神山孝夫「脱・日本語なまり」(2008))。Lは日本語の「ラリルレロ」と同じように発音していればいいという考えが多いが、これは舌が歯茎の裏に一瞬触れて発音されただけのたたき音であり、実はRの発音の一部である。Lは舌先を完全に歯茎の後ろにつけて横から呼気を出して発音することで側音となり、Lの

正しい発音となる。これは日本語にはない発音である。

・教育の問題

日本では、ネイティブとまったく同じように発音しなければならないという英語教育が主流であり多くの日本人がその考えを持っている。日本の試験制度や教職課程において、英語の読み書きを重視しているため、教師自身も正しい発音の方法がわからず、どのように指導すればいいのかわからないという現状がある。map, mat の p,t は本当に発音されていないために文化的背景から推理して判断しなければならないが、これらがリスニングの試験に出題される（末延岑生「ニホン英語は世界で通じる」平凡社（2010））。

3 研究の検討

・母国語の言語体系によって、その地での成長過程において触れない発音があることは確かであるため、英語を学ぶ際にそれを矯正していくのは困難だと考える。

・発音教育はもちろん改善点もあるが、単に教育制度といっても教育委員会の意識が変われば変わるものではなく、国、政府の方針が変わらなければならないと考える。

4 私の考える可能な対策

言語は、まったく同じように発音して話さなければならぬと第一に考えるのではなく、まずはものを伝える一

つのルーツとして捉えるようにする。

5 結び

言語というものは伝わればそれでいいと考えるため、英語のコアさえ守っていればコミュニケーションは十分に図ることができる。それぞれの母国語が干渉してくることによって、発音を正しくすることは困難であるため、無理に矯正する必要はない。グローバル化が進む中で自国の文化や伝統を世界に発信していくためには、我々日本人も積極的に英語を使っていくべきである。発音の良し悪しを気にするのではなく、日本化した英語を自信をもって使用しコミュニケーションを図るべきであると考え。

発表者氏名：佐々木葵

所属ゼミ：月野楓子ゼミ

発表タイトル：手書き文字の情報構造と自己呈示について

発表概要：インターネットが整備されパソコンやスマートフォンが普及した今日、文字を「打つ」ことが当たり前となり手書き文字が用いられる場は確実に減少している。しかし手書き文字が無くなったわけではなく、むしろ価値が見直される動きも起こっている。例えば 2013 年には『ユーキャン新語・流行語大賞』のノミネート 50 語に「美文字」が選ばれた。また、Twitter や Instagram などの SNS では文字を「打つ」スマートフォンで「手書き」文字を撮影した投稿も見受けられる。そこで本発表では、ことばが持つ情報構造と人々がそこから書き手の性格特性を推測しているという視点を、一般に日本人が高い傾向を持つとされるセルフ・モニタリングの理論にあてはめて分析する。そこからインターネットが普及した現代の書字行為には自己呈示の側面があることを現代の承認欲求と絡め論じていく。自己呈示とは、他者が自分に対してもつ印象を自らが想定している方向に操作することで自身のイメージを印象操作し、人間関係を管理しようとするをいう（齊藤 2006）。

宮代こずゑ・原田悦子（2016）の指摘によると、言葉が持つ情報構造には辞書定義を表す「言語情報」と直観的・感情的な意味を持つ「感性情報」がある。言葉は個人が発する声や手書き文字のように発信者が想像可能（『顔のある』情報）な場合と、複数人が同時に発する声や活字のように発信者が想像不可能（『顔のない』情報）な場合の二つがある。「顔のある」情報である手書き文字を認識する際、受け手は感性情報の影響を受けると考えられる。

また文字と性格特性との関係について松野隆則（2012）は、人々が筆跡から推測した書き手の性格には一定の相関性があるが、それらと書き手の実際の性格特性の対応は乏しいと指摘する。つまり人々は、本人とは必ずしも合致しない性格情報を手書き文字から推測し、それを本人の性格特性として認識しているのである。これらの指摘を踏まえ本発表では、美文字ブームや SNS の手書き投稿を手書き文字から他者が形成する「自己」像を自ら主体的に形成していく現象と捉え、書字行為にみられる自己呈示の在り方を明らかにし

ていく。

参考文献

ユークャンホームページ http://www.u-can.co.jp/company/news/1194253_3482.html (最終閲覧 2017/11/06)。

齊藤勇『日本人の自己呈示の社会心理学研究 ホンネとタテマエの実証的研究』、誠信書房、2006年。

宮代こずゑ、原田悦子「意味一致効果の生起に関する検討：手書き文字を用いた場合」、『筑波大学心理学研究』52号、2016年、35-46 ページ。

松野隆則「手書き文字の感性印象と筆跡から推測されたおよび実際の書き手のパーソナリティ特性との関連について」、『昭和女子大学生活心理研究所紀要』14号、2012年、31-40 ページ。

発表者氏名：樋川 聖佳

所属ゼミ：桐谷ゼミ

発表タイトル：大田洋子論—文学作品による被爆体験の継承

発表概要：本論文では、広島県の被爆者であり、原爆の体験を文学作品として書きのこした作家、大田洋子について論じる。彼女の作品を読み解き、原爆の記録の一事例として分析するとともに、文学作品による被爆体験の継承の意義について論じていく。

大田洋子は 1903 年に広島県で生まれた小説家である。二十代前半の辛い恋を経て、自身をモデルとした恋愛小説などを書いていたが、原爆投下を受けた広島県の惨状を目の当たりにしたのちに作風を一変させた。原爆投下後、最初に執筆された小説が『屍の街』である。その「序」において大田は、「書いておくことの責任を果たしてから死にたいと思った」と書いている。

『屍の街』を書き上げたのちも、原爆を体験した作家としての使命感を感じながら、原爆を扱った数々の作品を世に送り出した。

彼女の原爆文学の作品の中から、本論文では三つの作品を取り上げて分析していく。一つ目は 1945 年に書かれた、広島県の当時の惨状を克明に記した作品『屍の街』である。この作品は、自身の見た状況に加え、科学者の報告も取り入れながら描かれており、原爆の

惨劇を後世に伝える貴重な記録文学との評価を受けている。二つ目に、原爆によって変わり果てた人々に焦点を当てた『ほたる』を取り上げる。ケロイドを負った男性が見世物のように扱われる様子や、目も当てられないほど顔つきの変わってしまった少女と、彼女の抱く夢を描くことで、大田の被爆者への眼差しの変化が読み取れる作品である。三つ目に、『半人間』を扱う。この作品において大田は、被爆した人間が原爆を描くことの苦悩と描かざるを得ない心境を綴った。更に本作では、被爆による後遺症と精神的被害を描き出し、その苦しみを非体験者に理解してもらえない被爆者の心理や、理解者と出会えた時の希望を描写している。これらの作品を読み解き、大田洋子が書きのこしたものの、三作品における共通点を見出し、彼女が作品を通じて伝えたかったことについて考察していく。

先行研究として『日本の原爆文学②大田洋子』に掲載されている大田洋子論、および、村上陽子『原爆を見る眼—大田洋子「ほたる」論—』(立命館言語文化研究 25 卷 2 号、2012 年)を取り上げる。また、大田の作品を「原爆もの」と評した作家・江口渙の発言を紹介し、それに対する大田の応答を検討する。二人の論争を通して、文学において原爆を描くことへの批判とその意義を考察する。

戦後 72 年が経ち、戦争・原爆の体験者は数を減らし、今を生きる人々の意識の中で、彼らの体験は遙か遠い昔の出来事になってしまいつつある。そんな今日において、被爆した故郷の姿をのこそうと命を燃やした大田洋子の意思はどんな意味を持ち得るのか。彼女の作品は、現代の平和への意識にどんな役割を果たし得るのか。被爆体験の継承に文学が抱く可能性について論じていきたい。

発表者氏名：松尾 萌

所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイト：Who is English for? —From the point of English as Lingua Franca—

発表概要：Who is English for? —From the point of English as Lingua Franca—

1. 主張

本論で、私はフィリピン人のように英語を話すことを

主張したい。世界に英語話者は 15 億人いるが、そのうちネイティブスピーカーはわずか 20%であり、ノンネイティブスピーカーが 80%を占めていることになる (Crystal, 2003; P.53-63)。今までにましてより多くの人が英語を使い、それに伴い英語もインド英語、シンガポール英語など多様化してきており、英語は皆のものになってきているが、国際社会の中でネイティブスピーカーのように英語を話せる必要はあるのだろうか、というのが問題提起で、私の主張はそれに対するものである。

2. 問題点

日本において、この母語が異なる者同士がコミュニケーションのツールとして使う英語、English as Lingua Franca の考え (Seidlhofer, 2011; P.7) は十分に広まってはいない。また、英語が多様化していることにも必ずしも問題がないとは言えない。問題点を 2 つ挙げる。

1) 根強い「母語話者信仰」

日本の英語教育において母語話者信仰は切り離せずにいる。例えば、電車やテレビで見かける英会話教室の広告には、「ネイティブスピーカーによる授業」という宣伝文句が多く見られる。また、学校教育の場で生徒とよく接する ALT の国籍を見てみると、80%以上が英語圏 (アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ) から採用されていることがわかる (JET プログラム HP より)。

2) 英語の変種

一方、日本を離れてみると、英語は多種多様化している。インドやフィリピンでは、英語が公用語の 1 つとなり、多民族間のコミュニケーションに使用されている。それにより、その土地特有の英語の発音や独自の単語が生まれており、英語が英語ではなくなり、通じなくなる、との問題が指摘されている。

3. 解決策

ネイティブのように話せることは必要でないとし、3 つの解決策を挙げる。

1) Lingua Franca コア (Jenkins, 2000; P.159)

ノンネイティブにおけるコミュニケーションの相互理解のための音韻論的視点からの英語のコアである。

2) 異文化間リテラシーを身につける

異文化間リテラシーとは異文化間でのコミュニケーションに生じる問題を認識し、解決する能力のことであり、ノンネイティブだけでなく、ネイティブも相互理解のために英語について考え直す必要がある。

3) 英語のモデルとは別に英語の目標を立てるどの国の英語をモデルにしても構わないが、達成することが不可能な目標を立ててはいけない。どの英語をモデルにしても母語の影響が残ることは自然なことであるため、モデルと目標は異なっても良い。

4. 結論

私は、自分の英語に自信を持ち、かつ変種の独自性に信念を持つフィリピン人 (本名, 2003; P.167) のように英語を話すことを提案したい。国際化が進めば、英語が多様化することは避けられないことであり、それは言語だけにとどまらず、スポーツなどすべてのことに共通することである。英語教育を変えるのではなく、私たちは English as Lingua Franca の実態を知り、英語への壁と取り払わなくてはならない。なお、発表は英語で行います。

【主な参考文献】

Crystal, D. (2003). English as a global language (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

Jenkins, J. (2000). The phonology of English as an International Language. Oxford: Oxford University Press.

Seidlhofer, B. (2011). Understanding English as a lingua franca. Oxford: Oxford University Press.

本名信行, (2003). 『世界の英語を歩く』. 東京: 集英社.

発表者氏名: 羽角 綾乃

所属ゼミ: 松本悟ゼミ

発表タイトル: バタヤはなぜ消えた?—開発途上国が抱えるウェイスト・ピッカーの問題についての考察—
発表概要: 本研究の目的は、日本のバタヤの変遷を明らかにすることで現在、開発途上国が抱えるウェイスト・ピッカーの問題について考察することである。

今日、世界の廃棄物量が急増する中、開発途上国では廃棄物処理システムが未発達であるため、未処理の

まま埋め立て処分され各地にごみ山が存在する。そのごみ山でごみの中から有価物を回収・売却するウェイスト・ピッカー（以下、WP とする）の存在が問題となっている。日本ではマスメディアで取り上げられ WP は貧困の象徴のように見られている。しかし、歴史を振り返ってみると日本にも現在の開発途上国の WP のような人々が存在した。それでは、日本の WP はどのように変遷し、姿を消したのか。内閣官報局が発行する『官報』とインタビュー調査、それに文献研究をもとに明らかにする。

かつて日本には「バタヤ」と呼ばれる人々が存在した。バタヤの定義はいくつかあるが、本論文では「屑を収集し売却して生計を立てている人々」と定義し、有価物から現金収入を得ているという点で WP と同等のものとして扱う。バタヤの始まりは明確にはわからないが明治末年には存在したと言われる。戦前は、バタヤの服装や所持品、警察が発行する許可証の携帯等、バタヤに対する規制が多くあった。それに対しごみの分別等の衛生面への取締はあまりなされなかった。当時の日本政府の規制は、ごみそのものではなく、ごみを扱う人々に向けられていたと言える。また、そうした日本政府の行動は人々にバタヤに対する蔑視と偏見を助長させたと考えられる。

戦後しばらく、失業者の増加でバタヤは戦前以上の数になった。しかし、1963年に制定された「生活環境施設整備緊急措置法」により、ごみ処理施設の整備方針が定められ各都市でごみ焼却施設の導入が促進された。1964年には、東京オリンピック開催に際し、街の美観を保持するためごみ箱の撤去が行われた。こうして廃棄物処理システムが整備され、ごみ回収が難しくなりバタヤは働き口を失った。一方、当時の日本社会は高度経済成長の中で建設土木事業などの日雇い労働の働き口が多くあり、バタヤの新たな働き口が確保された。そのため、バタヤとしての仕事がなくなったことが深刻な問題にならなかった。日本ではバタヤの働き口の喪失と確保、この2点が偶然にも同時代に起こったことでバタヤは姿を消していったのである。

現在、開発途上国では日本の ODA により廃棄物処理システムの整備に関する支援が行われている。JICA へのインタビューによると WP が生計手段を失

わないよう処分場での雇用や、新たな職に就けるよう職業訓練が行われている。高度経済成長の日本ではバタヤの働き口が数多くあったが、必ずしも全ての国がそういった状況にあるわけではない。現在の開発途上国では廃棄物処理システムを整備するうえで、WP の新たな行き場を考えることが重要である。

発表者氏名：森中 颯太

所属ゼミ：松本 悟ゼミ

発表タイトル：海外同郷人会の役割とは—1 世紀の海外同郷人会の変遷から—

発表概要：東京には関東に住む石川県出身者が集まり、親睦活動を行う関東石川県人会がある。石川県出身の筆者もこの会に所属していた。このような都市において、他県出身者が集う同郷人会が国内には多数存在する。国内だけではなく、海外でも同じ都道府県出身の日本人が集まる会がある。ロシアの首都モスクワで北海道出身の日本人が集まり、親睦の活動をしているのである。このような海外で都道府県出身者が集まる会を海外同郷人会という。海外での日本人会としての活動以外に、ある県出身者だけが集まり、親睦活動を行っているのである。なぜ海外で同じ都道府県出身者だけで集まるのか筆者は疑問に考え、海外同郷人会について調査を始めた。

先行研究が少なく、各都道府県ホームページを調べてみると、1896年に米国のサンフランシスコで設立された和歌山県人会をはじめ、2016年までに319の海外同郷人会が設立されていた。設立時期に着目すると3つの時期に分けることができた。1期の1896年から戦前までは北米が中心、2期の戦後から1984年は中南米、3期の1985年から現在まではアジア・欧州中心に会が設立していた。なぜ地域ごとに設立時期が異なり、1世紀以上に渡り、海外同郷人会が存在し、現在も新たに設立されているのか。「海外同郷人会は、時代や地域によってどのような役割を果たしてきたのか」という問いのもと、海外同郷人会の会報誌、海外同郷人会へのインタビューから調査した。結論は以下の通りである。

1期の1896年から戦前は、親睦を深める目的の他に、生活が貧しい同郷移民を救済する目的で活動が行わ

れていた。2期の戦後から1984年までの期間は、戦後の海外移住政策や県費留学生・技術研修生の交換プログラムを背景に、日本の地方自治体が海外同郷人会を設立し、海外での行政の活動のサポートを担っていた。2つの時期の海外同郷人会では移民が活動し、家族で参加する親睦の場でもありながら、行政の業務を請け負う活動を行っていた。

3期の1985年から現在までは先行研究、資料で会の活動が確認できなかったため、筆者のモスクワ留学期間中に市内で複数の海外同郷人会にインタビュー調査を行った。その結果、駐在員が会を設立し、親睦を深める活動をしていた。しかし、いずれの会も駐在員だけが個人で参加し、活動はこれまでの家族で参加するものではなかった。海外同郷人会の役割は家族で参加する社会的なものから個人的なものへと変化したという結論を導いた。しかし、モスクワの事例だけから結論を述べているため、全ての3期の海外同郷人会にあてはまるとは言えない。

なぜ海外で同郷出身者だけで集まるのかという筆者の問題意識には答えられなかったが、海外同郷人会を網羅的に見ることで、役割の変化をみることができたことには意義があったといえる。

発表者氏名：高崎由梨(タカサキユリ)

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表タイトル：日系カナダ人の歴史から見るカナダの多文化主義ー「日系移民百年祭」の持つ意義ー

発表概要：カナダは1971年に、世界で初めて多文化主義を政策として取り入れた国家であり、日本の行政でもしばしばモデルとされてきた。多文化主義とは、「一つの社会の内部において複数の文化の共存を是とし、文化の共存がもたらすプラス面を積極的に評価しようとする主張ないし運動」(梶田孝道「多文化主義」梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』(平凡社、1995年)とされる。しかしこの解説にみるように、多文化主義はしばしば複数の文化の共存状況としてのみ捉えられ、複数の文化集団が歩んできた歴史との関係性において必ずしも十分には検討されない傾向がある。そこで報告者は、カナダの日系人を対象に第二次世界大戦後、日系人がいかにして差別や偏見を乗り越え、社会

の一員となっていったのかを分析し、カナダが日系カナダ人を排斥した過去から、現在のように多文化主義を標榜するカナダ社会へと変化したかを、明らかにする。

日本からカナダへの移民は1880年代後半から始まるが、日系カナダ人は白人の人々には「職を奪われる脅威」の存在として映り、排斥気運が見られた。第二次世界大戦が勃発すると、カナダは連合国側に属していたため、敵国人としての日系人への排斥気運は最高潮に達し、強制収容所に送還されるまでになった。当時のカナダのキング首相は、終戦前からブリティッシュ・コロンビア州(以下BC州)に集中していた日系人をカナダ全土に拡散させる政策を計画、実施した。その結果、日系人は白人社会との同化を優先するようになり、日系人であることに否定的になる傾向が見られ、更には日系社会の繋がりは希薄化していった。

そして戦後40年以上経った1988年、カナダ政府が第二次世界大戦中の日系カナダ人の扱いについて謝罪と補償を行った。日系カナダ人の戦後についての研究では、このリドレス運動の成功は日系カナダ人が日系人であることに誇りを取り戻した最も重要な出来事と分析するものが多い。

しかし、報告者はリドレス運動の10年前にあたる1977年に開催された「日系移民百年祭」もまた日系人にとっては差別を返上し、「誇り」を取り戻す出来事であったと考える。百年祭は全国規模の行事と各地域の行事に分かれており、全国行事としては、カナダと日本の文化の融合を示すダンスの催しや、戦前から日系人が歩んできた歴史を物語る写真展などが行われた。各地域では様々な独自の行事が行われたが、中でも報告者は戦前、日系カナダ人の大半が集住していた、BC州のバンクーバーで行われた「パウエル祭」に着目する。戦前のパウエルストリートは「日本人街」と称され、多くの日系人が住んでいた。日系人にとって、かつて重要な生活圏であったバンクーバーで、パウエル祭を開催することの意義にも着目したい。

以上のような点から、日系移民百年祭が、自己に対して否定的であった日系カナダ人にどのような影響をもたらしたのか、本報告では「パウエル祭」に焦点を当て、論じる。

発表者氏名：松井一樹

所属ゼミ：月野楓子（佐々木一恵）ゼミ

発表タイトル：ソーシャルキャピタルとしての仏教寺院—「イベント寺」の事例から—

発表概要：近年マスメディアを中心に「葬式仏教」（現代の仏教を、葬式や先祖の供養をするだけだとして、非難の意をこめていう語：広辞苑第六版）という言葉が使われるようになってきている。国内の仏教寺院は核家族化や葬儀の簡素化などにより、かつての地域社会における立ち位置を失いかけている。このような状況下で現代の日本の仏教の在り方に危機感を抱き、自らの持つ、寺院空間・資金・人脈などの資本を活かして自発的に社会に貢献している仏教寺院関係者が増えている。本報告ではこのような社会貢献意識が高く、積極的に企画・イベントを開催している寺院を総称して「イベント寺」という言葉で表現する。

本報告の目的は仏教寺院関係者の資本を活かした「イベント寺」が現代の地域社会でどのように作用するかを検証することである。そのため、仏教寺院とその関係者が持つ資本を社会関係資本（ソーシャルキャピタル）として分析し、「イベント寺」の特徴と問題点を明らかにしていく。ソーシャルキャピタルは多義的な概念であり、20世紀以降様々な論者によって定義されてきたが、本報告ではアメリカの政治学者ロバート・D・パットナムによる定義を参考にする。パットナムによる定義では「橋渡し型」と「結束型」の二種類のソーシャルキャピタルがある。二種類のソーシャルキャピタルは、各々が異なった特徴を持つ。「結束型」は、同質な者だけでネットワークが構築されているので比較的結束が固い。しかし、ネットワークとしては外部から閉ざされているため、新しい価値観や情報が入りにくい。これに対して「橋渡し型」は、異質なものどうしで結びついているので比較的結束が弱い場合がある。しかし、ネットワークが外部に開かれているため、新たな価値観、情報、そして人脈が広がりやすい。仏教寺院をソーシャルキャピタルとして捉えると、近代社会における地縁に基づいた寺院は「結束型」に近い役割を果たしていた。しかし、現代社会の「イベント寺」とよばれる寺院は比較的「橋渡し型」的な特徴をおびていることがわかった。住職や寺院のスタッフ

が時代や社会のニーズに適応した変革を意識した結果、仏教寺院は「結束型」から「橋渡し型」に姿を変えていったのだ。

近年「イベント寺」の多様な社会支援活動は雑誌や文献でも取り上げられ、注目を集めている。本報告では上田紀行『がんばれ仏教！』に取り上げられている「イベント寺」の事例を参考にしうえて、新たに新宿区四谷の東長寺での聞き取り調査を行った。これらの寺院が活動を多様化させた背景やその効果を分析することで社会と「イベント寺」の関係性を紐解き、現代社会における寺院のソーシャルキャピタルとしての機能を明らかにする。

【参考文献】

ロバート D パットナム『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳、柏書房、2006年。

上田紀行『がんばれ仏教！』日本放送出版協会、2004年。

発表者氏名：村上舞帆

所属ゼミ：松本ゼミ

発表タイトル：風の学校の足跡をたどる—受け継がれる国際協力の技術と思想—

発表概要：本研究は日本が世界最大の援助国になった1989年から1990年代初めにかけて、草の根開発協力の分野で注目されたあるNGO（民間国際協力団体）のその後をたどったものである。その名前は「風の学校」という。

日本のODA（政府開発援助）がインフラを中心に急拡大した1980年代、援助が相手国に役立っているのかという批判がマスメディアで展開された（笹沼1991）。その中で、開発途上国の既存の技術水準に近い技術＝適正技術の価値が認識されるようになる。この適正技術を開発途上国で生かそうと1980年代に活動を始めたのが風の学校である。風の学校は井戸掘りを中心にフィリピンなど世界各地で活動を行い、1990年前後にマスメディアや行政から草の根開発協力の1つのモデルとして注目された。しかし、設立者である中田正一氏が亡くなった1991年以降注目されることが少なくなり、正一氏死後の風の学校については文献

にも取り上げられなくなった。筆者の地元である千葉県にその事務所はあったが、事務所の場所や風の学校自体について知られていなかった。

ODA が急拡大する中、開発途上国の人たち自身が運営、管理できるとして注目された適正技術、その普及の象徴とされていた風の学校は、なぜ地元ですら忘れ去られた存在になってしまったのだろうか。この問いに答えるため風の学校の活動について一次資料である機関誌や、正一氏の後継者として期待されていた四男の保氏へのインタビューを通して正一氏が亡くなった後の風の学校の活動を分析した。結論は以下の通りである。

一次資料から分かる限りでは、正一氏の死後、2007年まで活動は続き、8カ国14カ所で井戸掘りのプロジェクトが行われた。風の学校の実習生達は長期的に活動を行い、現地に見合う支援方法を生み出していた。実習生達各個人が風の学校の主体となり活躍していたことがわかる。また、正一氏が生きていた時代に掘られた井戸は、現地の人々によって保存されていた。これらのことから、人と人がつながることで、技術や思いは伝わっていくということが伺える。技術を培って活動していくことが正一氏の意志を受け継ぐことであり、風の学校を世界に伝える行為であったといえる。

風の学校は2007年に終了した。正一氏は生前、風の学校を残すことにこだわりはなく、風の学校を「吹けば飛ぶような学校」(中田 1990: 124)と考えていた。保氏は継続することについて大きな葛藤があったが、正一氏の意志を尊重し、風の学校を継続しないことを選択した。それ故に地元の人々が行方を知らなかったと考える。保氏は2007年以降、正一氏の意志や考えを伝える努力をしていた。風の学校終了後も、思いをつなげようとする姿勢があったことがわかる。

笹沼充弘『ODA 援助批判を考える』工業時事通信社、1991年。

中田正一『国際協力の新しい風』岩波新書、1990年。

発表者氏名：柏木菜々子

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表タイトル：見られる男性と見る女性の関係性～2.5次元ミュージカルの事例から～

発表概要：近年2.5次元ミュージカルという新たなミュージカルが登場している。舞台ミュージカルの新ジャンルとしての2.5次元ミュージカルは、漫画やゲーム、アニメなどの世界を舞台コンテンツとしてショー化したものであり、主に女性の間で人気を博している。2.5次元ミュージカルに出演している俳優は「2.5次元俳優」と呼ばれ、斎藤工や城田優などのように、2.5次元ミュージカルの出演をきっかけに注目を集める俳優も多い。2.5次元ミュージカルの観客層は主に女性であり、「2.5次元俳優」としての見られる男性、観客としての見る女性の関係が窺える。

これまで女性は男性から見られる対象や商品として扱われることが多く、現在も女性が見られる側、男性が見る側としての関係性は存在している。歴史的には男性が見られる側だったこともあるが、それは稚児などの少年時代の両性具有的な存在としてのもので、見る側も男性であった(荻野,2009)。一方近年は、2.5次元ミュージカルのように、見られる側として成人した男性アイドルやタレント、舞台俳優などが女性から注目され、膨大な経済効果を生み出している。

女性は近年、未婚者・既婚者ともに自分の好きなことのためにお金を使う傾向がある。その背景には女性が経済的に自立し、男性に依存せずに生きられる時代になったことや、経済不況で男性に頼れなくなったことが挙げられる上、女性の嗜好が奥深くなり、一種の「オタク化」が起こったと考えられている(杉浦,2008)。さらに女性の嗜好におけるコンテンツ消費には、世界観に注目する傾向があり、その中で2.5次元ミュージカルの世界観に魅力を感じ、足を運ぶ女性が多くなったことも2.5次元ミュージカルが注目を集めている原因となっている。そして女性から人気な男性アイドルの存在は、若い男性にとっての憧れの対象となり、身だしなみを気にするきっかけともなっている。このことを踏まえると、男性が見られる側としての意識を持ったこと、女性が見る側としての立場を獲得したことが窺えるのではないだろうか。

本発表では上記のような観点から、見る・見られる性の関係に2.5次元ミュージカルを鑑賞する女性たち

を当てはめ、資料分析を行う。この分析を通して、男性が見られ、女性が見るという関係性が生まれた背景に経済不況や女性の社会進出があることを検討する。

【参考文献】

日本 2.5 次元ミュージカル協会ホームページ
<https://www.j25musical.jp/about/> (最終閲覧 2017 年 10 月 21 日)

荻野美穂『<性>の分割線 近・現代日本のジェンダーと身体』、青弓社、2009 年

杉浦由美子『かくれオタク 9 割 ほとんどの女子がオタクになった』、PHP 研究所、2008 年

発表者氏名：中野 佐紀 (ナカノ サキ)

所属ゼミ：月野 楓子 (佐々木 一恵) ゼミ

発表タイトル：日本におけるエコツーリズムと癒しの消費—飯能市エコツアーの事例から—

発表概要：グローバル化が推し進められ、交通網が発達した現在、人々やモノの移動は日々、目まぐるしい。そういった変化の中で、移動を伴う観光は、どのように変化し多様化してきているのだろうか。近年、個人旅行が主流となり、観光客がただ観光地を訪れるだけでなく観光客の興味や関心に合わせたツアーが企画される傾向がある。その一例として、エコツーリズムを取り上げることができる。エコツーリズムとは欧米において、環境保護と持続可能な観光地化を目指し始まった運動だ。日本では 1990 年代、バブル崩壊前後期に始まったとされ、環境保護よりも地域振興に重点が置かれている。エコツーリズムの定義は活動団体によりが様々であり、日本においては地域資源を活かした持続可能なツアーをエコツーリズムと呼んでいることが多い。したがって本稿では新たに観光地をつくるのではなく、地域の自然や歴史、文化を活かした持続可能な観光をツアー企画者が目指したものを「エコツーリズム」と呼ぶことにする。

本稿の目的は、欧米とは異なる日本におけるエコツーリズムの高揚に着目し、その背景には何があるのかを、観光や旅行を消費行動の一つと捉え、エコツーリズムが日本でどのように消費され、発展しているのかを検証することにある。

そこで、本稿では新しい消費行動の一つである「癒し」の消費に注目したい。そもそも「癒し」という語が、マスコミに初めて出現したのは 1988 年後半である。つまりバブル崩壊前後に「癒し」が商業的に注目され始め、消費活動に組み込まれていったと言える。したがって、日本におけるエコツーリズムの高揚と「癒しの消費」の始まりには時代の重なりが見られ、関連性があると考えられる。「癒しの消費」は様々な論者によって検討されてきたが、本稿では、松井剛氏『ことばとマーケティング—「癒し」消費社会史—』による定義を参考にする。松井剛氏によると「癒し」の消費とは、消費活動を通して自己憐憫を行うことを指す。今まで消費活動を通して自己表現を行うことは確認されてきたが、バブル崩壊後、先行きが見えない将来や格差社会に対して、消費と自己アイデンティティとの関係が希薄化し、消費活動を通して自己憐憫を行うようになったという。

この「癒しの消費」と現在の日本におけるエコツーリズムの取り巻く状況を把握するため、実際に飯能市のエコツーリズムに参加し、飯能市役所の方、ツアー企画者、参加者にそれぞれ聞き取り調査を行った。その結果、ツアー企画者は地域振興に重点を置き、参加者はそれぞれの興味や関心に合わせて参加していることが分かった。

以上から、本稿では調査結果と資料分析に基づいて、日本におけるエコツーリズムの高揚の背景には、「癒しの消費」があるのではないかという問いを、飯能市のエコツアーを事例として検証し明らかにしていく。

参考文献

松井剛氏『ことばとマーケティング—「癒し」消費社会史—』、碩学叢書、2013 年

発表者氏名：生畑目あかね

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表タイトル：「対抗」から「平和」へ—サプールの出現から現在までの考察—

発表概要：サプールとはコンゴ共和国のブラザビルとコンゴ民主共和国のキンシャサに存在する、服を着飾ることを流儀とした人々である。

2016年4月、都内で開かれたサプールの写真展に筆者は訪れた。展示された写真には海外の高級ブランドのスーツを着ている人々が写っており、舗装されていない道やトタンで作られた家などの背景とのギャップが印象的だった。コンゴ民主共和国の平均年収は約5万円、コンゴ共和国は約18万円といわれる中で「なぜ貧しいにもかかわらず、植民地支配されていた国の高価な服を着るようになり、それがどのように継承されてきたのか」。サプールの出現から現在までの変遷をひもとき、この問いに取り組む。

本研究ではフランス語と日本語の先行研究をレビューし、サプールの代表的存在であるセヴラン・ムイエング氏と写真家の茶野邦雄氏にインタビューをした。サプールの変遷は三つに大別できた。調査の結果は以下の通りである。

サプールが出現したのは1922年、反植民地運動を主導していたアンドレ・マツワが洋装をしたことがきっかけだった(Makouezi 2013)。このことから筆者はサプールの出現が日本の明治維新後の洋装化に類似していると考えた。明治日本では欧米列強に対抗し、彼らと対等に渡り合うために、和装から洋装への移行を含め西洋化が進められた。アンドレ・マツワが洋装をしたのもコンゴの旧宗主国であった西欧列強に対抗するためだったのではないのか。

先行研究で次にサプールが現れるのは1980年代である。その時期は旧宗主国である西欧への対抗意識はみられなかったが、国内の政治姿勢に対抗するツールとしてサプールが利用されていた(栗飯原 2015)。両国どちらにおいてもサプールのファッションをすることは政治姿勢が異なるというメッセージだった。

3度目の登場は国外で広まり始めた2009年以降である。インタビューを行った結果、「平和の象徴」「ビジネス」という新たな2つの意味合いが明らかになった。それは内戦を経験したサプールが、サプールのファッションを広めることで平和の維持を訴えており、ファッションを楽しむことができるのは「平和の象徴」とあると主張していることからいえる。一方で国外に広まった影響を受け、サプールが「ビジネス」として捉えられるようになった場面もみられた。

以上の調査結果からサプールは、出現した時は「植民

地主義への対抗」のためだったが、のちに「国内の政治姿勢への対抗」の手段になり、現在は「平和の象徴」へと変化していた。

他国の文化を受け入れることによって生み出された文化は時代や周囲の環境に影響され、その意味合いは変化していくといえる。

参考文献

Elvis G., Macouzeki, Dictionnaire de la SAPE, Publibook, 2013

栗飯原文子, ころ vol.27, 2015, 平凡社, p170-173

発表者氏名：幸坂悠菜（コウサカユウナ）

所属ゼミ：松本悟 ゼミ

発表タイトル：古着援助の功罪と NGO の挑戦—WE21 ジャパンへの参与観察から—

発表概要：国際協力活動の中に、不要になった服を必要としている人へ送る古着援助がある。この活動について、先行研究では無償の援助で配布される古着によって、現地の衣類産業が衰退し市場が縮小(福西 2007)したり、高額送料により現地に古着の援助が行き届かない(朝日新聞 1992)などの批判が挙げられている。

これらの批判を受け、現在古着援助はどのように変化したのだろうか。変化について書かれた文献がなかったため、古着援助団体のホームページや新聞記事から調査を行った。その結果、現在多くの古着援助団体は寄付された古着を販売し、その収益で国際協力活動を行っていることがわかった。古着援助は、服の「着る」という使用価値に着目した「服を服のまま送る」援助から、「服を現金に換える」交換価値に目を向けた形態に変化していたのである。

現金化へと形態を変えた古着援助だが、使途が着ることに限定されないため資金の不正利用など新たな問題も予想される。本研究では、「新しい形態の古着援助は過去の批判を克服しているのか」また「新たな問題を抱えていないのか」という二点の問いに取り組んだ。筆者は全国最大規模の古着援助団体である WE21 ジャパンへ聞き取り調査と参与観察を行い以下の結論を導いた。

まず、新しい形態の古着援助は高額の送料による問題を克服していた。また、現地での資金の用途についての報告会や現地視察を行うことで被援助国への影響を確認する方法が確保されていた。

一方、寄付者、購入者に国際協力活動を行っているという意識が無くなり、新たな問題が生じていた。寄付者は「不要なものを処理する場」、購入者は「品揃えの良い店」として WE21 ジャパンを捉えていた。それにより膨大な量の寄付品が寄せられ、スタッフの重労働、在庫にかかる保管代、活用できない寄付品の廃棄代などの負担が問題として明らかになった。

WE21 ジャパンの古着援助は、高齢の無償スタッフが負担を担うことで自覚のない寄付者・購入者の行動を国際協力で活かすことができていた。しかし、高齢のスタッフが無償で負担を抱える古着援助には限界があると考えられる。また、大量の在庫を抱え込むことで、商売で古着を扱っている人々への影響が懸念される。彼らと共存し、かつ古着援助を持続させるためには、無償スタッフに頼りきる姿勢から抜け出す必要があると考えられる。

本研究は1つの団体を取り上げたにすぎず、この結果が一般化できるわけではない。ただ、古着援助の仕組みから新しい形態の古着援助が抱える問題の可能性を提起した点に意義があるといえる。

福西隆弘『国際競争に直面するケニア衣料産業-その影響と企業の対応』「アフリカに吹く中国の風、アジアの旋風-途上国間競争にさらされる地域産業-」日本貿易機構アジア経済研究所、pp.57-80、2007

朝日新聞「途上国へ寄金、高すぎる送料（声）」、1992年1月21日朝刊

発表者氏名：坪倉圭吾

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表タイトル：ポケモンと育った僕ら～ポケモンを通じたアイデンティティ構築～

発表概要：現在世界では、技術発展に伴い様々なモノの浸透スピードが急速になっている。中でも近年社会現象を引き起こした「PokemonGO」は他のアプリに類を見ない速さでユーザーを獲得したサービスだ。一億人のユーザーを獲得するのにかかった期間が、

facebook が4年、instagram が2年かかったのに対し、PokemonGO はたったの1か月で成し遂げた。[ガートナー調べ] 一方、日本において PokemonGO の利用者が急速に増えたのは、拡張現実の技術だけでなく、ポケモンというコンテンツを通じて我々がアイデンティティを構築している面があるのではないかと思われる。

そこで本発表は、20代近辺の若者にターゲットを絞り、ポケモンというコンテンツを通じたアイデンティティの構築について解明することを試みる。ポケモンというコンテンツはゲームから始まり映画やアニメ、漫画などメディアミクス展開をしている。その中でも発表者はポケットモンスターシリーズ（以降ポケモンと呼ぶ）のゲームに着目する。虚構性の高いポケモンが持つ力と、ゲーム内の仕組みの交換機能が与える影響について分析する。そして、時代変化に伴う消費行動と親密構造の変化が生じた中で、ポケモンがどういう位置づけで消費されていたのか分析することで、若者のポケモンによるアイデンティティ構築の一端を明らかにしていく。

まず本発表では、時代と共に形を変えて存在する妖怪と人間関係の構築に関わる交換・贈与に着目し、ポケモンのゲームが現在の若者の幼少期にどのような影響を与えたのか分析する。妖怪の人間の精神活動の根拠にかかわる事象と関係を明らかにしようとする妖怪学[小松和彦、2011]と、物の交換や贈与によっておこる相互行為による人間関係形成を明らかにする交易学[今村仁司、2000]を基に考察を行う。

そして、消費行動の変化についてはデータベース消費と動物化の概念[東浩紀、2001]を使用する。日本の大衆文化の愛好家であるオタク達の断片化した小さな物語の設定や世界観という虚構世界を、他者と共有することで消費することが物語消費である。1995年頃から、虚構世界をデータベースに解体する事で、他者を必要とせず感情的欲求を効率的に満たすデータベース消費へと変化していった。虚構を重視し他者を必要していた時代から、虚構世界や他者の介入なしに効率よく欲求を満たす動物化した時代へと変化した。この頃、親密構造も変化し、社会が孤立した個人が生活する空間となった。こうした社会の中でのポケモン

の影響力を、妖怪学と交易学で分析した結果を基に説明する。そして、20代の若者がポケモン・ノスタルジー・アイデンティティを構築していたことを明らかにする。

参考文献

- ・小松和彦（2011）『妖怪学新考』洋泉社
- ・今村仁司（2000）『交易する人間 贈与と交換の人間学』講談社選書メチエ
- ・東浩紀（2001）『動物化するポストモダン』講談社現代新書

発表者氏名：森西 綾美

所属ゼミ：月野楓子

発表タイトル：家族観の変容から見るペットの家族化

発表概要：若者の結婚離れが騒がれる今、家族化するペットが一般化しつつある。テレビや雑誌などでペットのホテルやペット同伴可能なカフェの特集などを目にするのも珍しくない。我々はペットがまるで家族と同様に扱われている状況を当たり前だと思っているのではないだろうか。そこで本報告では、ペットが家族化した背景を戦後から現代にかけての家族観の変遷から明らかにすることを試みる。

伝統的な家族社会学における一般的な家族の定義は、「血縁、もしくは法的に継続した性関係に基づき生活を共同している関係や集団」である。ペットがこの定義に当てはまらないのは言うまでもない。そこで山田氏は「主観的家族論」という概念を展開している。これは「自分が家族だと思う範囲」を家族と捉え、人々がどのようなロジックで家族という言葉を使っているのかを考察する手法である。これはペットだけではなく同性愛者カップルや別居している親などにも用いることができ、現在家族社会学の有力なテーマになっている。

一方、落合恵美子氏は戦後の家族構成を、構造ができあがるまでの時期と、構造が安定した時期、それからそれが壊れていく時期の3つに区分し、その構造が安定した時期を「家族の戦後体制」と呼んだ。「家族の戦後体制」には女性の主婦化、再生産平等主義、人口学的移行期世代が担い手の3つの特徴があるとされる。高度経済成長期において、男性が外で働き女性は

専業主婦という性別分業の形がとられ、「父親不在」の家庭が多かった。この状況を円より子氏は「渴愛」と表現している。さらに落合氏は、高度経済成長期が過ぎ構造が崩れていく時期を「家族の戦後体制の変容」と呼んだ。この変容では、家族の再生産（子育て）の責任が増大し、より「ハイレベル」な子育て・消費を課されるようになった。それにより子供への愛情の証拠水準が上昇し、特に母親は「母性愛」という見えない圧力により、お金をかけることで高水準の感情マネージを確保しようとした。その結果、女性の脱主婦化が進んだ。

戦後から高度経済成長期を経て現代に至るまでに、家族観は大きく変化を遂げた。本発表では、こうした変化の中で家族ペットが誕生した背景を「主観的家族論」という概念に基づいて明らかにしていきたい。

発表者氏名：川野 颯太、小野 彩花、島田 智里、村上 友也

所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイトル：笑いから考えるコミュニケーション

発表概要：本論の目的は、日本と海外での笑いの違いを考察し、異文化コミュニケーションにおける笑いの重要性を主張することである。

異文化交流を考えると、異文化理解やその国々の言語習得を最優先事項とすることがあるが、SA や外国人との交流を体験した上で「笑い」の重要性を感じた。笑いは具体的にどのように影響するのかを参考文献をもとに検証した。

笑いについての研究は、古来より多くの分野で行われてきた。そのため、ユーモア、ウィット、ギャグ、そしてジョークなどの意味の定義が統一されておらず、各研究によって違う用いられ方をしている。そこで、本論ではギャグを常識から逸脱した滑稽さから笑いを生み出すもの、ジョークを気の利いた話や戯れから笑いを生み出すものとする。また、ユーモアはギャグを生み出す性質、ウィットはジョークを生み出す性質とする。

ジョークの一種には、人種や国の文化の違いから笑いを生み出す、エスニックジョークがある。エスニックジョークにおいて、日本人は笑いを生み出すのが下

手であると描かれることが多い。しかし、日本のTV、新聞、ラジオなどのメディアは笑いで溢れている。それにもかかわらず、海外から笑いをとれない人々として扱われるのは、日本と海外の笑いの性質が違うからだと考えられる。(具体例：日本のお笑い) 日本は自身を中心として笑いを取る傾向が強いと考える。

笑いやユーモア、ジョーク、ギャグがなぜコミュニケーションをとることに必要なのか。そのうちの理由の一つが仲間意識の芽生えである。初対面あるいは会話の入口でともに笑いあうことで、人は親近感を持ち、接しやすくなるのである。その特徴が多民族社会であるアメリカによく見られる。(具体例：ジョブズのスピーチ)

高コンテキストと低コンテキストによるコミュニケーションスタイルの違いが、異文化交流に影響を与えている。コンテキストとは、言語や共通の知識等のことである。

コンテキストの共有性が高い「高コンテキスト社会」では、言わなくても分かるという環境がある。そのため日本では、同質性が高く、内輪受けジョークが交わされ、仲間意識を高めるためにユーモアを使用している。一方の「低コンテキスト社会」では、コンテキストに依存するのではなく、言語により交流を図ろうとする。そのため、欧米や英国では、同質性が低く、初対面の相手に対するアイスブレイカーの役割として、ユーモアを使用している。このことから、日本では外に対してジョークを発信する機会がなく「ユーモアがない」というレッテルが貼られている。

他の国と日本は笑いの観点で大きな違いを持っている。また笑いには、相手の気持ちを掴み、仲間意識を持たせる効果があることがわかった。これらを踏まえると、SAに行く際の持ち物の一つに、海外の人と円滑にコミュニケーションをとるための潤滑油としての笑いの知識を含めるべきだと主張する。

発表者氏名：浅野ひかり

所属ゼミ：曾士才ゼミ

発表タイトル：ご当地キャラクターの多様な影響力と今後の展開

発表概要：近年、日本全国各地に出現しているご当地

キャラクターそれぞれの影響力や成果の差に興味を持ち調査を進める中で、そもそも活用目的が一樣ではないことに気づき、管轄している部署の違いに基づいて目的も変化すると仮説を立てた。全国のご当地キャラクターの総数は定かではないが、本研究では、①観光開発に纏わる部署が管轄しているご当地キャラクター、②広報活動に纏わる部署が管轄しているご当地キャラクター、③NPO 法人が管轄しているご当地キャラクター、の3つに大きくタイプ分けし、それぞれの代表的なご当地キャラクターの活用目的とその成果について調査した。

まず①として、ひこにゃん(滋賀県彦根市産業部観光企画課)・うなりくん(千葉県成田市経済部観光プロモーション課)・あゆコロちゃん(神奈川県厚木市役所観光振興課)の計3体について調査した結果、観光客誘致を目的として地域の魅力の発信を行っている点で3体の活用方法が共通していることが判明した。

次に②として、チーバくん(千葉県庁総合企画部報道広報課千葉の魅力発信戦略室)・みくちゃん(奈良県大和高田市企画広報課)・キビタン(福島県庁広報課)の計3体について調査した結果、2体はそれぞれの地域の知名度上昇が最大の目的であり、他1体は東日本大震災からの復興支援と地域のイメージ改善に重点を置いていることが分かった。3体の共通点としては、地域の認知度を高めるために、ご当地キャラクターを地域ブランドの一つとして活用していることである。最後に③として、唐ワンくん(NPO 法人唐津市子育て支援情報センター「唐ワンくん」事業部)・たかたのゆめちゃん(NPO 法人AidTAKATA)・ぼっくりん(NPO 法人高砂物産協会)、計3体について調査した結果、各NPO 法人の設立目的が異なるため3体のご当地キャラクターの活動における共通点は少なく、それぞれ管轄の設立目的に沿って活用されていることが分かった。

このようにご当地キャラクターの活用目的は多様であるが、今回調査した9つの事例は全て、その地域を代表する顔として存在している。単なる宣伝ツールでは無く、それぞれの特性や設定が詳細まで練られており1体1体に強い思いが込められている。現状では主に地域の観光地化や認知度上昇に活用されている

が、地域の特色と想いを表現できるという強みを活かすことで、ご当地キャラクターは今後は地域のアイデンティティ強化と経済振興の両面で活用されていくと考えている。

参考文献

青木貞茂『キャラクター・パワー ゆるキャラから国家ブランディングまで』 NHK 出版 2014年
鶴見和子『内発的発展論』筑摩書房 1989年
内藤啓介・岡田豊・千野珠衣「各地の地域活性化事例から見た今後の地域振興の課題」『みずほ総研論集』IV号 みずほ総合研究所 2009年

発表者氏名：杉江千紘、小嶋鈴乃、則安知佐、柳谷愛
所属ゼミ：松本ゼミ

発表タイトル：ミャンマーの民主化と難民の将来—本国帰還をめぐる支援団体の動きに着目して—

発表概要：2017年現在、タイの難民キャンプで生活するミャンマー難民は10万人に及ぶ。軍事政権による迫害から逃れた彼らは、「帰国不可能」な存在であり、30年以上難民キャンプで生活してきた（久保 2014）。しかし、2011年以降ミャンマーの民主化が進んだことで、難民は「帰国可能」になったと言われている（ibid.）。だが、帰還後の安全や生活に不安を感じる難民もいる。

ミャンマーの民主化後、難民の帰還を促進しているタイ・ミャンマー両政府や国際組織に着目した研究が行われてきた。一方で、NGOなど実際に難民とかかわる支援者が難民の帰還をどう捉えているかにはあまり目を向けられてこなかった。本稿では難民支援団体に着目し、「タイのミャンマー難民の支援にかかわる各団体はどのように難民の帰還を捉えているのか、そしてそれは難民にとってどのような意味を持つのか」という問いのもとタイのメーソット、ミャンマーのミャワディで現地調査を実施した。調査対象はメーソットに活動拠点を置く5団体（国連機関のUNHCR、国際NGOのTBCとSVA、難民から構成される難民委員会のKRC、難民・移民のための診療所のMTC）と、ミャワディに事務所を置く1団体（カレン民族武装組織のKNU）である。

調査の結果、支援団体によって帰還の捉え方は以下

の3つに大別できることが分かった。1つ目は帰還を積極的に推進するというものである。UNHCRはタイ・ミャンマー両政府と共に、KNUと協力し今後も積極的に帰還事業を進めると述べた。

2つ目は帰還推進に慎重な姿勢を示すものである。TBCやKRCは政府主導の帰還事業に懸念を示し、難民自身が帰還を望んだ際に、安全に帰還できるための支援を行っている。

3つ目は帰還は全ての難民の選択肢ではないとするものである。SVAとMTCはタイへの滞在を望む難民への支援を中心に行っている。これらの多様な選択肢の存在は、「すぐに帰還したい難民」「帰還に対して慎重な難民」「帰還を望まない難民」の全てが取り残されずに支援を受けることにつながる。ミャンマー難民の背景や状況は多様である（久保 2014）ことを踏まえれば、難民に多様な選択肢を提供することは重要である。

しかし、今後は支援が帰還する難民に偏ることが懸念される。実際に、難民支援のための資金援助は帰還を推進する事業に集中している。それ以外の事業を行う支援団体は資金難のため、活動の縮小や、帰還事業への移行を余儀なくされている。難民の多様な選択肢を満たすためには、帰還事業のみに偏らない支援のあり方が考えられるべきである。

【参考文献】

久保忠行（2014）『難民の人類学』清水弘文堂書房

発表者氏名：露木理久

所属ゼミ：桐谷（熊田）ゼミ

発表タイトル：オリジナリティの力～ヨハネス・フェルメールを例に～

発表概要：オリジナリティ（originality）とは何だろうか。広辞苑には、独自性、独創性などと明記されている。

他とは違う、それだけにしかない特有の性質のことを指す。俗に言う“らしさ”のことだ。では、様々なオリジナリティがある中で、自分だけのオリジナリティを見出すにはどうすればいいだろうか。それは、他者との共通性という前提があるうえで初めて見出される。

ゼミを例にとってみよう。法政大学の国際文化学部には、桐谷（熊田）ゼミがある。“アートは国境を越える！？”をテーマにアートを通して文化研究を学ぶゼミである。論者が所属する桐谷（熊田）ゼミがゼミたり得る所以、つまりオリジナリティを保持できる理由の前提には、それが国際文化学部の国際社会演習に属しているということ、つまり他者との共通性がある。他のゼミが存在することや国際社会演習の一つであるという共有事項があることで、初めて一つのゼミとして認められる。そうして、時間をかけて、埋没しないオリジナリティを発揮することが可能となり、桐谷（熊田）ゼミ“らしさ”が生まれていく。つまり、オリジナリティとは、それ自体で生まれることは決してありえない。他者との関係性の中でしかオリジナリティは生まれないのである。

絵画においても同じことが言える。画家のヨハネス・フェルメールは、17世紀のオランダを代表する画家の一人である。「光の画家」と呼ばれ、自然の光を絵画に取り入れ自在に操り、日常生活の何気ない行為を絵画における一つの主題として新しく取り入れた風俗画というジャンルを作り上げた一人だ。

17世紀オランダには、西洋絵画史における大きな転換期の立役者であるレンブラントやデ・ホルホといった時代を彩る画家が数多くいた。後世にまで名を残す画家がひしめき合う中で、フェルメールが画家フェルメールたり得たのは、彼の作品が風俗画や風景画というジャンルに共通性を持ち、風俗画家として認められ、その上で埋没しないだけのフェルメール“らしさ”を持っていたからである。

本論文の狙いは、オリジナリティ（らしさ）の力を考察することにある。フェルメールがいかに共通性を持ち、その上で何をしたのか、そして17世紀のオランダ絵画の中のフェルメール“らしさ”、時代や国境を越えるフェルメール“らしさ”とは一体何なのか、絵画それ自体に求められるもの、そして観客は大きく変容したにも関わらず愛され続ける魅力とは何なのか論文を通して明らかにしていく。

発表者氏名：遠田梓
所属ゼミ：松本ゼミ

発表タイトル：ある地方圏の国際協力—なぜ山形のNGOは規模を拡大できたのか—

発表概要：国際協力NGO全体の半数以上が大都市圏に本部事務所を構えており、その傾向は20年前から変わらない(JANIC 2016)。大都市圏に国際協力NGOが集中する理由として3点が先行研究では指摘されている。第一に、人・物・金・情報が大都市圏に集積していること(埴淵 2005)、第二に、国際協力NGOの支援者や国際問題に関心の強い人々が大都市部に住むケースが多いこと(井上 2007)、第三に、地方圏では人口が少ないために国際協力NGOの支援者の規模の制約があること(埴淵 2007)が指摘されている。そして、上記の条件が地方圏にないために地方圏で国際協力NGOが活動することが困難だと考えられていた。しかしそのような状況の中でも、地方圏で活動を継続する国際協力NGOがある。地方圏で活動を行う国際協力NGOがどのように先行研究で指摘される困難を乗り越え活動を継続・拡大しているのだろうか。

本論文では、認定非営利活動法人IVYを事例にしてこの問いを明らかにする。IVYは、山形市に本部事務所を構え、地方圏に誕生した国際協力NGOで唯一年間1億円を超える活動規模をもつ。IVYにかかわる資料分析と、中心的に活動してきたスタッフへインタビュー調査を行い、活動の変遷を追った。結論は三点である。

第一に、全国的なNGOのネットワークに参加することにより、地方圏においても都心に集積する人・物・金・情報を獲得できている。第二に、大都市圏に住んでいた国際問題に関心の強い山形にゆかりのある人が活動の中心になったことによって、地方圏の国際協力活動が可能になった。第三に、公的な補助金の割合が多くなることで、相対的に自己収入金の重要度が下がり、大都市圏に比べて支援者が少ないという制約を乗り越える可能性が高まったことが考えられる。以上のように、地方圏にしながら、いかに大都市圏に集中する人・物・金・情報を取り込むことが、地方圏でも国際協力NGOの活動の継続・規模を可能にする。地方圏の国際協力NGOの活動の更なる継続・拡大のために、地方圏の中・小規模の国際協力NGOや、中心人物がいなくとも活動を行う国際協力NGOなど、条件を変

えた議論が期待される。

井上 団「日本の地域社会における国際協力 NGO の役割と展望——地方自治体等との連携・協働による地域の国際化に向けて——」『東洋英和大学院紀要』、東洋英和女学院大学大学院、2007 年。

埴淵 知哉「日本における NGO ネットワークの編成」『人文地理第 57 巻 5 号』人文地理学会、2005 年。

埴淵 知哉「NGO と『地域』とのかかわり——日本の地方圏に所属する NGO による『地域からの国際協力』——」『地理学評論』日本地理学会、2007 年。

JANIC『NGO データブック 2016 数字で見る日本の NGO』、外務省、2016 年。

発表者氏名：小林早恵

所属ゼミ：曾士才ゼミナール

発表タイトル：地域活性化におけるコンテンツツーリズムの有効性

発表概要：近年、映画のロケ地巡り、アニメの聖地巡礼など物語性のある作品に惹きつけられ観光地に赴く旅行者が増え、コンテンツツーリズムという観光形態がブームとなっている。持続性、利益還元率の面では、課題も多く指摘されているが、それでもコンテンツツーリズムが注目され続けるのはなぜか。経済面だけでは計れない効果を探るべく、東京都立川市と、佐賀県を選定し、コンテンツが地域の中でどのように作用しているのかを調査、観察した。本論では、調査結果を踏まえ、地域活性化におけるコンテンツツーリズムの有効性を明らかにする。

現地調査からコンテンツツーリズムは、「コミュニティ意識の醸成」と「地域のブランディング」に効果的であるとわかった。コンテンツという共通の物語を持つことで、地域住民の中にコミュニティ意識＝地元愛のようなものが醸成される。また、佐賀県が戦略的に行っているドラマ中のプロダクトプレイスメントや、立川市のアニメ街づくり計画など、物語を通じて外部に訴求したいイメージを打ち続けることで地域ブランディングの手法にもなり得る。

しかし、いくら上記のような効果が期待されるとしても、コンテンツツーリズムの課題である「持続性」は

必要だ。また、この観光形態はドラマやアニメ制作会社など地域にとって外部のアクターが大きく関係するため、時として地域の伝統や景観を損なうなど、地域住民から反対の声が上がることも多い。そこで、山田氏がいうところの「観光地マーケティング」という考え方をを用いて、より効果的に地域をブランディングし、持続的に発展し続ける方法を、沖縄の戦後から現在に至る観光戦略を成功例として、立川市、佐賀県の事例と比較し、持続的に発展を続ける方法を検討する。さらに、コンテンツツーリズムの今後の展望として、地域発信のコンテンツの可能性を取り上げる。最近ではドラマやアニメなど、外部の作品とタイアップするのではなく、自治体や地域住民自ら作品を作り出していくという傾向も増えている。この手法では地域を熟知した者が主導権を握るため、地域住民との間に齟齬が生まれることなく、地域の課題を解決できるという利点がある。個性的な自治体の取り組みを例に、地域振興においてコンテンツツーリズムを有効的に取り入れていく方法を探る。

参考文献

岡本 健『コンテンツツーリズム研究』福村出版 2015 年

酒井 亨『アニメが地方を救う！？』ワニブックス PLUS 2016 年

増淵 敏之『物語を旅するひとびと——コンテンツツーリズムとは何か』彩流社 2010 年

山田 雄一『観光まちづくりのマーケティング』学芸出版社 2010 年

発表者氏名：ラージ夢

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表タイトル：東京・葛西におけるインド人社会の変化—10 年以上暮らす定住者の視点から—

発表概要：東京・新大久保のコリアンタウンや横浜の中華街で知られる外国人街の一つに、東京・葛西のインド人街がある。現在葛西には 2,600 人を超えるインド人が生活しており、その数は在日インド人の約 10% とまで言われている。

葛西のインド人増加は、2000 年を契機としたインド

人 IT 技術者の大量流入がきっかけである。彼らは今や葛西のインド人社会を代表する存在となっているが、日本企業の要請でインドから派遣され 3 年未満で帰国してしまうケースが多い (澤、南埜 2009)。その一方、永住権を持った長期滞在者の人口がこの 10 年間で約 12 倍も増加していることから、葛西のインド人社会を語る上で長年暮らすインド人 (以下、定住者と呼ぶ) の存在は無視できない。

そこで本論文は、既存研究では語られてこなかった葛西に 10 年以上住み続けるインド人定住者の視点から、IT 技術者とのかかわりやインド人組織での活動に着目し、人口増加に伴う葛西のインド人社会の変化を明らかにすることを目的としている。インド人である筆者の父親などの伝をたどって協力者を探し、インド人定住者 7 人に半構造化インタビューを行い、以下の結論を導いた。

第 1 に、定住者は IT 技術者と日常的にかかわってはいなかった。IT 技術者は滞在期間が短く、数か所の公団住宅に密集して居住している状況に加え、IT 技術者＝南インド出身者というイメージが両者の関係を疎遠にしていた。定住者は北インド出身者が多く、もともと南インド人とはかかろうとしない人もいた。同じ葛西で生活をしながらも両者には見えない壁が存在していたといえる。第 2 に、葛西がインド人街としてマスメディアで紹介されたことで日本人来訪者が増加し、定住者と日本人とのつながりが深まった。2000 年以前はインド人同士で助け合いながらどうか手助けしてくれる日本人を探していた。2000 年以後は都内だけでなく九州からも足を運ぶ人や、自ら手助けをする日本人が現れ、日本人と共に葛西のインド人街化を目指す組織が発足した。このことから定住者は IT 技術者と深いかかわりはなかったが、IT 技術者の大量流入による間接的な影響により、非インド人社会への結びつきを強めたといえる。

本論文はインド人定住者数人にインタビューを行ったものであり、その発言に代表性はない。また IT 技術者にインタビューを行わず、定住者視点のみの分析であった点には限界がある。しかしこれまで IT 技術者に焦点を当てた研究が多い中で、大量流入に伴う影響や副次的な変化を明らかにし、外国人社会を同質な

集団として捉えることでは理解できない点があることを示したことには新奇性があるといえる。

澤宗則、南埜猛、2009「現代移民の多様性：グローバルシティ・東京におけるインド人集住地の形成 — 東京都江戸川区西葛西を事例に一」国立民族学博物館調査報告 83、 41-58、2009-03-31。

発表者氏名：細井はるな、大竹智志

所属ゼミ：松本ゼミ

発表タイトル：タイの移民教育はどのように変化しているのか—ミャンマー人移民の子どもたちに開かれている将来—

発表概要：2009 年時点で、タイには約 300 万人のミャンマー人移民がいたと言われている。本研究ではミャンマー人移民の子どもに対する教育の現状を明らかにするとともに、ミャンマーの民主化が母国の雇用や安全を改善する可能性がある中で、ミャンマー人移民労働者の子どもにどのような将来が開かれているのかを現地調査をもとに論じる。

ミャンマー人移民労働者の子どもは、2005 年以降制度上はタイの公立学校に通えるようになったが、言葉の壁などもあり多くは非正規の移民学習センター (MLC) で学んできた。全国に 112 校ある MLCのうち 46 校があるのが、ミャンマーとの国境の町メソットである。筆者らは、ミャンマー人が人口の 4 分の 3 を占めるメソットで 10 日間の現地調査を行い、一次資料の収集とともに、MLC、移民教育に携わる教員の組織、タイの公立学校、教育省の出先事務所に協力を依頼して、教員・親・子どもなど 28 名にインタビューを行った。結果は以下の通りである。

第 1 に、先行研究がほとんどなかったミャンマーの民主化以降の移民教育は、子どもたちが自身の希望に合わせて将来の選択ができるものに変化していた。MLC では公的に認められていないカリキュラムを使用していたため、子どもたちは公立学校への編入ができなかった。しかし、2014 年よりタイ・ミャンマー政府がそれぞれ認可した 2 つのカリキュラムが MLC に導入された。子どもたちは将来の希望に合わせてカリキュラムを選択し、それを修了すると各国の公立学校

への編入が可能になった。

第2に、親や教員は子どもたちが自由に進路を選択するためのサポートをしている。先行研究では、親は子どもを働き手として捉えていると指摘されてきた。だが、インタビューでは「できる限り子どもに教育を受けさせたい」という親の考えを聞くことができた。また、MLCの教員は無給や低賃金でも子どもたちのために尽力していた。

第3に、子どもたちの教育を受ける権利を守るためには、教育政策だけでは限界があるといえる。現在移民労働者への取り締まりが強化され、教員や親がミャンマーへ送還される可能性がある。そのため、子どもたちはタイで教育を受ける機会を奪われたり、希望する進路を選択できなくなったりする場合がある。

調査では、子どもたちの将来にミャンマーの民主化や経済成長が直接的に影響したという意見を聞くことはなかった。一方で、ミャンマーへ戻りたいか、タイに残りたいかの希望に合わせて進路を選択できるようになり、子どもたちの将来の選択肢は広がっている。しかし、子どもたちが自由に進路を選択するためには、教育政策だけでなく、それを支える親や教員への支援が必要である。

本研究では、MLC4校と公立学校1校の調査にとどまり代表性を持たせることはできないが、先行研究が少ないミャンマー民主化後の移民教育の変化を示した点で意義があるといえる。

発表者氏名：阪本 由布

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表タイトル：台湾先住民のアイデンティティ—皇民化教育を受けた世代の考察から—

発表概要：本論文では、日本が台湾を植民地支配していた1895年から1945年までの50年間に焦点を当て、長い間、日本を含め様々な国々に支配されてきた「台湾の人々がどうアイデンティティを形成してきたのか」を日本植民地支配の歴史、戦後の歴史を踏まえた上で明らかにする。

まず初めに、台湾には「四大族群」という言葉が誕生した。民主化以降の台湾において台湾社会の文化的多様性と向き合おうとする主張が台頭した為である。族

群はエスニック・グループを意味し、ここでいう四大は、台湾に元々暮らしている「先住民」・祖先が福建省南部出身者である「福佬人」、客家語を母語とする漢族の一氏族である「客家」そして、台湾の光復つまり日本の敗戦後に中国大陸から移り住んできた「外省人」のことを指す。

台湾は日本にとって初の植民地として、日清戦争以後、敗戦まで半世紀もの間、植民地支配を受けた。筆者は特に1937年の日中戦争以降の「皇民化政策」を受けた台湾の人々に注目したい。皇民化政策とは、おもに十五年戦争の時代に朝鮮・台湾・沖縄や日本軍占領地などで、住民を大日本帝国の忠良な臣民として戦時動員体制に組み込むために実施された一連の政策を指す。台湾の代表的な研究者である戴國輝は、日中戦争以降の皇民化政策に関して「本格的な侵略戦争に対応するために台湾人を日本の皇民に改造しようとした」と述べている。十五年戦争で知られる満州事変や太平洋戦争において、台湾の人々は日本人の同胞として戦争に動員させられた。現在メディア等を通して「親日的」と台湾は認識されている。その理由のひとつとしてお年寄りに日本語を話せる人が多いことが挙げられる。流暢に日本語を話すその世代こそがまさにこの皇民化政策下の教育を受けた人々である。皇民化政策下では具体的に、新聞の漢文欄廃止、台湾の母語の使用禁止、そして日本語の強制使用などが挙げられる。徹底的な皇民化教育を受けたその世代は一般的に植民地教育の効果が現れた世代と表現され、その世代の親達の世代は、日本に統治され抵抗した歴史をもち、生まれながらにして日本の皇民化政策下で教育を受けた子ども達との意識の差は大きかった。天皇の赤子として戦争に志願し台湾人日本兵として犠牲になった台湾の若者が多く存在している。特に「高砂義勇隊」の名でも知られる台湾の先住民の青年達が多く犠牲となった。彼ら先住民は、もともと文字をもつ漢民族や本省人と比べて、文字をもたなかったため皇民化政策下の日本語教育により日本人意識が強かったと述べられている。戦後、80年代になり、世界で民族運動の動きが活発に行われるまで、台湾の先住民族が権利を訴える動きは現れなかった。そこで筆者は、文字を持たなかった先住民にとって、日本語とは、戦争とは、

日本とは何かということをも皇民化教育を受けた世代に焦点をあて、明らかにし、現在の彼らのアイデンティティを考察する。

発表者氏名：土屋麻梨恵

所属ゼミ：月野楓子

発表タイトル：自立する女性ボールルームダンサー～男女雇用機会均等法第一世代から～

発表概要：「社交ダンス」は「ボールルームダンス」の日本での呼び名である。ボールルームダンスは明治時代に社交とダンスの最先端として輸入されたが、一般大衆に浸透し変遷する過程では「いかがわしい」「不健全」「スキャンダラス」などのイメージが常に付きまとっていた。高度経済成長期も終わりに近づく1970年代になると、ボールルームダンスは若者にとってはすでに流行遅れとなり不健全なイメージだけが残ってしまった。ボールルームダンスのイメージアップを困難にしていた風営法の一部改正は1984年に行われるが、それによってイメージが刷新されたわけでは決してなかった。ボールルームダンスの健全さをアピールするため、スポーツとしてのボールルームダンスを広めるにあたり、ダンス界はパーティー情報やダンスホール情報を発信するよりも競技会の成績を主として発信する方向へ変化したのが1986年以降である。

発表者は以前の研究で、第一次男女雇用機会均等法が1987年に成立したことに注目し、ダンス専門雑誌のインタビューの分析を行った、そこから、同法施行後の「第一世代」と呼ばれる1987年から1992年の女性のプロボールルームダンサーの生活の傾向を明らかにした。プロボールルームダンサーという職業は専門職として女性を支えることに加え、伝統的な性別役割分業から前進し、男性と協力する新たな生活スタイルを早くに作り上げた。また、キャリアと子ども両方に対するアプローチの仕方への模索も早くに始まったことがわかった。ダンス専門雑誌の分析から、均等法第一世代のダンス界における大まかな生活の傾向を掴むことができた。しかし、資料として用いたダンス専門雑誌は、ボールルームダンスの技術やダンス教室の宣伝、パーティー情報などを中心に制作されており、プロボールルームダンサーの生活が垣間見られるイ

ンタビューはごく一部にすぎないものであった。そこ本発表では、実際に均等法第一世代にプロ入りし現役時代を過ごした女性プロボールルームダンサーへのインタビューを通じて、より具体的な生活の様子を明らかにし、またその生活がボールルームダンスと男女雇用機会均等法からどのように影響を受け作り出されたものなのか検討する。

参考文献

朝倉むつ子『均等法の新世界』有斐閣 1999年
永井良和『社交ダンスと日本人』晶文社 1991年
横山文野『戦後日本の女性政策』勁草書房 2002年

発表者氏名：久松翠、杉田優花、小野智絵里

所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイトル：集团的日本の再考～なぜ窮屈さを感じるか～

発表概要：1. 本論の目的

本論の目的は、我々が感じた窮屈さが日本社会の様々な現象から、多くの人に共通したものであるとみて、それはなぜ起きているのか、そして日本の文化を享受しながらも自分らしく生きるために何ができるのかを明らかにすることである。SA・留学生との交流を通じ、我々には外国人に対して自分を表現することが、日本人に対するより楽であるという共通認識があった。そこで、日常の会話に反映されている文化を露わにし、文献から様々なモデルを使用し分析した。そこから明らかになったのは、集団主義の日本がこの窮屈さを生み出している、という仮説とは異なる日本の現在の姿であった。

2. 先行研究とそれによる分析

まず、日本の文化とコミュニケーションスタイルがどのようなものかについて見ていく。Lewis (2006:27)によると、世界の様々な国の文化は、線状行動型、複合行動型、反応型の三つに分類できる。このうち、日本は反応型に属し、協調・尊敬・聞くことをその特徴とする。また、Hofstedeは、人々の集団へ統合される度合いが高いものを集団主義的としたが、同じコミュニティの人間を大切にしている日本は、このHofstede, Hofstede, and Minkov(2010:90)の類型論によると、集

团的と言われることが多い。

集団主義的社会的性格を反映した特徴的なコミュニケーションスタイルが、会話に見られる。『人間関係本位主義』(原, 2013)と表現される、意見を言うことは相手の面子を失うことにつながるという考え方により、上下関係や自分と周りとの関係を重んじて、はっきりとした意見を言わないのがこの例と言えよう。

しかし、一方で Matsumoto (2002) は、他者を重視する集団への統合のされ方は、ここ 30 年日本で大きく変わってきており、もはや集団主義とは言えないと主張する。集団を重視する価値観を維持しつつも、個々の思考や行動を歓迎する社会へ変化しているというのである。我々は日本はこの、新しい社会への過渡期である、ということ強調したい。過渡期であるゆえに、日本の中でもそれは、様々な文化集団、地域、そして個人により、移りの度合いが非常に異なるのである。だからこそ伝統的価値観と制度、その中で一個人としてありたいという欲求との矛盾が、窮屈さを感じさせる原因なのである。

この個人的であり、同時に集団的である社会へのシフトを成功させるための第一歩となるのが、異なる文化の価値観やそれを反映した言語を学び、その体験を通して、普段意識していない自文化を客観視し、様々な価値観を理解し許容する力を育てることである。このような理由から、国際文化学部の第三言語教育の見直しを提案したい。(1090 字)

参考文献

石井敏・久米照元 (2005) 『異文化コミュニケーション研究法』

原聰(2013)『日本人の価値観 異文化理解の基礎を築く』. 鎌倉：かまくら春秋社

Hofstede, Geert, Gert Jan Hofstede and Michael Minkov (2010) *Cultures and Organizations Software of the Mind* McGRAW: W-HILL Book Company (UK) Limited

Larry A. Samovar, Richard E. Porter, Edwin R. McDaniel (2012) *Intercultural Communication: A*

Reader, Thirteenth Edition. Boston: Wadsworth, Cengage Learning.

Richard D. Lewis(2006) *When Cultures Collide Leading Across Cultures* “A major New Edition of the Global Guide.” Boston: Nicholas Brealey Publishing

発表者氏名：青木宏太

所属ゼミ：松本ゼミ

発表タイトル：戦前日本の中等教育の大衆化—桃園尋常高等小学校を事例に—

発表概要： 1990 年以降、EFA (Education For All) の影響によって国際的な教育援助は基礎教育、特に小学校教育に焦点が当てられてきた。ユニセフの世界子供白書 2016 によると、開発途上国における初等教育の就学率が 82% に対して、中等教育（現在の中学、高校に相当する）の就学率は 34% である。現在では 99% の子供が中学校に通うことのできている日本だが、大正時代における中学校への進学率は 15% 程度であり、裕福な家庭環境の子供などの限られた子供のみ中学校に通うことのできる時代があった。そこで、本研究では明治後期から昭和初期にかけて、日本ではどのように中等教育が大衆化していったのかを明らかにする。

先行研究では、現在の中学校に相当する学校は、戦前の旧制中学校ではなく、明治後期から昭和初期に存在していた高等小学校（初等教育を完成させることを目的とした二年制の学校）としている。その理由は、高等小学校が地域社会と直接結びついて設置されるという大衆的な性格を持ち、実業科目（農業科や商業科など）を必修科目としていたためである（三羽 1993）。しかし高等小学校についての研究はあまり存在しない。そのため、筆者は地元の東京都中野区に 140 年以上存在する桃園小学校（旧・桃園尋常高等小学校）の創立記念誌や中野町誌、区史などの一次史料を用いて、上記の問いに取り組んだ。結論は以下の二点である。

第一に、中学校が小学校に併設されることで中等教育の大衆化が進んだのではないかと考えられる。桃園小学校では 1886 年に、尋常科（現在の小学校に相当

する)に加えて、高等科(現在の中学校1、2年に相当する)も併設された。1926年に政府が高等科に実務教育の思想を導入したことで、高等科での学習が全ての青年にとって必須であると考えられるようになった。

第二に、地元の人たちの教育への期待が中等教育の大衆化につながったと考えられる。高等科では尋常科よりも実験や実習が多いため、施設や器具などの費用がかかるものを必要としていた。しかし、1926(大正15)年度の中野町予算の半分が教育費に当てられていたことから、地元町長と地元の人たちの教育に対する理解と期待があったと考えられる。桃園小学校では町長の支援を受け、理科の実験方法を映画に撮り、全国の学校へ披露したり、色々な実験器具を揃えてもらったりしていた。また、生徒の保護者を学校に呼び、生活面での指導に関して先生と話し合うという教育懇話会といったものを毎年開催していた。

初等教育の確立によって開発途上国の中等教育支援に徐々に関心が寄せられる中で、「貧しかった頃の日本」の経験を振り返ることは、今後の開発援助を現地の人にとってより良いものにするという意味で参考になる。本研究は代表性のない一つの学校に着目した事例研究のため限界があるが、あまり研究されていない高等小学校の立ち位置を再考したという点で意義があると言える。

三羽光彦『高等小学校制度史研究』法律文化社、1993年。

発表者氏名：高橋 洋朝

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表タイトル：沖縄における遺骨収集——身元を判明することの意味——

発表概要：沖縄で実施されている戦没者の遺骨収集において遺骨の身元を究明することの意味を分析することで、「戦没者」という集団がどのような性質を持っているかを明らかにする。

「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」では戦没者の遺骨収集の推進が国の責務にあたることが示されている。1937年7月の盧溝橋事件から1945年9月の降伏文書調印までの全戦没者数は約310万人で、この

うち沖縄を含めた海外戦没者は約240万人とされる。現時点で240万人のうち約半数である127万柱の遺骨が収容された。しかし、未だに収容できていない遺骨の数は膨大であり、敗戦から72年経った現在では遺骨が風化しているために全ての遺骨を収容することは難しいとされる。さらに遺骨となった戦没者の多くは身元を判明することができずほとんどの遺骨は「無名戦没者」となった。

日本軍とアメリカ軍の大きな戦闘が行われた沖縄でも未だに収容されていない遺骨の問題が存在する。沖縄での激しい戦闘は民間人をも巻き込み、日本人の戦没者は約19万人と推計される。この戦闘が終了したのち、沖縄は米軍に占領されることとなったが、米軍の許可のもと民間人による遺体の収容が行われた。その後も国と民間人によって遺骨収集が行われ、現在未収容とされる遺骨は2,875柱である。国から委託された土建会社による遺骨収集では重機によって土を掘り起こし、土の中から遺骨を探し出すが、この方法だと何人もの遺骨が入り混じるためその遺骨が誰なのか一層判別が困難になる。一方でなるべく遺骨の身元を判明に繋げようとする動きもある。NPO法人ガンマフヤーが行う遺骨収集方法は重機に頼らないもので、なるべく遺骨をできる限り身元判明に繋がるように掘り出し、遺族のもとへ返すことを目的としている。また、昨年春に成立した「戦没者遺骨収集推進法」では軍人の遺骨より身元判明が難しい民間人の遺骨にもDNA鑑定が行われることとなった。

戦没者の遺骨の身元を判明することにどんな意味があるのだろうか。沖縄の戦闘で亡くなったのは軍人だけでなく、民間人や朝鮮から徴用・帯同させられた人びとも含まれる。民間人は戦闘の中で日本軍人に自決を強制させられたり、避難している壕から追い出されるといった経験をした。「戦没者」という言葉は軍人と民間人をひとまとめにしてしまう。これは遺骨収集においてその遺骨が民間人なのか軍人なのか判明されないことによって助長される。また、沖縄戦では朝鮮や韓国から徴用させられた人々がいるが、先述した「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」で記される「戦没者」とは「我が国の戦没者」であり、朝鮮人や韓国人は含まれていない。ここでも沖縄で収集された

遺骨が朝鮮人や韓国人である可能性が深く考慮されていないことで、「戦没者」という集団の違和感を濁すことに繋がっている。この論文では遺骨の身元を追求することが、私たちが何気なく使っている「戦没者」という言葉に疑問を投げかけることに繋がることを検討している。

発表者氏名：長田 花純

所属ゼミ：桐谷ゼミ

発表タイトル：ソ連崩壊から見るロシア人女性像

発表概要：本論文では、ロシアのサンクトペテルブルクでのSAの経験で関心を持ったロシアの「女性」をめぐる諸相をとりあげてロシア人女性像を論じます。ロシア人女性の友人と接するなかで、彼女たちが日本人女性と異なった感性を持ち、独特な美意識を持っていることに気が付きました。もともとファッションやメイク、美意識について興味があったのですが、ロシア人女性の美意識がいかんにして育ってきたのか知りたいと思うようになったのがきっかけです。

彼女たちと話す中で見えてきたのは「CCCP」、ソビエト連邦の存在です。年配のロシア人との会話では、「CCCPのときは、、、」といった話題になることが何度かありました。また、ソ連時代を経験していない若い世代でも国の歴史やソ連時代のことをよく知っているという印象を受けました。ソ連は現代のロシア人の心にまだまだ根づいていました。

アメリカ映画などでソ連時代の女性は冷たく、硬派に描かれることが多いことを思い出しました。しかし私が接してきたロシア人の女性たちは決してそんなことはなく、むしろ自由奔放であったといっても過言ではありません。ファッションやメイクにしても自由に楽しんでいる様子でした。

ここから、現代のロシア人女性の印象とソ連時代のロシア人女性の印象には差があるのではないかと考えました。ソ連という時代が彼女たちにどのような影響を与えたのか。いかんにして強く自由な美意識が育ったのか。この論文ではソ連の歴史に触れながら探っていきます。

論文の大まかな構造としては、前半ではソ連の歴史を辿りながら、ソ連時代の女性たちを考察し、ソ連崩

壊後の彼女たちを取り巻く社会・文化状況についての変化を見ていきます。そして後半では、ソ連崩壊後のロシア人女性の美意識について深く考えます。また日本人女性とも比較したいと思います。

五十嵐徳子さん著「ロシアで生きる——ソ連解体と女性たち」(東洋書店、2014年)では、ロシアに生きる女性にスポットを当て、ソ連崩壊後の女性たちの生活の変化を描いています。また、五十嵐さんの著書、論文では「現代ロシア人の文化・芸術への意識」、「ロシア人女性の家庭と労働に関する意識」などをテーマに、ロシア人女性に関する研究が多く、私の論文の先行研究として参考にし、議論を展開していきます。本研究テーマであるソ連時代とロシア人女性像を分析し、その研究成果を通して、日本人女性のユニークな美意識を新たに見出せるのではないかと期待しています

発表者氏名：浅野 聖仁、増田 茜音、中津留 怜奈
所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイトル：第二言語習得理論と英語教育への提言

発表概要：本論の目的は英語を「学習」するだけでなく、「獲得」する教育を提言することである。

Krashen(1982)によると、言語習得には「Learning(学習)」と「Acquisition(獲得)」の2つを区別するべきだと主張している。「Learning」は意識的に言語知識を学ぶことであり、「Acquisition」は無意識的に言語の正確さを感じることであり、またZafar(2009)は、「Acquisition」を構成するのは良い「Learning」であると主張している。文部科学省の学習指導要領(2017)では外国語科の目標はコミュニケーション能力の育成と異文化理解とされている。しかし「今後の英語教育の改善・充実方策について」(2015)では現代の英語教育は「どれだけの語彙や文法等の知識を身に付けさせたに重点がおかれている」と指摘されている。従って私たちは「学習」に関しては十分な教育がなされているが、「獲得」に関する教育は少なく、外国語科の目標を達成するためには言語を「獲得」する教育を行う必要があると考える。そこで、日本の英語教育に関する知見を得るため外国の英語教育の事例と比較した。

文部科学省(2009)によると日本と同様に英語圏の植民地となった歴史がない韓国や中国では約15年前から初等教育において英語を必修科目として導入している。韓国の英語教育では、日本よりも多く習得する語彙、単語や文法の反復学習、4技能を均等に学べる教科書構成が利点として挙げられる。北欧では少人数制で英語の授業を行っており、コミュニケーションを重視している。特にデンマークでは初等教育の段階から英語で授業を行っている。また、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州では英語を言語知識だけではなく、他教科と組み合わせて指導している。このように英語での発言する機会が増えればアウトプットが多くなり、英語を「獲得」できると私たちは考える。

英語を「獲得」するために、教科横断的な指導をすることを私たちは提案したい。英語の授業において、他教科の既習の内容を英語ではどう表現するのかを教えるのである。具体例を挙げると、初等教育では英語で四則の計算を行う、英語で国名や国の位置を教える、などがある。このような指導をすることで、現実生活で実際に使用できる語彙などを学ぶことができる。また、内容重視の授業では、コミュニケーションを通してアウトプットが可能となるため、英語の「獲得」につながると考える。

加えて、授業形態については15名以下の少人数制の授業を提案する。少人数制により一人あたりの発言量が増えることでアウトプット量も増える。また、少人数制ならば教師一人がもつ生徒が少なくなるので各生徒の適性について把握しやすくなり、効果的な教育が可能となる。これらの方法により、言語を「獲得」することを重視した学習が見込める。

発表者氏名：楊 金 (ヨウ キン)

指導教員名：中島成久

発表タイトル：中国に進出した日系企業における海外派遣事前研修に関する考察—X社の事例を中心に

発表概要：1 タイトル

「中国に進出した日系企業における海外派遣事前研修に関する考察—X社の事例を中心に—」

2 研究目的

海外派遣者を対象に実施される事前研修に焦点を当て、X社の事例を中心に、その有効性と問題点を論じることによって、日本企業の事前研修のあり方を明らかにする。また、在中日系企業における海外派遣事前研修に、有用な改善策を提示したいと考えている。

3 背景

(1) 90年代以来、日本企業の中国向けの直接投資が急速に拡大し、中国へ進出する日本企業が年々増える傾向にある。これに伴い、技術や経営などの移転のため、本社から海外拠点に派遣された日本人も増えてきた。

(2) 異文化が接触する場合において、文化の差異による摩擦は避けられない問題である。近年、異文化理解のために、日本企業も異文化交流を重点に置き、海外派遣者向けのトレーニング、事前研修が多く行われている。

4 研究の内容

(1) 中国に進出する日本企業における異文化摩擦、コミュニケーション問題、研修制度などについて、先行文献を振り返る。

(2) X社の事例分析を中心に、日本企業がどのような形で事前研修をやっているかを明らかにする。

(3) 日本人が中国での業務をより効率的で、スムーズに進むための改善案を提示する。

5 具体的な研究の進め方

(1) 先行文献の収集・分析。

(2) インタビュー調査：X社の中国支社における日本人社員と現地中国人社員に対して研修制度、実施効果などについてインタビュー調査を行った。X社の社員で中国に派遣された従業員に対するインタビュー調査

発表者氏名：原 友理枝 (ハラ ユリエ)

指導教員名：主査 熊田泰章先生、副査 佐藤千登勢先生

発表タイトル：映画『鏡』に創造されたタルコフスキーの詩的世界と表現手法

発表概要：旧ソ連の映画監督アンドレイ・タルコフスキー（1932-1986）の作品は、長回しによる静謐で抒情的な映像と明確な物語展開や論理的な繋がりのないストーリーを特徴とする。詩情あふれる映像の印象や、感情的、神秘的な性質の物語内容であることから、作品は詩的映画として研究者、評者、鑑賞者から受容されてきた側面がある。

詩とは、作品の抒情的な内容や人の内面に直接訴える感覚的なものとしてだけではなく、外的な表現において大きく2つに定義付けられると考える。まず、詩は人の感情や人を取り巻く状況つまり状況を凝縮し表現するもの、次に、詩は形式を持ちその連関によって意味を生み出すものといえる。

前者の状況を凝縮する詩のモチーフとしてタルコフスキーが映画の中で利用しているのは、自然や物の描写である。世界の四元素といわれる火、風、水、土や、植物、窓、本などの描写が詩的機能を果たしている。これらのモチーフは、登場人物の内面の感情と登場人物の置かれた状況が凝縮され、物語っている。タルコフスキーによるこの詩的表現に対し、筆者は「詩的表現手法」とし、分析を行いモチーフに凝縮された状況の展開を試みる。

後者の形式や連関を持つ詩の特徴として、『鏡』では「詩的表現手法」が機構として作品全体に張り巡らされている。「間違いなく詩的」であるタルコフスキーの作品は、一般的な劇映画のようにストーリーの流れを追って、制作者が意図した内容を受容していくものではない。鑑賞者自身が詩的連関から意味を読み取っていく必要があるのである。一方、これまでの先行研究では、作品全体に仕込まれている「詩的表現手法」の機構としての解明が不十分であるように思われる。

発表者氏名：年静

指導教員名：佐藤千登勢

発表タイトル：エドワード・ヤン監督の作品における日本表象

発表概要：エドワード・ヤン監督作品における日本表象

本研究の目的はエドワード・ヤン監督の作品における、日本に関する表象について考察することである。監督全作品の中で日本を表象した部分をすべて抽出し、先行研究や監督の言葉を参照しながら、エドワード・ヤン監督の映画世界の中の日本表象を探求する。

台湾映画では、日本にかかわるシーンが多い。それは、日本統治時代に生まれた台湾映画は、日本統治という背景を持つので、日本は台湾映画の中で、重要な存在であり続けてきたのである。エドワード・ヤン監督は台湾ニューシネマ時代の代表者として、台湾映画の歴史の流れの中で、欠かすことのできない偉大な監督の一人である。彼の作品当時の台湾社会の残酷さを表現し批判しているという特徴がある。そして、エドワード・ヤン監督の作品における日本表象はそれまでの台湾映画で描かれた日本表象とは傾向を異にしているため、きわめて興味深いものだ。

したがって、本研究ではエドワード・ヤン監督作品の中の日本表象を分析し、監督の表現に通じ、当時、台湾にある日本の風景とその日本表象が映画のなかにどのような機能として生かされたのか、その意義を論じたい。

第一は、各時代の台湾映画における日本表象を整理する。第二は監督の履歴を紹介する。

エドワード・ヤン監督の作品は、社会転換期を迎えていく都市（台北）の人びとの生活の矛盾や複雑な人間関係を表現することに長けている。第三は、エドワード・ヤン監督の作品で登場した日本表象について、台湾に残された日本家屋、台湾現代都市に影響を与えた日本、映画における日本人の表象、映画における日本の表象4つに分類し分析を試みる。

発表者氏名：原口 直希

指導教員名：鈴木靖先生

発表タイトル：台湾人若年層による日本のポップカルチャー受容に関する研究 —台湾人が抱く日本に対する「親しみ」の変遷—

発表概要：本研究は、台湾人若年層が抱く日本に対する「親しみ」について、ポップカルチャー受容の側面から考察するものである。本研究が対象とする台湾人若年層とは1980年代、90年代生まれを指し、「親し

み」の訳語は「親しい、仲良しである」を意味する「親近」を使用した。ポップカルチャー受容とはアニメ、マンガ、テレビドラマ、ビデオゲーム、ライトノベルの受容を指す。

本研究の目的は、日本のポップカルチャーは台湾人若年層による「親しみ」の増加に寄与しているか、という問いに答えを出すことである。これに対し、「日本のポップカルチャーは台湾人若年層による日本に対する「親しみ」の増加に寄与している」という仮説を立てた。そして定量調査、定性調査を通して検証を行い、答えを導いた。

本研究では、現在台湾に存在する政府が実効支配している台湾島、澎湖諸島、金門島、馬祖島および近隣離島群を研究の地理的範囲とし、1945年の中華民国光復後の台湾、特に80年代後半に始まる民主化以降の台湾を研究の時間的範囲とする。

定量調査では国立中山大学社会学研究科の大学院生の協力を得て、2016年11月20日から3日間Webによるアンケート調査を行い、1,066名から回答を得た。その結果、回答者の81.5%が、日本のポップカルチャーは「親しみ」の増加に寄与していると回答した。またどのようなコンテンツを好むかについては、アニメが32%、マンガが28.1%、テレビドラマが24.9%となった。

さらに定量調査の結果を分析するため、台湾人留学生4名（男性1名、女性3名）と台湾人研究者1名（男性）に対して、半構造化インタビューによる定性調査を行った。この結果、「親しみ」の増加に関して、回答者全員からポップカルチャーによる影響が肯定される一方、かつての哈日族世代（70年代生まれを中心とする日本大好き族。90年代に登場し、台湾で社会現象ともなった）に見られた日本への「憧れ」が肯定されなかったこと、しかし日本は「他人事とは思えない」存在である、という2つの回答を得た。

本研究の結論としては、台湾における日本のポップカルチャーはアニメ、マンガ、テレビドラマといったコンテンツが特に好んで消費され、日本への「親しみ」の増加に寄与している、という結果になった。その一方で、日本のポップカルチャーは台湾人による主体的な取捨選択とローカライズを経て、台湾社会に息づい

ていることも明らかになった。現地での取捨選択とローカライズは、哈日族世代が若年層の時代には見られない現象であり、当時は一方的な受容のみであった。こうした変化が、「憧れ」は肯定しないが、日本は「他人事とは思えない」存在という意識の背景と考えられる。

本研究は、ポップカルチャー受容に関する考察を通して、台湾人若年層が抱く日本に対する「親しみ」が、時代と共にその内容を変化させていることを、明らかにした。

発表者氏名：汪牧耘（オウマキウン）

指導教員名：主査・曾士才、副査・松本悟

発表タイトル：中国貴州省・石門坎の観光資源化プロセス-価値を見出す多様なアクターの考察-

発表概要：本研究の目的は、政府主導の観光開発が進められている中国貴州省の石門坎を事例に、すでに観光地として確立した後では見えにくい資源化プロセスを示すことである。

貴州省威寧県の石門坎は、20世紀初めにキリスト教の宣教師の訪問をきっかけに、大きな教育の成果を収めた歴史で有名になったミャオ族の居住地である。2017年、貴州省の貧困撲滅政策の一環として、石門坎は行政主導の観光開発の中心地になった。一方、省内では、石門坎は20世紀の教育成果だけでなく、キリスト教への警戒をはじめとする理由で、政府にとって触れられたくない場所としても知られている。なぜそのような石門坎は観光開発されるようになったか。本研究はこの問いに取り組む。

石門坎の観光に関する研究はなかったため、筆者はフィールドワークを2回実施し、民間及び政府の関係者計28人にインタビューした。結論は以下の通りである。

1980年代以降、石門坎にはじめて目を配ったのはその地の歴史に関心を持つ学者である。その後、石門坎の貧困問題の解決やミャオ族の文化伝承に支援するNGO、石門坎を巡礼に値する聖地と考えるキリスト教徒、石門坎の歴史から社会への示唆を見出そうとする活動家などといった様々な民間のアクターも登場してきた。諸アクターの多様な解釈と宣伝によって、石

門坎はより多くの人びとに知られるようになった。その影響を受け、ミャオ族をはじめとする地元住民は自分と関わる歴史の価値を再認識し、さらに自らその価値を発信するようになっていく。

2000年代半ばから、政府は強まってきた民間の力を抑えながら、石門坎の発展に力を入れた。その1つの動きは、石門坎の歴史における宗教の色を薄めながら、その価値を教育や地域振興の角度から再評価することである。進行中の観光開発では、政府職員と観光コンサルタント会社の交渉の結果、石門坎ミャオ族の文化を表す景観は観光設計の中心となり、貧困撲滅政策の成果を展示する博物館も観光計画の一部となっている。

このように、民間のアクターとのせめぎあいのなかで、政府は石門坎の有名な歴史をめぐる様々な解釈を再編し、キリスト教と関わる石門坎の観光地化を政策の宣伝にとっても有益なものにしたことは、観光開発が進められるようになった要因だと言える。

ある地域の文化や歴史の観光資源化についての事例研究は多く、そのほとんどはすでに有名になった観光地に焦点をあてている。それに対して、本研究は観光開発中の石門坎を事例にすることで、未だ開発の結果に影響されていない資源化プロセスを考察できた。また、本研究は、石門坎の歴史の価値が諸アクターの働きかけによって創られ、無視され、選択的に再評価されてきた約40年間を描くことで、資源化プロセスの中で記録されない限り消えてしまう人びとの知の営みに目を向ける重要性を示したことに意義があると考えられる。

発表者氏名：マヒプレット・シュケレット

(瑪合甫來提・雪克熱提)

指導教員名：浅川 希洋志

発表タイトル：「フロー体験がレジリエンス状態と異文化適応に与える影響について」

発表概要：フロー体験が中国人留学生のレジリエンス状態と異文化適応に与える影響について(仮)

本研究の目的は、留学生が異文化環境において体験したフロー現象が、レジリエンス状態に如何なる影響を与え、如何に新しい環境への適応に役立つのかを明

らかにすることである。本研究を通じて筆者は、留学生の異文化ストレスに対してレジリエンス状態とフロー体験とがどのように関連しているかを解明する。そうすることで、異文化問題におけるフロー体験の有効性を示す一助となると考える。

これまで、異文化適応問題を検討する際、異文化の逆境の中で人はどのように困難を克服し、周りの環境に適応するのかを不適応要因から分析することが主流となっていた。しかし、堀毛も指摘するように、そのような考え方は、人間のネガティブな側面を拡大し、ポジティブな側面の存在を軽視しているのではないかという反省が生じるようになってきた。そこで注目されたのがポジティブ心理学である。

そのなか、フロー体験と呼ばれる現象に対し、関心が高まっている。これまで、ポジティブ心理学の貢献から、フロー体験にはレジリエンスとの接点があると考えられてきた。さらに、フロー状態とウェルビーイング生産的活動への参加意欲、学習意欲、創造性と関係あり、フロー体験の頻度と日常生活における充実感とは正の相関がある。精神的健康の観点からは、ストレスからのレジリエンスの強い人がポジティブな傾向との間に相関がある。

中国人留学生は英語圏からの留学生と比較して、精神健康度が低い傾向にあると報告されている。また、精神的な健康面について情緒的サポートを求めたがらず、自力で対処しようとする傾向がある。ストレスフルな留学生活に適応するためには、たとえ否定的な出来事があったとしても、そこから立ち直る力が求められる。以上のことから筆者は、レジリエンスを高めることが、中国人留学生の精神的健康を維持・増進するためには重要であると考えられる。

続いて、調査方法について簡潔に触れる。本研究では量的調査と質的調査の二つの調査法を用いた。

今回の量的調査は、フロー体験の頻度が、レジリエンスおよび異文化適応と正の相関があるという仮説のもとで行う。中国人留学生のフロー体験の頻度とレジリエンス状態が彼らの異文化適応に与える影響を量的データで分析する。質問紙による量的調査は来日1年以上の中国人留学生(中国大陸・台湾)を対象に、都内の日本語学校4校で調査を行った。

質的調査は回収したデータに基づき、9 人に対して半構造化インタビューを実施した。異文化適応に基づく語りを分析対象に日本での留學生活に適應するまでの出来事と様々な選択、感情の変化を時間経過の中で捉え、中国人留學生の異文化適應の過程におけるレジリエンス状態とフロー体験の関連を検討する。

発表者氏名：孫傑(ソンケツ)

指導教員名：中島成久先生 曾士才 先生

発表タイトル：中国における日本式經營の導入をめぐる課題について-松下電器を事例として-

発表概要：中国における日本式經營の導入をめぐる課題について-松下電器を事例として-

1.研究目的

本研究では、中国に進出した松下グループの最初に設立した合弁企業である北京・松下カラーブラウン管有限公司(以下は **BMCC** を略称する)の事例を取り上げながら、松下電器の 5S 活動を中国に導入したためにどのように浸透させていったかという点を検証する。そうすることで、中国における日系企業の現地化に伴う問題が明らかになる。

2.問題意識

松下電器は中国に進出する際に、その 5S 活動(整理、整頓、整頓、清掃、清潔、躰)を日本式の經營方式として導入した。BMCC には、「習慣」を加え「6S」にするなど、現地に合った形にして進めていた。BMCC には 5S 活動はどのように理解され、導入したのか。ほかの中国にある松下電器の実情は何か。

3.研究対象と方法

以上の問いを用いて、文献調査及び唐山松下電器産業機器有限公司の調査を行い、以下の 2 点を具体的に明らかにすることを中心の課題とした。

(1)BMCC には 5S 活動がどのように理解され、変容されたか。

(2)唐山松下産業機器有限公司には 5S 活動の実際の状況を実証。

本稿では、唐山松下電器産業機器有限公司を現地調査、文献調査の上、BMCC と比較し、5S 活動の変容を分析する。

・唐山松下電器産業機器有限公司：1994 年、松下溶接

システム(株)(60%)と唐山開円集団(40%)は合資された。事業内容は溶接機の製造販売である。

4.これまでの研究が分かったこと

合弁企業のモデルとしての BMCC は 1987 年に設立され、最初は、經營ノウハウから技術、設備まで全面的に松下から導入した。1994 年頃から 5S 活動から 6S 活動に変更した。その際、BMCC で行われた 6S 活動とは「整理、整頓、整頓、清掃、清潔、躰、習慣」である。松下の 5S 活動に比べると「習慣」という内容が 1 つ加えられたのである。当時の大部分の中国国有企業では、「整理・整頓」という習慣がなく、「良い生産環境作り」という意識が希薄であった。このような状況下で、「良い生産環境作り」という環境を身につける必要性から「習慣」を取り入れたものと考えられる。そして、2003 年、經營環境、従業員意識などの変化によって、ブラウン管製造工場としての安全(Safety)の必要性から、「習慣」の代わりに、「安全」を取り入れた。BMCC は「松下式經營」を全面的に導入したが、導入された制度はそのまま全面的に適應しないとみられる。つまり、導入された制度は地元の事情に改革され、適應できたと考える。

5.今後の研究課題

筆者の知り合いは唐山松下電器産業機器有限公司で働いている。この関係を通じて、現地調査及びインタビューを実施予定である。

・現地調査：唐山松下電器産業機器有限公司には 5S 活動の変容及びうまく理解され行われているのか。

・インタビュー：中国人従業員は 5S 活動をどのように理解しているのか？また、理解できない場合、どこが理解できないのか？

発表者氏名：吹原 春海 (フキハラ ハルミ)

指導教員：栗飯原 文子

発表タイトル：日本のアフリカ觀形成における『朝日新聞』の役割——1980 年代の「飢餓救済キャンペーン」を通して

発表概要：本発表では、日本のアフリカ觀形成において新聞が果たした役割について取り上げる。特に 1980 年代の『朝日新聞』の報道に焦点を当て、80 年代に始まった「飢餓救済キャンペーン」の中でアフリカはど

のように報道されたのか、『朝日新聞』がアフリカ観形成にどのような役割を果たしたのかについて述べる。

日本に暮らす私たちの多くは、アフリカ大陸の人々に対して、「リズム感がよい」「陽気」「家族思い」という印象を抱き、逆に「頭がよい」「勤勉」「論理的」という印象をあまり抱かない。アフリカに対しては、「治安が悪い」「貧富の差が激しい」「信仰心が強い」「男性優位の社会」という印象を抱きがちである。このような印象が的を射ている場合もあれば、全くの見当違いという事例もある。実際にアフリカ人からこのような固定観念に対して、異議申し立てが行われているケースもある。

日本におけるアフリカ観の変遷は大きく二つの時期が挙げられる。一つ目は明治期に西洋の影響を受けてアフリカを「野蛮」と見なすようになった時期、二つ目は日清戦争と日露戦争の勝利を契機に、アフリカを冒険の地と見なすようになった時期である。西洋のような直接的な関係をアフリカと結んでいない日本だが、このように国際関係に影響されて、日本のアフリカ観はその形を変えていったと言えるだろう。

日本のアフリカ観についての先行研究は戦前で終わっている。では戦後はどのように変化したのだろうか。世界的には 60 年代のビアフラ戦争の報道によって、「アフリカ＝飢餓」という印象が流布する契機となった。それは日本でも同様であるが、その後 1983 年に、『朝日新聞』のナイロビ駐在の特派員が「飢えるアフリカ——二十二カ国一億五千万人、干ばつ、今世紀最悪と国連が警告」という記事を作成し、「アフリカ飢餓救済キャンペーン」と呼ばれる市民運動が起きたと言われている。確かに 80 年代にはエチオピアとモザンビークで旱魃が起こっている。アフリカの飢餓を日本はどのように報道したのか、具体的な記事を含めて発表する。

また、『朝日新聞』が日本のアフリカ観形成に果たした役割について、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を参考にして分析する。『朝日新聞』が果たした役割も明らかにすることで、80 年代の日本のアフリカ観がどのように形成されたのか論じたい。

発表者氏名：安里恒佑（あさとこうすけ）

所属ゼミ：川村湊ゼミ（主査・川村湊 副査・廣松勲）

発表タイトル：沖縄における歳時記

発表概要：俳句形式の要素として、季語、定型、切れの三つが挙げられる。本発表でとりわけ着目する季語とその機能に関して、宮坂静生はその起源を述べつつ、ただ季節の風物を指す言葉ではなく、実際の風景に触発されながら、より「美しい」イメージへと練り上げられた想像の結晶であり、平安貴族が想定した共通の規範に基づく「共同幻想」として成立したと規定する。また、ハルオ・シラネも、読みについて高度に発達した文化的・文学的なコード（約束事）であり、連歌連句から発生した共同体のコンテクストと作用しあう働きをもつと、その機能について考察している。季語は、自然の季節感や季節の行事などの幅広い内容を持っているが、それが特に季節にかかわる微妙な人間感情と結びついている点に特色がある。

季語を集成した書物を歳時記と呼ぶ。季語とその傍題、季語の説明、例句を載せた現存の歳時記の形態が定まったのは、寒川鼠骨編の『歳時記例句選』（1903・内外出版協会）であり、その後さまざまな種類の歳時記が発刊された。本発表では、沖縄における歳時記を扱いたい。

沖縄県は日本列島の南に位置し、地理的にも文化的にも本州と異なった季節観を持つことは想像に難くないが、そうした季節感が如何に季語となり歳時記に編纂されたのか、また、春夏秋冬の四季を如何にして区分し得たのかを本発表で明らかにしたいと考える。そのために、沖縄における季語の意識を複眼的に観測しながら、沖縄独自の季語を集成した歳時記が発刊されるまでを考察する。沖縄の歳時記を考察することから共同体をめぐる問いを照射することが出来れば幸いである。

発表者氏名：王丹

指導教員名：佐藤千登勢

発表タイトル：90 年代張芸謀の映画から観る父権社会における女性

発表概要：『菊豆』は、1920 年代、二人の男女が封建社会において、決められた運命に反抗しようと、愛と自由を求めるが、それは許されぬことで、結果、死に

至る映画である。この悲劇は菊豆が売られた時からすでに始まっていた。男尊女卑である社会において、女性は子孫繁栄させる道具にすぎず、ごく普通に人身販売が続けられていた。楊金山が夜な夜な菊豆を虐待した時の「オレはお前をお金で買った、家畜となにも変わらない、何をするかはオレの勝手だ」というセリフから、この現実が赤裸々に語られている。

もう一つの映画、『紅夢』では、19歳の頌蓮は実家の没落によりおとお金持ちに第四夫人として買われる話である。主人は、夜になり彼女の部屋に泊まる時門前に赤い提灯をかかげ、主人に気に入ってもらえると、まるで王室のような贅沢な待遇を受けることによって、女たちが裏での戦いやその悲惨な結末が描かれている。

古くからある儒家文化により、女性は三従四徳七去を守らなければならない。三従は、幼い頃に父親の「娘」として、父親に従い、結婚すると主人の「妻」として、主人に従い、主人が死んだあと息子の「母」として、息子に従うことを指す。魏則能は「このように、女性の身分変化は家庭内の役割と家族男性の社会身分に応じて転換する」と指摘をしている。そして、四徳とは①節操を守る 婦徳 ②言葉使い 婦言 ③身のだしなみ 婦容 そして最後に④家事をする 婦功。七去とは女の離婚の条件であり、以下の無子、姦淫、不孝、盗み、嫉妬、病氣、おしゃべりが挙げられている。このような徹底的にされた女の掟が浸透し、女性に束縛をし続けてきた。これも父権社会における女性の社会的地位の低さを作り上げた一つ大きな原因と考えられる。

『菊豆』の物語の舞台は原作では農家だったが、映像的な効果を狙って染物屋に変更され、この映画で一番よくつかわれている色は赤である。『紅夢』も同様、照明から服装や小道具まで、主に赤を中心に描写する。呂瑶は张艺谋の映画によく使われる「赤」を①喜びなど良きことの象徴②エロスの欲望③女性特有の強さの三つの基本的意味と①権力、そして、②無情の二つの特定意味を持つと述べている。このようにして、主

に色使いを中心に分析する。さらに、原作に実際には存在しない大規模な染物機械が登場している。ハイアングルやローアングルなどの手法で抑圧感を表し、同じシーンを数回にわたってリピートすることによって、因果応報を強調する。

このようにして、歴史背景や映画に使われる道具、場面から、中国の封建的社会において女性の社会的地位を中心に、儒教思想の影響やジェンダーをめぐって分析しようと考えている。

発表者氏名：劉徳嘯（リュウトクショウ）

指導教員名：主査 浅川希洋志 先生

副査 曾士才 先生

発表タイトル：夢中の力で困難を乗り越える—フロー理論が異文化ストレスにおける応用の可能性

発表概要：人はだれでも、失敗、病氣、友人や家族との別離などのイベントがもたらしたストレスに直面しなければならない。こういったストレスを放置すれば、精神疾患、自殺、暴力など、個人の不適応に繋がるだけでなく、社会問題を引き起こす恐れもある。一般的には、家庭内、学校、職場など、日常生活における困難から生じたストレスは、多くの場合、ストレス（ストレスの原因）の除去、友人や家族との相談、臨床心理の援助を受けるなどで、軽減、解消されるが、異文化環境下で生活している個体の場合、言語の壁の存在や文化の相違性により、孤立しやすく、援助活動が困難なため、異文化ストレスの直接的除去より、本人自身の適応力の向上によるストレスの抵抗力の上昇と予防効果が希望されている。

ポジティブ心理学は、楽観性、積極性など、ポジティブな人間機能に着目し、適応力を高めるという側面を重要視している。特に、フロー体験の分野では、何かに夢中になる体験をすることで、生活の中の不快なことを忘れるという機能が注目されている。

フロー体験は、①その瞬間にしている活動への強い、焦点の絞られた集中、②行為と意識の融合感覚、③内省的意識の喪失、④時間的経験のゆがみ、⑤失敗に対する心配からの解放、⑥行為自体が自己目的的、という6つの特徴をもつという。

フロー体験の測定は、主として質問紙法と経験抽出法

と、二種類の方法で行われる。前者は、Flow State Scale や The Flow Questionnaire など、フロー体験測定用尺度を用いて、参加者に回答を求めるという方法で実施するが、調査による参加者の負担が軽く、調査の便宜さなどのメリットがあるもの、質問紙への回答は回想に基づくため、データの正確さの問題が指摘されている。一方で、後者の経験抽出法では、ポケットベルなどを用いて、1日数回、参加者にシグナルを送り、参加者はシグナルが鳴るたびに、誰と、どこで、何をしていたのか、楽しさ、幸福感、集中力など、付随の心理状態を即時測定できるというメリットがあり調査の精度が優れるが、参加者への負担が大きいことや、質問紙法に比べ調査の経済性が劣るといった側面もあるという。

今までの実証研究では、フロー体験と達成感、満足感、ウェルビーイング、充実感、自信、レジリエンスなどとの関連が確認されている。つまり、何かに没頭する状態（没入感覚）を通して、個体の複雑能力が誘発され、人間の日々の精神健康の維持・促進に貢献し、生活全般の質を高めることができるのである。

文頭に提示した異文化ストレスの特異性を考慮すれば、フロー理論の応用の価値があると考えられる。何より、異文化環境下で生活している個体、何か夢中になる活動に参加することによって、自ら生活の質を高め、ストレスへの対応力を身につけることができるという点では、個人の精神疾患の予防や異文化適応力の向上だけでなく、社会全体の負担の軽減、社会問題の防止にも効果があると考えられる。

発表者氏名：金 しん (キン シン)

指導教員名：森村 修

発表タイトル：中国“八五芸術運動”における表現主義の変容

発表概要：

研究目的と意義：

本研究では、1980年代中国における八五新潮と呼ばれた芸術運動に着目し、八五芸術運動に参加する前衛アーティストたちの芸術作品の精神性を考察することにより、20世紀初頭に現れた表現主義の芸術活動が近代アジアおよび中国の芸術運動に与えた影響につ

いて考察する。特に、ポスト89以降に現れた二つの流派と同様の「表現」の概念に属するアーティストたちの代表作を分析および比較することで、彼らの深層心理を明らかにする。

筆者は1980年代という特殊な時期の芸術運動を考察することによって、新たな視点を加え、アートおよび芸術運動の精神性を考える。政治、文化面から、中国における前期アートと85年以降の前衛的なアートを対照しながら、世界と同時代性を獲得した中国現代アートの精神を再考する。

研究方法：

80年代半ば中国全土に展開された八五芸術運動は中国現代アートの標識と言えるだろう。ポスト・モダンニズムに至る最初の西欧の現代思想および芸術理論は、若い先鋭的なアーティストたちに刺激したところで、彼らの作品における「再現」から「創出」の転換期に向かう。

本研究では、第二次天安門事件以降に現れた二つの流派—シニカル・リアリズムとポリティカルポップの「表現」形態がどのように影響されたことを研究したいと考える。さらに、ドイツ美術の芸術手法と理論から直接に影響された曾梵志(ゾン・ファンジー)、方力鈞(ファン・リジュン)、張曉剛(ジャン・ショオガン)その三人の作品分析を通し、芸術における中国式な表現について検討する。

発表者氏名：児玉美月

所属ゼミ：佐藤千登勢ゼミ

発表タイトル：トランスシネマにおけるトランジションの考察

発表概要：本研究では、メインストリーム上のトランスジェンダーを主題とした映画作品4作品を取り上げ、そこでトランジション(性別移行)やジェンダーそのものがどのように表象されているのかを分析する。クィア映画研究において、ゲイ映画及びレズビアン映画に比べ、トランスシネマ研究は蔑ろにされてきたという歴史的背景がある。先行研究としては、現在先行研究はほとんど欧米でしか行われておらず、かつ限定的でしかなく、研究としての新規性はあるものと

考えられる。

まず一作品目で取り上げるのは、グザヴィエ・ドラン『わたしはロマンス』である。本作はダグラス・サークに代表されるメロドラマジャンルに属している。かつて観客と距離を置いた表象しかされず、共感し得ない存在として描かれてきた彼らが普遍的な恋愛模様の中で描かれることに本作の価値があると考えられる。

二作品目はフランソワ・オゾン『彼は秘密の女ともだち』。主人公ダヴィットの異性装によるトランジションにスポットをあてる。異性装とセクシュアリティがどのように密接に絡み合っているかを、ジュディス・バトラーのジェンダー理論などを援用しながら論じる。

続く三作品目、トム・フーパー『リリーのすべて』では身体を焦点にトランジションを論じる。主人公リリーは世界で初めて性転換手術に挑んだリリー・エルベであり、医療による性転換が不可能だったために身体の動きが重要になってくる。鏡、肖像画、のぞき部屋といったいくつかのモチーフを通してラカンの鏡像段階の理論などを援用しつつ分析していく。

最後の作品となるペドロ・アルモドバル『私が、生きる肌』は、他者の問題や抗うことのできない暴力の問題を交えてトランジションを考察する。外科医ロベルがヴィセンテという男を亡き妻そっくりりに性転換及び整形手術を強制的に施していくのだが、観客もまたヴィセンテが精神的にまで女性へと変容していったような錯覚に陥っていく。身体が別の性別へと変わった時、心はどうなるのか？異性装によって女性性に目覚めていく『彼は秘密の女ともだち』、ゲーム感覚で作上げた女性の人格を制御できなくなっていく『リリーのすべて』を経て、本作では強制的なトランジションにいかにかにジェンダーアイデンティティーが追随していくのかを分析する。

以上の4作品をテキストにしながら、映画史においてこれまでいかにトランスジェンダーイメージが歪められた形で表象されてきたのかを問題提起すると共に、今後そのイメージがどう構築されていくべきかまで論を敷衍したい。

発表者氏名：高柳俊男

発表タイトル：三遠南信一県境を越えた地域連携の新ビジョン策定にあたって

発表概要：三遠南信という概念がある。愛知県東部の東三河、静岡県西部の遠江、それに長野県南部の南信州の三地域を、県境の枠を越えて広く捉えようとするものである。確かにこの地域は、大きくは天竜川と豊川の流域であり、水運や街道（塩の道）がもたらした共通の文化や歴史がある。

その三遠南信の連携を行政面で推進する組織に、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（略称 SENA；事務局は浜松市役所）がある。SENAには現行で、東三河の5市2町1村、遠江の8市1町、南信州（下伊那＋上伊那）の3市6町13村、計39自治体と付随する商工会・商工会議所が加盟している。

SENAは2008年に10年ビジョンを策定したが、期限切れを前に、今年度と来年度の2年間で新10年ビジョンを策定することになった。そのための委員会は、3地域の自治体や商工会・商工会議所のほか、学識者と住民団体代表各1名により構成されるが、南信州代表の学識者として指名されたのは私であった。私自身は、南信州の出身ではないし、居住経験ももたないが、2012年度以降、本学部の学生研修を当地で実施していること、また当地を幅広い視野で把握するため、三遠南信の全域に足繁く通っていること、その見聞をもとに、飯田で出ている『南信州新聞』に「三遠南信に思う」と題して全4回の連載記事を載せたこと、などが飯田市から評価されたものと思われる。

SENAの新10年ビジョン策定委員会に参加するにあたり、私は第一回委員会で以下のような意見を述べた（SENAのウェブ上で公開されている公式の議事概要より）

・この10年間でSENAの構成メンバーが大きく変わった。また例えば、長野県で言えば、東三河だけではなく西三河との文化的繋がりがあし、平谷村や根羽村では矢作川流域で、愛知県・岐阜県との連携組織もつくっている。三遠南信の範囲を固定的に考えるのではなく、今後10年の変化も見据えて柔軟に捉えていくことが重要ではないかと考える。

・三遠南信の中心都市は3市（浜松市、豊橋市、飯田

市)であるが、その浜松市、飯田市でも広い中山間地域を持っている。中心都市の中心部だけでなく、廃校を地域の活性化に利用する案や、地域おこし協力隊の活動など、中山間地域からの発想にも重点をおくことが重要だと考えている。

総じて、予想外の委員に任命された以上は、県境の枠を越え、三遠南信として発想することが、この地域に暮らす住民にとって豊かで魅力ある内容をもたらすような新ビジョンとなるよう、微力を尽くしたい。

この報告では、私が重要と考える上記の基本的な立場と、それに基づく具体的な事業実施提案について自説を述べ、ご意見を伺う場としたい。学部として実施する SJ 国内研修から発展した今回の業務に関して、学部内で広くご関心をお持ちいただければ幸いである。

発表者氏名：輿石 哲哉

発表タイトル：The River Arakawa 現象とその意義について

発表概要：本発表は、発表者が the River Arakawa 現象と呼ぶものを紹介し、それを言語研究に応用した例を考察し、より身近で実のある言語研究の意義について再確認するものである。

まず、この現象について説明する。その後、英語史上有名な AS 侵入の後の E における AS 民族と先住の C 系である RB 人との関係について、この現象が鍵となる可能性を考察する。最後に、このような言語研究の意義について私見を述べたい。

この現象は、2 言語使用の状況下で起こる固有名詞に見られる形態素の重複現象（以下、下線部を参照のこと）を指して発表者が名付けたものである。先住民族の言語の形態素分析ができない他民族が、自らの言語の造語法により新語を形成するため、2 言語使用下でこのような形態素のダブリが起こることがある。例は固有名詞に多く、「シティバンク-銀行」（ハイフンは形態素境界を示し、発表者が挿入）などの表現がある。この現象は「お-みくじ」、「両刃のやいば」などとともに「重言」と呼ばれるものに含まれるが、特に固有名詞の造語法や言語接触が関係したものである。

従来、AS 侵入期には、AS 人による RB 人の大虐殺が想定されてきたが、最近では、AS 人がもたらしたと思える AS 系の-ing と C 系の混交地名が E 東部に多く分布していること、語彙ではなく文法に着目すると、C 系以外の他の IE 系語派には見られない進行形 や、助動詞 do が PE に存在することから、AS 人の侵入は wiping-out ではなく、もっと漸次的なものであったのではないかという考え方 (McWhorter (2008)) が、勢いを伸ばしつつある。特に、地名研究において、River Esk ('river-river'), Pen-dle Hill ('hill-hill-hill') などの the River Arakawa 現象が多く観察される (Forsyth (2011: 156-157)による) ことは、平和裏での両民族の併存が想定されるため、漸次的な侵攻の証拠になると考えられる。

この現象は、言語接触の際に言語の造語法を見ることで民族間の関係が推察できるいい例になると思われる。最後に、何かと「理論的な」言語研究が盛んな中、このような身近な現象に光を当てる言語研究の意義を再確認し、発表を終えたい。

<文中の略語>

AS: Anglo-Saxon, C: Celt, E: England, IE: Indo-European, PE: Present-day English, RB: Romano-Briton

<参考文献>

Forsyth, Mark (2011). The Etymologicon. London: Icon Books Ltd.

McWhorter, John (2008). Our Magnificent Bastard Tongue: The Untold Story of English. Now York: Gotham Books.

B. ポスター部門

発表者氏名：柳川実智、中川美佳

所属ゼミ：重定ゼミ

発表タイトル：プログラム初級者によるコンピューターエンターテインメント創作の試み

発表概要：重定ゼミでは、それぞれの個人研究を1つにまとめて発表する。

操作そのものが楽しいシューティングゲームを作る試み（柳川）

・ 制作動機

私個人がシューティングゲームに大きな興味があり、それらを遊んでいる人が楽しいと感じる部分には何があるのだろうと考えたのがきっかけである。操作そのものが楽しいゲームとは、どのような仕組みになっているのか研究し、自分でできる限りの構築をしてみようと試みた。

・ 作品紹介

自機を真上から見下ろす形式のシューティングゲームである。大きな特徴は二つあり、開始前に機体の装備を自由に換装できる点と、敢えて操作を若干複雑にしてゲームそのものの難易度を上げている点とがある。

RPG の戦闘におけるエンターテインメント性の研究(中川)

・ 制作動機

私はデジタルネイティブとして、幼少期から様々なコンピューターゲームに触れてきた。その中でも RPG ジャンルのものを好んでプレイしてきた。スマートフォンでプレイ可能なソーシャルゲームが普及し氾濫してきた今もそれは変わらない。しかし近年、ゲームによってはキャラクター達の能力のバランスにより、ゲームを楽しくプレイできないことも増えてきたと感じるようになった。そこで私は「キャラクターの持つ各々の能力のバランス」がゲームのエンターテインメント要素の一つだと考え、そこに重点を置いてプレイヤーが楽しめる RPG 制作を試みた。

・ 作品紹介

今回着目した点が RPG ゲームにおいて関係してくるのは戦闘のみなので戦闘シーンだけ制作した。キャラクター毎に異なる属性やスキルを持ち(敵も同様)、自分の考えた戦術に合わせてキャラクターを選びコマンドを選択することで実際に敵と戦闘し勝利を目指すというものである。

発表者氏名：桑原優 須賀彩香 本多菜英 間所美晴

矢田一義

所属ゼミ：甲ゼミ

発表タイトル：アクティビティ、空間、そして建築～自然に人が集まる広場～

発表概要：アクティビティ、空間、そして建物～自然に人が集まる広場～

現在の建築の多くは、建物や空間のデザインが先行し人々のアクティビティが後回しにされがちだが、本来、空間デザインは人々のアクティビティから設計されるべきものである。現在のキャンパス中央広場はキャンパスのすべての建物からアクセス可能な位置にあるにもかかわらず、発生しているアクティビティは通行のみである。そのことを問題点と考え、私たちはキャンパス中央にあって自然に人が集まる広場を提案する。

それにあたり私たちはまず始めに、キャンパスの中央広場で起こりえるアクティビティを予想し、その中から広場の必要条件とそうでないものに分類した。次に、私たちが成功例と考える広場の空間デザインを国内外から参照し、それらがなぜ良い広場と感じるのかを分析した。例えば、イタリアにあるカンポ広場の場合は象徴的な建物に向かって緩やかな斜面が続いているため、広場にいる人々の視線が自然と同じ方向を向き一体感を生み出している。東急プラザ表参道原宿の「おもはらの森」は、椅子やテーブルとして使える多義的な形態を持つ段差がすり鉢状に配置されているため、隣の人々と対面する緊張感がほどけ居心地の良い空間が作られている。そして、キャンパス中央広場の現状を把握するために法政大学市ヶ谷キャンパスの学生にアンケートを行い、分析した。

上記のプロセスを通じて、どのアクティビティを重要視するかは比重を変えることによって空間のデザインが大きく変わってくる。ここでは食事・集合・くつろぎ・会話・撮影・読書や勉強・睡眠・レクリエーションのアクティビティを抜きだし、3つの空間の例を提示する。以下の表は全体を100としそれぞれの割合を決めた（アクティビティ、割合は一例）。

例1は食事のアクティビティに重点を置いた場合、それに伴ってくつろぎや会話のアクティビティが生ま

れることが予想される。これらのアクティビティを満たすためにテラス席や座って食べられる芝生を置く。例2はレクリエーション（フリスビーなど）に重点を置いた場合、会話や集合のアクティビティが生まれることが予想される。これらにはある一定の広さのスペースが必要となるため全体を芝生で覆い、水分補給のための自動販売機などを設置する。このようにどのアクティビティに重点を置くかを変えることで広場の空間デザインは大きく変わっていく。

本概要では2つの例を提示したが、重点を置くアクティビティ次第で様々な空間を生み出すことができる。現在私たちのキャンパス内でのアクティビティは屋内で行われがちだが、キャンパス中央広場を新たなアクティビティの場として活用できるようにすることで自然と人が集まる広場が実現するだろう。これから私たちはさらなる研究、分析を進め、現在よりも生き生きとした広場の空間デザインを提案する。

発表者氏名：木村望、佐藤みず帆、成田昇吾、伊集院悠、大岩亜衣、岡部かな子、片野修作、久世菜奈、高木瑞生、高久ルビ希歩、原田京子、山田紗名

所属ゼミ：岡村民夫ゼミ

発表タイトル：場所からわかる「風立ちぬ」

発表概要：2013年に公開されたジブリ映画「風立ちぬ」。これは1920、30年代を舞台にした作品である。私たちがフィールドワークとして訪れた上野、軽井沢から「風立ちぬ」を紐解いていく。そして、概要・関東大震災・上野・軽井沢と、4つの項目に分けて発表する。

初めに「風立ちぬ」の概要として、堀越二郎のモデルである堀越二郎と、堀辰雄の両者から「風立ちぬ」を考える。堀越二郎からはゼロ戦について扱う。ゼロ戦とは、零式艦上戦闘機の略称で、日本海軍の主力戦闘機だった。ゼロ戦の最も重要な点は機体の重量を軽減すること。それまでは部品を他国から輸入していたが、零戦はすべて日本で作られた航空機である。堀辰雄からは、軽井沢を扱う。これは後に軽井沢の部分で紹介する。

次に、関東大震災について述べる。関東大震災は1923年9月1日、南関東及び隣接県で発生した巨大地震で

190万人が被災、10万5千人あまりが死亡あるいは行方不明となった。木造建築が多かったこの時代では死因の多くは焼死であった。家屋は10万9千余棟が全壊、21万2千余棟が全焼した。映画内でも関東大震災による人々の混乱と影響が描かれている。これらについて写真を使いながら紹介していく。そして、その震災の舞台となったのが上野。我々は「風立ちぬ」に登場する場所をフィールドワークで学んだことを踏まえて4つの場所と鉄道に絞り、紹介したいと考える。まず、4つの場所とは、東照宮・上野公園・大学図書館・菜穂子の家である。東照宮と上野公園は主に避難場所として使われ、大学図書館は焼け野原になった舞台として描かれている。菜穂子の家は上野に位置し、鉄道は主人公が上野を訪れるために乗った蒸気機関車として6700形蒸気機関車を紹介する。また、これらの場所を劇中と現実で比較もしたいと考えている。最後に、映画内で重要な場所であった軽井沢について取り上げる。軽井沢は「風立ちぬ」にとっても、原作者の堀辰雄にとってもゆかりの地である。初めに軽井沢が避暑地として発展してきた歴史を述べ、次に今年度のゼミ合宿でも訪れた、映画の中で堀越二郎と菜穂子が再開した場所として描かれているホテルのモデルになった二つのホテル（三笠ホテル、万平ホテル）についての歴史や建築物の特徴を紹介し、最後に堀辰雄が実際に避暑・静養のため軽井沢を訪れていたため、軽井沢と堀辰雄について言及する。

これら4つを目次とし、最後に私たちの考察を発表します。

発表者氏名：近藤笑子、小原進太郎、高柳翔太、河本未歩、安東恵味、川凌太郎、前田美里、武藤夢実、土方裕喜、山口琴乃、及川奈々、佐藤万理、村上絢香、東野菜月、小菅玲奈、原田光汰、澤田昴佑、安里幸一、中目彩子、上ノ内郷、

所属ゼミ：大西亮ゼミ

発表タイトル：Paella とパエリア ～日本におけるスペイン料理とその伝播～

発表概要：近年、私たちの生活は技術の進歩により、急速にグローバル化が進んでいる。インターネットで海外の友人と交流し、国内でもさまざまなフェスティ

バルが催され、異国の音楽を聴きながら食事を楽しむなど、世界の多様な文化を体験することも容易である。なかでも、食文化のグローバル化はとどまるところを知らず、ここ日本にも海外から毎年多くの店舗が進出しており、世界各国の料理を飛行機に乗らずとも手軽に楽しむことができる。私たちにとって食文化はもっとも身近に感じられる異文化のひとつと言えるだろう。

私たちのゼミは、SA でバルセロナに滞在した経験をもつ学生をおもな構成メンバーとしている。バルセロナでも食の文化交流は盛んに行われており、多くの日本料理店を見つけることができた。しかし、“日本料理店”の看板を掲げてはいても、日本人が思い描く日本料理とは異なる料理や食材に出くわすことがしばしばあった。

たとえば、店員が日本人ではなく中国人で、日本のものとは違う甘い寿司が出てきたこと。“udon”として売られている商品が、私たち日本人の目から見るとまったくの別物に見えることも珍しくはなかった。また、日本ではあまり目にするものがない、マヨネーズをたっぷり使った巻き寿司であっても、「日本食だからヘルシーだ」などと日本食が過度に美化されることも多く、違和感をぬぐえなかった。このように、身近で体験できる食文化について数々の差異を発見することとなった。

では、私たち日本人の考える日本食とは異なる日本食に海外で出会ったとき、それは“食文化の誤った伝播”と考えるべきであろうか。

本ゼミでは、他国に移植された食文化に着目し、私たちが留学中に体験した日本料理への違和感とは反対に、日本に定着している“日本のスペイン料理”について日本人、またスペイン人はどのように考え、感じているのか、さまざまな角度から探っていきたい。そのために、まずは導入部としてスペインの食文化の歴史を概観し、スペイン料理の形成の過程を追っていく。さらに、日本でスペイン料理店を営むスペイン人シェフや日本人シェフにインタビューを行うと同時に、日本人や在日スペイン人を対象に、“日本のスペイン料理”についてどのような印象を持っているのかアンケートを実施する。以上の調査を通じて、スペインの食

文化が日本でどのように展開・普及しているのかを分析し、その“差異”を読み解いていく。

学会発表では、上に述べた手順にしたがって、ポスター形式によるプレゼンを行う。見学者をスペイン料理レストランの“客”に見立て、前菜や主菜、デザートなどコース料理の流れに沿って“日本のスペイン料理”のありようを紹介していく。最後にまとめを行い、日本という異国の地でスペインの食文化がどのように受け入れられ、どのように日本文化と共存しているのか、文化の伝播とその変容という観点から最終的な考察を加えたい。

発表者氏名：清水 広平（シミズ コウヘイ）、王林 思遥（オウバヤシ ショウ）、山田 将士（ヤマダ マサヒト）、結城 北斗（ユウキ ホクト）

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表タイトル：「祖先と繋がる現在を生きる」チャモロ・カロリニアン～南国のビーチにとどまらないサイパン～

発表概要：本報告では、サイパン合宿を通じて私たちの関心が、「ビーチリゾート」サイパンから、「祖先とつながる現在」を生きるサイパンの人たち、へと変化していった過程を辿りながら、私たちが出会った「サイパン」を紹介したい。

合宿前、私たちにとってサイパンとは単なる観光地や南国のビーチなどのイメージしかなかった。おそらく日本では、このイメージが一般的であろうし、この島にどんな人たちが住んでいるのかは知られていないし、関心も持たれていない。

サイパンではまず、北マリアナ大学の学生たちから話を聞いた。彼らは、自分たちを「チャモロ」、「カロリニアン」だと名乗った。チャモロ、カロリニアンとはサイパン島を含む北マリアナ諸島の先住民である。チャモロは東南アジア方面から移住してきた民族である。一方、カロリニアンはスペイン統治時代にサイパンの南に位置する中央カロリン諸島からカヌーで渡ってきた民族である。しかしチャモロと名乗っても、両親や祖父母にカロリニアンがいる学生もいた。私たちは事前に、サイパンの学校で使われている教科書を読んだ。そこには 1565 年にスペインが侵略したこと

によって彼らの生活が一変し、続いてドイツ・日本・アメリカによる支配を受け、現在に至ることがわかったが、統治者側の叙述だとの印象を受けていた。一方、北マリアナ大学の学生は、自分たちの祖先が独自の文化を築いてきたこと、家族の歴史や習慣について、とても自然に楽しそうに話してくれた。彼らは歴史や伝統文化を、学校だけでなく、家族の中でも教わり、そしてそれを次の世代に伝えていくことで決して途切れることのないようにしていると話してくれた。私たちは、4つの国により支配され、現在は多くの移民の存在により人口的にはマイノリティになっているチャモロや、カロリニアンが、彼ら自身の独自性を守り継ごうと家庭内で「伝えること」が重んじられているのでは、と考えた。

またチャモロの研究者と、サイパンの歴史や文化に関する史跡を回った際には、兵士だけでなく民間人を含む多くの被害者を出した「バンザイクリフ」、「スーサイドクリフ」を案内された。現在でもサイパンの地上戦で犠牲になった日本人の戦没者慰霊祭が行われていることは、日本では知られていない。同時に、日本人が避難し、死者を大勢出した壕が、実はチャモロの祖先たちが壁画を残した大切な場所であることも教えてくれた。

本報告は、私たちがチャモロ・カロリニアンに出会い、話し、一緒に歩くことで、自分たちの歴史感覚が覆されたこと、そして日本にとってサイパンが、日本人の「ビーチリゾート」にとどまらない関係を持つことを知り、考える場としたい。

発表者氏名：山田愛（代表者）、佐渡祐実、村岡広規、八ッ星和音、山内光琴、山田桜、山根美咲、内海健人、岡本真澄、佐竹航弥、鈴木優太、永島真菜恵、永田佳菜美、原大遥、宮下莉菜子、矢嶋美香

所属ゼミ：衣笠ゼミ

発表タイトル：東京再発見！～東京・巣鴨・原宿エリアからみる地域特性～

発表概要：私たちは、石川県金沢市でのゼミ合宿のなかで実施したフィールドワークのひとつとして 21 世紀美術館において現代アートを鑑賞し、海辺に捨てられたゴミから制作された作品の数々に強い印象を受

けた。「現代文化」を研究対象とするゼミとして、この「ゴミ」という現代社会の問題に気づかされたことが、今回の学会発表の原点となった。

私たちはこのゼミ合宿での経験をもとに、「街に捨てられているゴミから、その街の性格が見えるのではないか」という仮説をまず立てた。そこで、年齢層や生活スタイルの異なる人々がいる3つの街——東京、原宿、巣鴨——をピックアップし、それぞれの街にどのようなゴミが落ちているのかを調査した。

その結果、私たちの想像とは裏腹に、それほど量の種類ゴミは確認できなかった。しかし、フィールドワークを通じ、さらにその後歴史について検討するなかで、それぞれの街の特色をとらえることができた。そして3つの地域には、ふつう私たちがイメージする「表舞台」としての姿と、それとは全く異なりつつも真正性を備えた「舞台裏」とが交差しており、それぞれの街に二面性があることに気づかされた。

このことを踏まえて、同じ街にこうした違いがある理由を考えると、それぞれの地域の発展がそこに生きる「人々」と深く関係していることが理解できた。つまり、今回私たちがターゲットとした東京、巣鴨、原宿という3つの街は、それぞれ独自のニーズに合わせた「都市化」を遂げてきたのではないかという考えに至った。

今回の発表で私たちは、ピックアップした街の情報（歴史や文化についての文献・資料調査と、再度の現地調査の結果）を共有し、その街の真の姿をとらえ、自分たちの立てた「そこにいる人々によって都市化の形が異なる」という仮説を検証する。

発表に向けてのプロセスは以下のとおりである。

1. 二度目のフィールドワーク

1-1. 現地でのインタビューを実施する。

→現地の人と話すなかで新たな知見・発見を得る。

1-2. 現地での、人々の特徴を観察する。

→それぞれの街の人々のタイプを知り、街の特徴を見出す。

1-3. 現地で街の作られ方を観察する。

→建物（店の種類やドアの数）、地形（道幅など）、ゴミやゴミ箱の数を調査する。

2. 1回目のフィールドワーク後よりさらに深く、歴史

や背景について文献・資料調査をおこなう。

2度のフィールドワークで得られた情報を元に、3つの地域それぞれの特色をポスターにまとめる。さらに調査結果の集大成として、体験型心理テストを作成する。これは今回のプレゼンテーションの聴講者それぞれの性格に合った街を示唆・提案するものであり、テストを体験してもらうことで私たちの発表に対する理解をさらに深めてもらうことをねらいとするものである。

発表者氏名：金田優輝

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

発表タイトル：「世界遺産の真の価値の伝え方、知り方 沖縄を例に」

発表概要：私たちのゼミでは世界遺産の真の価値をどのようにすれば知ること、伝えることができるのかを沖縄を例に発表します。

今年度は前期で文献での研究、また後期には琉球王国のグスクおよび関連遺産群の構成資産である首里城、斎場御嶽へのフィールドワーク、現地でのアンケート調査を行いました。

発表内容

沖縄の世界遺産と言ったら何を思い浮かべるでしょう。おそらく多くの人があの赤い首里城を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし首里城の本殿は世界遺産には登録されておらず、首里城の城壁と基壇である地下遺構だけが世界遺産に登録されています。多くの人がこの事実を知らないことがアンケート調査からわかりました。また写真を撮るためだけなど首里城は単なる観光地となってしまうのが現状です。これは世界遺産共通の問題と言えます。みなさんは世界遺産を訪れた際に意外に地味でびっくりした経験はないのでしょうか。世界遺産には見た目だけではわからない魅力があります。

私たちは実際に首里城と斎場御嶽を訪れそれらにはフотスポットとしてだけではなく世界遺産としての価値が十分にあることを知ることができました。しかしその真の価値が伝わっていないのが現状です。この問題の原因は遺産側と観光客側の両方にあるので

はないかと考えました。

遺産側の問題点としては、説明量の少なさ、ガイドが多言語化されていないことなどがあげられます。その改善案としては音声ガイドの導入（多言語対応）、関連遺産群とチケットをセットで販売することによって遺産全体の理解を深めるなどがあげられました。

また、観光客側の問題点としては、写真を撮るだけで満足してしまい、歴史的背景などには興味を示さないことがあげられます。インタビューの結果ガイドの方は観光客の興味に合わせて話をしてくれていることがわかったので学ぶ姿勢をもつこと、興味をもつことが解決策になると私たちは考えました。そのために沖縄の文化を知ることが出来る文献やドラマ、マンガを見ること、ガイドをつけること、他の構成資産にも足を運ぶことがあげられます。

今回私たちは沖縄を訪れる前に事前に『消えゆく沖縄』、『首里城入門』などの文献を読んだり、有料のガイドをつけたり、構成資産である斎場御嶽にも訪れました。その結果ただ観光地として訪れるだけでは知ることのできない価値を知ることが出来ました。

遺産側と観光客側が互いに歩み寄ることによって世界遺産の真の価値を知る、伝えることが出来るのではないのでしょうか。

発表者氏名：廣川 栞、佐藤 奈波、斎藤 佳奈、白幡 雄一、諸橋 慧耶

所属ゼミ：輿石ゼミ

発表タイトル：日本のワークライフバランス ～女性社会進出するより男性家事進出するべき！？～

発表概要：就職活動の際、企業のアピールポイントに育児休暇等の制度が謳われるが、社会に定着してないのが現状だ。長時間労働、支援・補助不足等多くの問題がある中「性別役割意識・女性社会進出」に焦点をあてて考えていきたい。そこで3つの国と比較しながら日本社会に潜む問題を深く掘り下げていく。

日本には男女格差が存在する。女性社会進出において非常に先進国の中で後れを取っている。府川・樋口（2011）は、背景には1.育休・産休が取得しにくい2.それらを利用せずに退職3.保育園の不足による待機

児童の問題 4.育児＝女性という固定概念があげられる。一方でこれからの社会を担っていく我々世代の男女にアンケートを取り、女性の社会進出について意識調査をしたところ、結婚・出産後も働き続けたいという意見や専業主夫であっても問題ないという意見が多数あり、女性の社会進出について肯定的な意見が多数あった。現在においても、夫が何か家事を手伝っている家庭が多く、近年男女に対する固定概念は薄れてきていると言える。

中国では性別役割意識において日本でも見られるように女性は約95%が家事に携わっている。しかし男性は約6割しか家事に参加していない。平日の家事労働時間は女性が男性の3倍多く、週末では約1.5倍もの時間を家事に費やしている。

ドイツでは女性は経済的な独立性を望む女性が多い。男女の役割分業意識を見ると、「夫には収入を得る責任がある」、「妻には家事と育児の責任がある」共に賛成の割合は日本と比べ極端に少ない。男女の固定概念は残されているが、少ない事が分かる。

カナダでは女性の就業率が高く、さらに幼い子供を持つ母親の就業率も6割を超えるまでに劇的に推移している。この女性の社会進出の割合の高さの一因として、男性の家事育児の参加率が高い事が挙げられる。

固定概念は薄れてきているとは言え、欧米と比較すると日本の割合は低い。総務省実施「社会生活基本調査」(2016発表)を見ると育児、家事、看護・介護合わせた家事育児時間は、妻が7時間34分、夫が1時間23分だ。父親の育児参加規定要因に関する仮説で支持されるのが時間的余裕仮説(労働時間が長ければ家事時間は減り、育児参加も減る)、行すべき家事・育児の量仮説(子供数が多い、または祖父母が同居していなければ育児・家事の量が増える為、育児参加は増えると想定される)

男性が家事を出来ない背景に性別役割分業意識・長時間労働等の問題が存在し、女性社会進出の足かせとなるのが長時間労働だ。これにより夫の家事・育児へ

の時間が減り、女性の家庭負担が増える悪循環が起こる。府川・樋口(2011)によると夫の休日家事時間が長い程第2子出生確率が有意に高くなる事が分かった。つまり、負担の増量が晩婚化・少子化に繋がる可能性もある。ワークライフバランスに限っても、日本には解決すべき問題が山積みだ。

発表者氏名：KIM JUAH (キム ジュア)

所属ゼミ：島田ゼミ

発表タイトル：走馬灯

発表概要：今回の学会で作るポスター作品は、フォトモザイクを使った絵である。フォトモザイクとは、様々な多くの写真や絵を集め、モザイクしたようにイメージプロセッシングし、遠く見れば、新しい絵がモザイクの作品のように見えるようにする技法である。私は、フォトモザイクを作ったロバートシルバス (Robert Silvers) の作品の中で『Living Jesus』にインスピレーションを受けた。地球上の生き物の写真を集め、イエスキリストの顔の写真を作るということにアイデアがものすごくいいと思った。その作品以外にも様々な名画を再現した作品もある。

そこで私は、私の昔頃から現在までの写真を集め、自画像を作りたい。生まれた時から現在までの私がいたからこそ今の自分がいるということをもフォトモザイクで表現したい。したがって、この作品の名前を『走馬灯』と名付けた。人は死ぬ直前に人生の初めから最後まで記憶の流れを見ることを『走馬灯のように浮かぶ』という表現を使う。このような表現を使い、この作品の名前を『走馬灯』にした。この表現は死ぬときによく使う表現であるが、この作品はただ記憶を振り返るという意味として名付けた。

フォトモザイクは、最近のフォトショップなどで簡単に作られる機能があるらしいが、それでは作る意味がないので、ロバートシルバス (Robert Silvers) のように直接工夫しながら、パズルのように作りたい。使うプログラムはフォトショップであるが、フォトモザイクの自動機能は使わず、写真を集め、張り付ける方法で作る。

発表者氏名：石川知季、鈴木滉大、那木緩菜、市川京、

木内真穂、栩木真優、染野瑞季

所属ゼミ：中島ゼミ

発表タイトル：スマトラ島ブキトラワンにおけるエコツーリズム

発表概要：インドネシアスマトラ島、メダンの北西約90kmに位置する村、ブキトラワン。世界自然遺産である「スマトラ島の熱帯雨林遺産」を構成する三つの国立公園のうちの一つであるグヌルス国立公園への観光拠点となっている。ここを訪れる多くの観光客の一番の目当ては、半野生のオラウータンを観察できるジャングルトレッキングツアーである。我々は9月11日から13日までの三日間、このツアーに参加してきた。その体験をもとに、ブキトラワンのエコツーリズムの在り方を、とりわけ近年個体数の減少が顕著であるオラウータンの保護の観点において検討する。

面積約43万km²のスマトラ島の土地には、かつて広く熱帯雨林が生い茂っていた。そこはオラウータンやトラ、ゾウをはじめとする多様な野生動植物の生息地であった。しかしながら、スハルト政権による開発独裁が開始された1966年以降、熱帯林の伐採、紙パルプ生産のためのアカシアの植林、アブラヤシプランテーションの拡大、その他違法な森林伐採などによって、広大な森は急激に減少し、生物多様性も危機にさらされている。

これらの自然破壊とそれに伴う動植物の減少に対して、WWFなどの援助により、ブキトラワンでは1973年にオラウータンのリハビリテーションセンターが開設された。以降、森林の減少によって親とはぐれた子や、密猟者が放棄した子を保護し、森に戻すための取り組み、また森に戻ったオラウータンの食事の補助や個体の管理を行っている。1990年代の初めにヨーロッパ人の手によってブキトラワンに最初のゲストハウスが建設され、1990年代後半以降には観光客への宿泊施設も増え、半野生のオラウータンを身近に観察できる場所としてブキトラワンは世界中から観光客が訪れるようになった。その結果、スマトラ島の森林破壊とオラウータンの保護に対する関心が世界的に高まり、プランテーションにより森林破壊を進める企業などに対して厳しい目が向けられ

るようになった。また2003年に集落を壊滅させ、数百人の犠牲者が出た、行き過ぎた森林開発が原因と思われる大規模な土石流の被害からブキトラワンを再生させたのはエコツーリズムであった。

しかしエコツアーには問題も指摘できる。例えば観光客がオラウータンに過度に近づいたり、時には触れてしまうことがあり、またツアー参加者を喜ばせるために過剰な餌の供給が行われていたりするなど、ツアーの在り方に疑問がある。我々の参加したツアー中にも、他の参加者が写真を撮るために過度に近づくと、団体で追いかける、昼食をツアー中に森の中でとり、複数のオラウータンが興奮して近づいてくるなどの問題と考えられる行動が見られた。また観光客の増加により人間の病気がオラウータンに伝染する可能性もWWFから指摘されている。

このようなブキトラワンのエコツーリズムは、オラウータンの保護という観点において、多くの問題があると考えられる。

発表者氏名：新崎 椋司、一ノ瀬 由梨、石本 真子、山口 万柚子、今井 奏、中西 真由佳、栗原 邑珠
所属ゼミ：2017年 海外フィールドスクール 芸術コース

発表タイトル：海外フィールドスクール 芸術コース
2017年度研究の成果発表

発表概要：本学会では海外フィールドスクールにおいて学生達の毎日の記録を元に異文化に対する学び、経験してきたものをポスター形式、映像、及び立体作品として発表します。ポスターでは学生それぞれの毎日の記録レポートを公開、映像作品では、保育園やパヤオ大学でのワークショップの記録映像を放映します。また、本授業参加学生の今井奏によるタイにインスパイアされたドールハウスをはじめとする立体作品の展示も行います。海外フィールドスクールにおける学びを多角的かつ様々な媒体を用いて表現する予定です。

芸術コースは7名の学生が受講、稲垣立男教授指導で2017年9月にタイ・チェンマイのアーティストインレジデンス Compeung とパヤオ大学キャンパスで実

施しました。チェンマイでは、現代美術館や博物館、ギャラリーなどの文化施設を見学、また保育園で小さな子供たちとのワークショップを実施しました。パヤオ大学では、美術学部の学生たちとコラボレーションによる作品制作を実施しました。私たちにとって、それぞれの場所での活動研究が異文化理解についての新しい経験となりました。

海外フィールドスクール・プログラム（Field School Program：略称 FS）とは、国際文化学部の2年次に実施される長期・夏期スタディ・アブロード・プログラム（SA）とスタディ・ジャパン・プログラム（SJ）で培われた異文化間のコミュニケーション力のみならず、それまでの本学・本学部における基礎的・専門的な学びを十全に活用し、海外のフィールドでより専門性の高い知識、研究手法、表現方法を修得するものです。2017年度から開始する国際文化学部の新しいプログラムです。具体的には地球規模問題（グローバル・イシュー）の分析力、課題発見／課題解決能力、異文化の中で表現する技能を養うことに主眼を置いています。日本と異なる環境で思考力や精神力を養い、多文化間での調査・実習や創作活動への取り組みを通して、持続可能な社会を構築できる自律的・利他的な人材育成を目指しています。

発表者氏名：伊藤啓太、阿部洋介、大友風香、小川礼乃、田上紗帆、塚本紗英、日小田優希、中野風沙
所属ゼミ：月野楓子ゼミ

発表タイトル：伝統と革新が交差する場
—「祭り」の再興と経済化からみる神田祭—

発表概要：長い歴史の中で、「祭り」の様相や機能は大きく変化してきた。昨今、東京にいれば日本各地の「祭り」の姿を季節や場所の垣根なしに見ることができる。本来各地方や共同体内で閉鎖的に行われていたものが、様々な場所に移植され、本来の意味や目的を喪失した状態で催されていることは少なくない。

かつて「祭り」とは、人々が全体との相互関係を確認し、共同体内で同志的意識を感じあうために必要不可欠なものであった（芦田 2001）。しかし、戦後の日本では社会の都市化が進行し共同体という概念そのも

のが薄れていった。人々が所属先を自ら選択し生活することが可能になった戦後日本社会では、祭りの本来の意味は失われていった（芦田 2001）。その結果「祭り」は急速に衰退した。しかし、現代において「祭り」は再び隆盛を見せている。「祭り」が閉鎖的なものから外部に開かれたものへと変貌し、その経済的価値が注目されるようになったのだ（芦田 2001）。また、現在の「祭り」の発展はその経済的価値が重視されるようになっただけでなく、人々が「祭り」に固有の宗教的価値を求めているからだとも考えられている（芦田 2001）。

本発表では、共同体の外部に開かれることによって「祭り」が経済的価値を帯び得るものとなることを「祭り」の経済化と定義し、その傾向が顕著だと思われる事例の一つである神田神社（東京都千代田区）の「神田祭」を取り上げる。その調査を通し、「祭り」の経済化の実態を明らかにすると共に、芦田（2001）が主張する現代的な宗教的価値の発見も試みる。

「神田祭」は幕府の支援を受け庶民たちから支持を受けた江戸時代に発展した。大正時代に入ると神社の神輿が渡御する「神輿渡御祭」へと変遷していき、各氏子町が町神輿を作り担ぐようになっていった。戦後には渡御祭から神幸祭への祭りの名称の変化があり、今日に至っている。

「神田祭」が経済化の事例の一つとしてあげられる理由の一つは外部（とりわけ企業）との交流が盛んなためである。2009年、「神田祭」の目玉の一つである「付け祭り」にアニメ「ケロロ軍曹」の山車が登場した。それを皮切りに「ラブライブ!」「ソード・アート・オンライン」などのアニメと「神田祭」そのものもコラボレーションを行うようになった。祭りではアニメのキャラクターが印刷された絵馬など様々なグッズが販売され、その購買のためだけに祭りを訪れる人も現れるようになった。

「神田祭」のこうした外部との交流から見えてくるのは、都市化と祭りの経済活動化による従来の意味の消失と新たな祭りの姿や機能の誕生である。そこで本発表では宮司さんをはじめとした神田神社及び「神田祭」の関係者にインタビューを行い、「神田祭」の経済化の実態とそれによって祭りそのものに生じた変化について調査する。

【参考文献】

芦田徹郎 (2001)「祭りと宗教の現代社会学」世界思想社

木下直之、福原敏男 (2009)「鬼がゆく 江戸の華 神田祭」平凡社

発表者氏名：森金 芽衣、島田 真希、北山 晟咲

所属ゼミ：松本 悟ゼミ

発表タイトル：多文化社会の中で生きる人々の暮らし—タイとミャンマーの国境の町メーソットの事例より—

発表概要：ミャンマーとの国境にあるタイのメーソットは、全人口の 75%をミャンマー移民が占める。国籍だけでなく、宗教や民族も異なる人々が暮らしている。先行研究では、文化と文化が接触するとき、そこには文化の差が見られるといわれている (青木 2003)。自文化を主張することで、その差が明確になり、異文化に対する排他的な考えが生まれることは少なくない。世界にある移民排斥運動や、異なる民族、宗教の間の対立は文化の差によるものもある (ibid.)。このように言われている中、メーソットではどのように異なる背景を持つ人々が暮らしているのかという疑問を持ち、10 日間の現地調査を行った。調査の結果は以下の 3 点である。

第 1 にタイ人が大量のミャンマー移民の流入に反対している様子がなかったことである。ミャンマー移民の中には、正規の橋を渡るのではなく、移民のためのボートで越境する人達がいる。このボートは 10 分に 1 本往来していて、ボートの船着場はまるでバス停の様だった。このように大量に流入する移民について、タイ人は「当たり前」と話しており、移民が入ってくることに不満を抱いている様子はなかった。このことが移民がメーソットで暮らせる理由の 1 つだと考える。

第 2 にミャンマー移民たちは彼らが過ごしやすい環境の中で暮らしているようだったことである。メーソットにはミャンマー語だけで書かれた看板やミャンマー移民のための商業施設があり、そこではミャンマー語しか聞こえてこなかった。また、「自分の住んでいる村にはミャンマー人しかいないため、タイ語を話さなくても支障がない」という話があった。メーソット

において、ミャンマー移民の多さがタイ人との関わりを希薄にしている一面もあると考える。

第 3 に移民だけでなく、タイ人の中にも様々な民族や宗教、出自を背景に持つ人々があり、そのことを肯定的に捉えている人がいることである。それは町並みからも見て取れ、イスラム教徒の多い道を進むとすぐに中華系の町並みに変わった。タイ人のイスラム教徒と華人のインタビューからは、自分たちの持つ信仰心や同胞意識を大切にしながら、異なる文化を認めている様子が見受けられた。更にメーソットの多様性を「メーソットの特徴」として肯定的に捉えているのが両者からうかがえた。

調査の結果、メーソットでは人々が移民に対しても異文化に対しても排他的ではなく、共にメーソットの町で暮らすことを肯定的に捉えている様子があったといえる。これにより、メーソットで多様な背景を持つ人々が共に暮らせるようになっていたと考える。

とはいえ、タイ政府はミャンマー移民教育を認める代わりにタイの国家斉唱、タイ語の学習を求めたり、移民に対する制度も何度も更新したりしている。メーソットにおける多文化共生はこのような政府の影響を受けやすく、脆いものであると言える。

参考文献

青木 保『多文化世界』岩波書店、2003

発表者氏名：木内真穂 土屋麻梨恵 山田茉衣

所属ゼミ：海外フィールドスクール環境コース (島野ゼミの枠で)

発表タイトル：2017 年度海外フィールドスクール 環境コース 受講報告

発表概要：法政大学スーパーグローバル事業の取り組みの一環として本年度より海外フィールドスクール (海外 FS) が開講された。このプログラムは SA や SJ で培われた異文化間コミュニケーションや大学での学びを十分に活用し、海外のフィールドでより専門性の高い知識、研究手法、発表手法を学ぶという目的で開講され、初開催となる今回は島野智之先生が引率する環境コースと稲垣立男先生が引率する美術コースが行われた。

私たちは環境コースに参加してタイ南部の Hat Yai

(ハジャイ：ソンクラ県)にある Prince of Songkla 大学 (プリンス=オブ=ソンクラ大学, PSU) のプログラムに 8 月 6 日から 12 日までの 1 週間という日程で受講した。環境コースでは、タイ南部における現代的な環境問題や対策について現地を訪れて学んだ。

到着 1 日目の夕食はウエルカムディナー, 2 日目午前中にオープニングセレモニーとガイダンスが行われタイの気候や地形などを学び、午後から、付近の国立公園内の Ton Nga Chang Waterfall という滝を訪れ、様々な生物の存在を五感で体感することで手つかずの熱帯の森林の生物多様性を理解した。3 日目にはモノカルチャーのゴム農園と持続可能なゴム農園を訪れた。4 日目と 5 日目には 1 泊で、ソンクラ北部のノイ湖まで足を伸ばし、湿地への外来植物の侵入と観光業を取り巻く問題を学び、また道中ではアブラヤシのプランテーションを訪れて、他の農園との比較を行った。6 日目には汽水湖であるソンクラ湖に隣接するマングローブ林を訪れた。午後はフィールドスクールで得たことをまとめ、PSU の学生の前でプレゼンテーションし、ディスカッションを行った。翌日帰国した。タイは世界最大の天然ゴム生産国としても知られているように、ゴム農園を見かけることが多かったが、アブラヤシの農園は少ないながらも見る機会があった。天然ゴムはタイヤなどのゴム製品に使われ、アブラヤシはパームオイルとなった後に食用ではチョコレートやスナック菓子、食用外では石鹸や洗剤、化粧品などに利用されるなど様々な形で私たちの生活に関わっている。私たちは日本に居ながら知らぬ間に、ゴムやパームオイルの生産地である東南アジアの森林と密接な関わりを持っているのだ。

持続可能なゴム農園では鳥や昆虫が多かったが、アブラヤシ農園ではほぼ生物を見かけることもなかった。森林であった土地が開墾されアブラヤシのプランテーションに変わりゆく様子を目の当たりにし、国を挙げてアブラヤシの農園を増やそうとしていることが伺える看板などを見たりした。タイの森林が今私たちの目の前で変化していることを強く実感することもできた。この発表では私たちが海外 FS でどのようなことを学んできたか、また、日本と東南アジアの繋がりについても実際の写真と共に紹介したい。

発表者氏名：小俣柚里

所属ゼミ：大嶋ゼミ

発表タイトル：PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み—Minimoog を例として—

発表概要：1. 研究概要

本研究は Pure Data プログラミング環境において演奏可能なミュージックシンセサイザーを実現するものである。モデルとして Minimoog Model D を参考に各機能を Pure Data 上で実装した。更にボリュームやジョイスティック等の部品を用意しより実機に近い操作性を追求した。

2. 研究の目的

われわれの研究室では、オープンソースのソフトウェア Pure Data による楽器、音響機器、メディアアートの製作を目指している。昨年は、アナログシンセサイザー Minimoog Model D の構成原理のモデル化に取り組んだ。この取り組みをもとに、今回は昨年未実装だった部分と Minimoog フロントパネルの制作に取り組んだ。それにより Minimoog の設計思想により忠実な作品を制作し、実機を想定した音作りを可能とすること目標としている。

3. 研究の方法

ソフトウェア部分にはプログラミング環境 Pure Data を利用した。PureData (以下総称的に Pd と略す) は、プログラミングをすることで自由に音楽や映像を作成することができ、特にマルチメディアの構築に適している。Minimoog 内部の接続関係については Minimoog Model 204D のマニュアル『SERVICE MANUAL for MINIMOOG』を参考にした。実際の Minimoog の音との比較については、ソフトシンセ『RA Mowg』を参考にした。

ハードウェア部分については、制御部品の出力データの読み取りに Arduino Uno を利用した。Arduino 開発環境では、C++風の構文規則がユーザに提供されている。

また、Pd と Arduino の連携には外部オブジェクト Pduino とプロトコル Standard-Firmata を用いた。

4. 研究成果

Minimoog のフロントパネルに備わる部品の実装に

は可変抵抗、ロータリースイッチ、トグルスイッチ、ジョイスティック、スライダースイッチを使用した。Arduino 側にはプロトコル Standard-Firmata を、Pd 側には Pduino をそれぞれ用意し、Arduino から受け取った値を Pd 上で用途に合わせマッピングした。

また、昨年未実装であったモジュレーション、カットオフ周波数の鍵盤追従を実装した。

モジュレーションは、VCO3 とノイズの二つのモジュレーション・ソースを混ぜて調整する。この時 VCO3 は OSC3.CONTROL スイッチによってキーボードから独立させる。この状態の VCO3 は 1~6 オクターブの範囲で動作し、モジュレーションの速度を変化させる。更に、モジュレーションホイールによってモジュレーションの深さを変化させることが出来る。VCO 部分、フィルター部分の各モジュレーションスイッチをオンにすることでピブラートのような効果やフィルターのかかり具合を揺らす効果を再現することができる。

鍵盤追従は、押下した鍵盤位置に連動して VCF のカットオフ周波数の変化とその追従比率を切り替える。追従比率はキーボードの音程に対し 1/3、2/3、3/3 の割合である。

5. まとめ

昨年の研究成果を基にカットオフ周波数の鍵盤追従、モジュレーションを追加実装しモデル化の質の向上に努めた。これにより Minimoog の基本機能が全て実装され、実際の演奏を想定した音作りが可能となった。また、Arduino を用いて Minimoog のフロントパネルの制作に取り組むことで、Puredata と他のソフトを連携させたプロトタイピングの有用性を確認した。

発表者氏名：大嶋 良明 (オオシマ ヨシアキ)

所属ゼミ：大嶋ゼミ

発表テーマ：PureData や Arduino を用いたメディア系授業の試みー音楽音響と電子楽器の製作を中心として

発表概要：本研究は担当授業の中からメディア系科目 2 科目における実践を取り上げ、実習型の授業運営の中での気づきや教材設計の課題点などを報告する。報告の対象とする科目は「コンピューター音楽と音声情

報処理」並びに「情報アプリケーションⅡ」である。前者は筆者が継続的に担当しこれまでの数年間はビジュアルプログラミング環境 Puredata を利用した授業内容としているが、今年度新たに盛り込んだ科目内容の改良について報告する。後者では今年度初めて担当する科目であるが、そこでは昨今のモノづくりで好んで利用される Arduino を教材とし、インタラクティブな電子楽器の制作をテーマに Maker ムーブメントへの導入を目指した。

Puredata:

情報教室において Pd の拡張版(Pd-extended)を利用した。ただ Pd-extended は最近その維持更新が終焉し、ユーザ利用の中心は本流の Pd vanilla に移行しつつある。しかし授業での参考書も含めて入手可能な成書文献は長く利用された Pd-extended によるものが多く、これらの文献が現状を反映した改訂を経るには時間がかかる。そこで今年度の練習問題やプログラム例では Pd-extended 固有の作法は可能な限り回避し Pd vanilla 環境に誘導するよう心がけた。新規の試みとしては、学期末の総合演習としてステップシーケンサーによる自動演奏、演奏音源としてのドラムマシンとシンセサイザー、空間系の音響エフェクター、ライブ演奏機能などを盛り込んだ制作課題を設定し、その実現に向けて各単元内容を組み変えたこと、新たな学習単位として 1) キーボードによるインタラクティブな演奏機能、2) ダイアトニック和音など器楽演奏上の基礎知識やエフェクターのテンポ同期や残響処理などプログラミングによる問題解決を組み合わせること、3) 音響合成の手法として減算型シンセサイザーの各種音源波形、FM 音源、声門体積流など、電気音響や音声情報処理での知見を含めたことなどが挙げられる。

Arduino:

レイアウトフリーの情報教室において Arduino IDE と Mozzi ライブラリをによる環境を構築して実習した。筆者は芸術工科系の研究留学で身近に体験した Maker 系の制作環境とその授業利用に関心を寄せて

おり、今年度はその第一歩として Arduino を題材とする電子楽器や制御インターフェースの制作を授業内容に落とし込むことを目指した。授業の前半ではスイッチ、ボリューム、各種センサ入力と LED、スピーカー出力などの使用法を音響出力を想定して学ばせた。特に Tinkering すなわち簡単に手に入る日用品を材料に作りながら考えることを目指した。後半ではマイコンで音を作ること、音に反応するモノ作りを課題設定した。一般に音楽音響の生成にはハードウェア割込みやタイマ機能などに依存する実時間処理が必要となるが、標準の Arduino は低速であり標準の開発環境も実時間処理には適さない。そこで音響情報処理に特化した外部ライブラリ Mozzi の利用や DSP 能力に Arduino 互換機の利用を検討した。

以上、今年度の担当授業でのメディア系科目の実践内容を報告し課題設計面での問題点、気づきなどを検討した。

C. 映像部門

発表者氏名：布施恩実、堀田真央、皆川達也、岸山里佳子、島野友花、中戸川望、草崎美玲、中山佳子
所属ゼミ：鈴木靖ゼミ

発表タイトル：戦後補償に潜む不条理～韓国人元 BC 級戦犯の闘い～

発表概要：戦後補償に潜む不条理
～韓国人元 BC 級戦犯の闘い～

1945 年に第二次世界大戦が終わり、戦後の戦犯裁判で東條英機ら A 級戦犯のほか、多くの軍人・軍属が裁かれました。しかし、その中に捕虜監視員として日本の軍属として働かされた朝鮮半島出身の青年たちがいることをご存知でしょうか。

今回私たちはその中の一人である李鶴来さんに注目し、彼を通して、一人でも多くの人にこの事実を知ってほしいとの思いから映像制作に取り組みました。李鶴来さんは 1925 年 2 月 9 日(旧暦)、全羅南道宝城郡で生まれました。17 歳のときに、日本軍軍属である捕虜監視員の募集に応じ、タイとミャンマーをつなぐ

泰緬鉄道建設のために使役された捕虜の監視にあたりました。戦後は戦犯に問われ、オーストラリア裁判で死刑判決を受けましたが、20 年に減刑されました。1952 年のサンフランシスコ平和条約の発効によって、「日本人」ではなくなった李鶴来さんは釈放を期待しましたが、「日本人」として戦争に関与したとされ、刑の執行が続き、「日本人」として罪を負わされ、補償は「外国人」として受けることができませんでした。1955 年には韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者らとともに「同進会」を結成し、現在は「同進会」の会長を務められています。92 歳となった今でも日本政府の謝罪と補償を求めて闘い続けています。

この李鶴来さんについて調べているうちに私たちは「同進会を応援する会」と関わりを持つことができました。10 月 30 日から 11 月 5 日にかけて九段下で「外国籍元 BC 級戦犯不条理の記憶」というパネル展が開催されました。私たちも実際にパネル展の設営から開催中にかけて手伝わせていただきました。「同進会を応援する会」の関係者のみなさんとともに活動しながら感じたことは、それぞれこのことを知るきっかけは違うけれど、ただの過去の事実としてこの問題を放置せずに、まるで自分の問題であるかのように強い責任感を持って奮闘しているということです。日本政府に謝罪を求めて今でも運動を続けている李鶴来さん、その李鶴来さんを支え続けている関係者のみなさんの姿を見て、私たちも「韓国人元 BC 級戦犯」を広めたいと強く思いました。

先に述べたように私たちは李鶴来さんを通して、韓国・朝鮮人元 BC 級戦犯者について広めるためにこの映像を制作しました。戦争を直接経験した方が少なくなる中、この事実を伝えていけるのは、これからの未来を担う私たち大学生です。歴史の中に埋もれてしまった事実を知ることでは私たちは新たな視点を得ることができます。一つの視点にとらわれず、柔軟な理解力を持つことは「国際社会人」が持つべき大切な要素です。日韓の間には今でも複雑な問題が残っていますが、この映像がみなさんにとって、日本・韓国、両国について考え直す契機となることを願っています。

発表者氏名：吉野そめい、杉浦陽、桜庭海輝、鳥越浩

暉、福田朝斗

所属ゼミ：島田ゼミ

発表タイトル：無人駅

発表概要：あらずじ

実家の母を訪ねた帰り道の主人公、電車で寝過ごす。慌てて降りた駅は無人。さらに2時間に1本しか電車が来ない辺境と知り驚愕。

人の気配も携帯の電波もなく、嘆く主人公。目につくものすべてで時間をつぶす暇な男子大学生と化す。

さすがにやる事がなくなった頃、女子高生登場。もちろん主人公、女子高生を逃す手はない。

やっと来た電車にのった主人公、駅での2時間を振り返る。隣には女子高生が座り、主人公無事帰宅。

人物紹介

主人公：

一人暮らしの平凡な男子大学生。両親は離婚し、母親が実家に1人で暮らしている。

女子高生：

高校3年生。この駅で好きな人を待ち続けている。駅で主人公の話し相手になる。

先生：

妻子持ちの高校教師。女子高生の元担任。しかし離婚と同時に転校し、今は独身生活を送っている。

作品の意図

この作品は、シナリオを前半後半に分担し、2人で共作しました。そのため、物語の雰囲気は前半と後半で異なっています。物語の前半では主人公が暇を持て余すゆっくりな物語の流れに対し、後半では女子高生の登場により物語の流れが一転し、はやくなります。この前半と後半での物語の進むはやさにも注目していただきたいです。また、私たちは2つのテーマに沿ってこの作品を制作しました。

1つ目は「暇つぶしに現れる個性」です。暇になったときの過ごし方は人それぞれで、その人の個性の出るところであると考えます。より個性をだすために、「無人駅」、「人の気配はない」、「携帯は圏外」、「駅の中だけで時間をつぶす」などの制限をかけた舞台設定をしました。またシナリオ作成の2人だけでなく、ゼミ内

からも多くの案を出していただきました。そのため、暇つぶしから溢れんばかりの個性を感じられるものになっています。

2つ目は「自分が見ている世界、知っている世界がすべてなのか」というテーマです。自分で見たものを信じることは普通のことです。しかしその見える部分がすべてではないと感じます。写真と実物、見た目と性格、または人間関係など、見る角度によって異なってくるものがあります。今自分がみているものが本物かどうか考える機会になればと思い、作品を制作しました。

見どころ

暇つぶしの個性

主人公と女子高生の関係

しりとり謎

寒空の下で体を張る主人公

ビデオ収集家によるカメラワーク

発表者氏名：野明菜々子、佐藤憲将

所属ゼミ：島田ゼミ

発表タイトル：芸人という生き方

発表概要：この作品はある芸人さんの生活に密着したドキュメンタリー映像です。

就職活動を終えた4年生も、就職活動を控えた3年生も、一度は自分の人生について考えるのではないのでしょうか。

過去の自分を振り返り、自分のやりたい仕事について考え、お給料や福利厚生も加味して受ける会社や内定承諾をする会社を選ぶと思います。

さて、私は一年休学をしていました。なのでだいたいの同級生は今、社会人一年目です。

彼らのたまの休みに会うと、「私はどうしてこの仕事を選んだんだろう、本当にやりたいことってこれじゃないかも」といった言葉をよく聞きます。

ツイッターやインスタグラムでは、「月曜日になってほしくない」「早くやめたい」などという言葉を目にします。

ある日、社会人一年目の友だちが言っていました。「就

活のときにもっと考えればよかった。会社の規模や、いかに早く決められるかなんて今考えるとどうでもいいことだった。自分の納得いく答えを学生時代にじっくり考えるべきだった。」と。

しかしこんなことは社会人になってから気づくこと。ある程度名の知れた大学に通う私たちにとって、就職活動は戦争で、そこでいかに勝ち抜くか、どんな選択をするかが全てに思えてしまうのも事実です。一斉にエントリーが解禁され、学校にもスーツを着た人が増え、パソコンルームでは就活生がカタカタと Web テストに勤しむ。そんな光景を一年生のときから見てきたらそういう環境が自分の世界の全てになってしまっても無理はありません。

そんな環境の中生活していると、期限までにエントリーシートを出し、選考に進み、いかに内定を早く、そして多く取れるかが大事になってきて、本当に大事なことを見落としてしまうことも少なくありません。

だからこそ、外の世界に触れて「世の中にはいろんな人がいるんだ、自分の人生は自分でじっくり考えて決めていいんだ」と気づくことは今後の財産になると私は思っています。

今回のドキュメンタリーで取材したのは小泉翔斗さん 26 歳。さくらだモンスターというコンビで芸人をしています。

彼は早稲田大学の理工学部出身という高学歴を持っているにも関わらず、現在はアルバイトをしながら芸人としての人生を歩んでいます。

周りが就職活動をしている中、在学中から養成所に入り、安定という言葉から真反対の世界に飛び込みました。

就職先なんてどこにでもあるはずの彼が、どうしてそのような世界を選び、アルバイトをしながらも続けているのか。

芸人を続けるモチベーションはどこにあるのか。彼のリアルな生活に密着しました。

内定先が決まっている 4 年生もこれから就職活動を控えている 3 年生も、将来に何かしらの不安はあると思います。

どんな選択がベストなのか、自分で選んだ選択肢でよかったのだろうか。

そんな漠然とした不安を抱えた人たちに、こういう人もいるんだ、ということを知っていただけたらと思いこの作品を制作しました。

発表者氏名：若宮 樹

所属ゼミ：稲垣立男ゼミ

発表タイトル：in and out

発表概要：法政大学国際文化学部学部生 4 年本多彩夏をモデルに武術太極拳のプロモーションのための映像作品。

あなたは「武術太極拳」をご存知だろうか。

それは我々がよく目にする健康のためのエクササイズのようなものではなく、側宙やジャンプなどが含まれる極めてアクティブなスポーツ（＝武道）である。私は友人であり、武術太極拳では国際的に活躍している本多選手の演じるダイナミックな動き、それにもかかわらず指先まで意識が通った細やかな身体表現であるという点を目の当たりにして感銘を受けた。しかし、この素晴らしいスポーツはオリンピックの最終候補種目に選ばれながらも未だ知名度はそれほど高くない。オリンピックでは知名度も重要な要素の一つとして考えられており、今後このスポーツがオリンピックの正式種目になるためには不可欠な要素である。私は今回、一つの試みとして武術太極拳の魅力を伝えるため、本多選手を被写体として映像作品を制作することにした。

作品を制作する上でのテーマとしては「in and out」

（インプットとアウトプット）を軸にした。このテーマは「太極」をもとに着想を得た。「太極」とは万物の根源であり、ここから陰陽の思想が生まれた。この二元的な概念は、互いに対立し、互いに依存し、互いに入れ替わるものと考えられ、物事の生成、発展、消滅、転化するプロセスに対するものである。また陰陽は「静と動」「虚と実」という概念でも表現される。また、「静」や「虚」は消極的でありながら有用でないものだとされるが、実は重要であるという。これを競技ベースで考えた際に、想起させるのが「練習と本番」や「負けと勝ち」などである。作品にはこの重要な二極対立を落とし込んでいく。

本学部生である本多選手は 2015 年世界武術選手権大会 3 位、2016 年武術套路ワールドカップ大会 2 位などと優秀な成績を収めている。私が最も驚いたのは彼女のバイタリティである。彼女は日々の厳しい練習に加え、英語、スペイン語、教職科目まで大学でチャレンジし、アルバイトも 2 つ掛け持ちしており、人一倍物事をこなしている。彼女のスケジュール帳は常に真っ黒で、武術太極拳の選手の中でもここまで様々なことを経験しているのは多くはないという。これこそ「陰陽思想」における、対立でありながらも相互関係にあり、うまく循環している状況ではないか、と感じた。

そこで吸収されたものは武術太極拳でどう体現されているのか。作品では本多選手の演技に武術太極拳の魅力を変えて表現していきたい。

発表者氏名：後藤亮介（ゴトウリョウスケ）

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表タイトル：百年の杜 一生き方が語る NGO—

発表概要：近年、学生にとって国際ボランティアがより身近になっている。大学が企画し単位として認定されるものや、長期休みを利用した NGO 主催のインターンシップ等、本人の意欲次第で様々な機会が用意されている。中にはそうしたボランティアを経て、より国際協力に携わりたいという意識が高まり、大学卒業後、NGO への就職を進路として考える者も増えてきている。だが、寄付金や助成金によって運営される NGO について、給与や安定性の面で漠然とした不安を抱く学生も多く、NGO への就職を踏みとどまらせる要因のひとつとなっている。では実際に NGO に就職し生活している人は、人生において何を考え、どのような選択をしているのだろうか。その形を明らかにするため、元 NGO 職員の姿を映像で追った。

本作で取り上げる人物は、神奈川県在住の松尾康範氏である。神奈川県で育ち、現在は横須賀市で居酒屋「百年の杜」を営んでいる。地産地消が店のコンセプトであり、三浦半島の生産者とコミュニケーションを取りながら店で扱う作物を栽培・取引することで、地域の産業と連携した食の提供が売りだ。そんな居酒屋の店主となる以前の松尾氏は、学生時代のインターンシッ

プを経て、国際協力 NGO である日本国際ボランティアセンター（JVC）の職員としてタイ東北部で「むらとまちをつなぐ市場」プロジェクトに従事していた経験を持つ。農民たちが作物の売買だけではなく、情報交換も行える場としての市場を村に作ることで、村の外部からの食材に頼らない地産地消の農業を支えた。松尾氏の食へのこだわりは、かつて自身が精を出した NGO での国際ボランティアが大きく影響しているのだ。タイで自分たちが作った市場のように、居酒屋店主という生産者と消費者を繋ぐ立場になった松尾氏は、まず自分たちの食を考えることが、ひいては世界の食糧問題を解決するという信念を変わず持ち続けている。また、日本の地域社会を中心に活動するようになった今も、タイの農家を日本の農村や食材流通現場に案内するなど、タイとの協力も忘れていない。こうした居酒屋を中心とした草の根での国際協力の姿に共感し、店には NGO 関係者や国内外からの客が集い、松尾さんの活動を「真の国際協力」の形であると評価している。

松尾氏の姿から、NGO とは職業ではなく生き方と同じなのではないかと考える。NGO 時代も居酒屋店主の今も、食で地域と世界に貢献するという信念は変わっておらず、むしろ新たな人生の選択の際は NGO での経験が軸となっていた。たしかに NGO は高収入とは言えないが、自らの想いを実現する場、そして活動を通して自分自身を形成する場として機能しているといえる。世界を助けるという印象が強い国際ボランティアの世界だが、就職を目指す学生たちは、あくまで自分がどう生きたいかを再確認することが重要である。

発表者氏名：鳥越浩暉

所属ゼミ：島田雅彦ゼミ

発表タイトル：『3.12 栄の灯火』

発表概要：長野県最北端に位置する栄村は、人口約 2300 人、山あいの豪雪地帯にある農林を産業とする自然豊かな村。東日本大震災から約 13 時間後、2011 年 3 月 12 日午前 3 時 59 分、マグニチュード 6.7、震度 6 強の衝撃が村を襲った。それだけではなく、同 5 時 42 分までのわずか 2 時間ほどで、震度 6 弱を観測

する2回の強い余震に見舞われた。のちに長野県北部地震と呼ばれる大震災。

しかし、東日本大震災の影に隠れ、報道されない中、同村では3人が犠牲、計3回の強い揺れで住家694棟、非住家1048棟が損壊、雪崩や土砂崩れで3集落が孤立する等の被害と孤立状態が続いた。

3. 11の影響でどうしても【復興が遅れてしまった栄村の現状を追うドキュメンタリー制作】に励んだ。急遽集めた撮影メンバーとの温度差、追悼式や議員への撮影許可を得ることが大きな課題であった。

「なぜ、栄村を取材するのか」と自分にもう一度深く聞いた。3. 11についての制作のほうの人々の視線は集まる。だが、学生という小さな立場は視聴者数などの公益性を重視せずに、独自の視点で制作ができる。そして、深刻な高齢化問題も抱える栄村を、学生である我々が取り上げることが、若い世代への強い問題提起になると答えを出した。その想いがメンバーにも伝わり、私の想いを取材先へ積極的に伝えてくれた。その結果、ローカル放送局しか撮影許可が降りなかった追悼式や市議会委員への撮影許可を得た。

この作品は栄村震災復興記念館「絆」で上映される予定だ。

発表者氏名：矢富百夏

所属ゼミ：稲垣ゼミ

発表タイトル：映像のアート ミュージックビデオの表現

発表概要：映像技術が発展4K8Kと高画質化。ドローンなどの撮影技術、CG技術の向上。その技術によって幻想的でハイテクノロジーな映像が作られるようになってきた。そのような技術のクオリティが重視された映像が作られる傾向にあるなか、私は映像の芸術的魅力について考え直し自分なりに映像の魅力を引き出せる作品制作をしたいと思った。映像ならではの魅力、そこにある芸術性、そして時代に即したツールとしての映像をとらえることに価値を置き映像を制作した。ミュージックビデオ『SHIODOKI STATION』、『アポカリプス』、『モモ』である。写真や絵画にない、動きを撮る特徴を生かすためダンスをいれ軽快さを取り入れたり、映像が音楽とコラボレーシ

ョンできることに着目して様々なバンドに協力しミュージックビデオという形の作品にした。映像のハイテクノロジーさよりも絵画のような温もりを感じる作品制作を目指しどの作品にも手作りの絵やモチーフを制作し撮影している。

無料動画等で映像が溢れかえっている中、全編をみてもらえるような映像の面白さも重視している。

発表者氏名：日計美咲 近澤晃

所属ゼミ：島田ゼミ

発表タイトル：The Rose

発表概要：マフラーや手袋をする季節が近づいてきた頃、都内の大学に通うある1人の女の子は人生で初めての経験をする。それは一目惚れだった。相手は偶然通りすがりに肩がぶつかった、学部も名前も知らない男の子。ただ同じ大学だということは知っていた。それからというもの、彼女は彼と鉢合わせることが多くなった。廊下はもちろん、エスカレーターやエレベーターなどあらゆる場所で。

そんな日々の中で彼女は、廊下の掲示板にあったイルミネーションのポスターの前で立ち止まる。行けたらいいなあと思っていると、隣には一目惚れをした彼が立っていてポスターを眺めていた。ふと目が合っそこで初めて言葉を交わし、連絡先を交換してイルミネーションと一緒に見に行くことになる。その後、何度も2人で遊びに行ったりして、彼からの告白で晴れて付き合うことになった。

しかし、そんなに長くは続かなかった。なぜなら、彼には他に付き合っている女性があり、女の子は浮気相手として遊ばれただけだったからである。偶然デートしているところを目撃した女の子は彼を後日呼び出し、別れを告げる。それから彼女の舞が始まる…。

「楽しい」「寂しい」「悲しい」「嬉しい」等の感情の中で人間が思わず共感してしまうものは何なのだろう。それは哀や苦などの負の感情だと私たちは考える。そしてそれらの感情は、日常の中で表情や声色、言葉を経由して人々に伝わっている。身近な例ではドラマや音楽がある。しかし、感情を伝える方法はそれだけではない。身体全体の動き、指先、つまさき、つまりはダンスで感情を表現できる。この映像作品では、あ

りきたりな男女の恋愛の話の中で生じる感情、特に悲しさや悔しさ、寂しさ、切なさ等の負の感情をダンスで表現することに挑戦した。普通ならばダンスにおいて表情はダンススキルと同じくらい重要だと考えられているが、どこまでダンスだけで表現できるのだろうかということを試したため、表情は一切映像には入っていない。また、恋愛の物語のシーンはサイレントにし、ダンスシーンはピアノの演奏のみで、半分だけ無声映画のように仕上げている。これは、映像の中のたった一ヶ所しかないダンスシーンをより一層引き立てるために工夫したところでもある。

女の子が男の子に別れを告げる場面からは、それまでのストーリーの雰囲気はゆっくりと変わっていくところなので、その変わり具合と主人公の遣る瀬無さや悲しさ切なさを感じていただきたい。

D. インスタ部門

発表者氏名：青木璃紗、清田美江、沢田奈美絵、繁永実侑、柴田彩生、渋谷朋広、長谷川智咲、福田光、宮部太貴、牧野美咲、加藤幹大、喜多暲介、岡島春紀、西田比奈、齋藤くらら、末久笑子、仲田佳央、岩井渉
所属ゼミ：栗飯原ゼミ

発表タイトル：#小さなアフリカ見つけた

発表概要：【#小さなアフリカ見つけた】

アンテナを広げたい。普段の何気ない生活の中に私たちは小さなアフリカを見つけることができる。私たちが毎日持ち歩いている iPhone。その部品に用いられるコルタンはコンゴ民主共和国から 60%以上を輸入している。小腹が空いた時に食べるチョコレート、ほっ、と一息つきたい時に飲むコーヒー、やめられないんだよなー、なんてぼやきながら吸うタバコ、普段の生活に当たり前のよう存在するたくさんのもの……。それらの多くはアフリカで採掘されたり、生産されたりするもので成り立っている。

日本で暮らす私たちの中には、アフリカ大陸はまだ貧しく、支援の対象であると思っている人が多くいるのではないだろうか。だが、ひとたび自分たち生活を顧みると、さまざまな側面でアフリカの豊富な資源に

支えられて成り立っていることがよくわかる。

私たちがアフリカを支えているのではなく、むしろアフリカが私たちの世界を支えてくれている。そして、アフリカは遠く離れた場所などではない。私たちの身の回りに、日常のそこかしこに、アフリカは存在している。

私たちが今回企画する「#小さなアフリカ見つけた」では、教室の空間を用いて、私たちの毎日の生活の中に「アフリカ」を見出し、それをディスプレイすることにより、参加者にアフリカを身近に感じてもらうことが意図されている。普段の生活で接しているものを写真という形で切り取ってポスターにし、Instagramの投稿画面を表現する。なじみ深い Instagram というツールを用いて、より日常に近い雰囲気を演出することを目指したい。

発表者氏名：金田優輝

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

発表タイトル：「世界遺産の真の価値の伝え方、知り方」

発表概要：

発表内容

私たちのゼミではポスターセッション、インスタレーションの二部門での発表を通じて“世界遺産の真の価値をどのようにすれば知ること、伝えることができるのか”を沖縄を例に発表します。インスタレーションでは琉球王国のグスクおよび関連遺産群の構成資産である斎場御嶽について詳しく説明します。

発表内容

沖縄といえば主に青い空や美しい海を思い浮かべるでしょう。SNSで「沖縄」と検索すると昨今流行りのフォトジェニックな写真を沢山見ることができます。みなさんは実際に沖縄を旅行した際、「一応観光ついでに沖縄の世界遺産を見学しよう」、「ただ何となく沖縄の世界遺産でも見ておこう」などと考えたことはありますか。世界遺産としてユネスコに価値を認められた「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」の構成資産である首里城や斎場御嶽も写真を撮るためだけ、など単なる観光地となってしまっているのが現状です。これは世界遺産共通の問題とも言えます。ま

たみなさんは世界遺産を訪れた際に意外に地味でがっかりした経験はないでしょうか。ですが世界遺産には見た目だけではわからない魅力があるのです。

私たちは実際に齋場御嶽を訪れ、それらにはフォトスポットとしてだけではなく世界遺産としての価値が十分にあることを知ることができました。しかし現状は写真を撮るだけで満足してしまい、歴史的背景などには興味を示さない観光客が多く見受けられ、齋場御嶽の真の価値が伝わっていないのが現状です。また現在も礼拝の目的で訪れる方がいるにもかかわらず、礼拝者と観光客の訪れる時間帯は明確に分けられていません。齋場御嶽のガイドを行っている方にインタビューを行ったところ、「今では観光客に囲まれてしまうので、礼拝者は以前のように静かにじっくりとお祈りをするのができなくなり、祈りの場が損なわれてきているのではないかと危惧しており、齋場御嶽の抱える課題は山積みです。そこで私たちはこれらの問題の原因は遺産側と観光客側のどちらか片方にあるのではなく、両方にあるのではないかと考えました。インスタレーションでは現在の問題として挙げられる、写真を撮るだけで満足してしまい歴史的背景などには興味を示さないという観光客側の問題点や、観光客の理解を深めるための説明量の少なさや、礼拝と観光の時間帯の区別がはっきりなされていないなどの、遺産側の問題点を指摘し、次に実現可能な遺産側と観光客側双方の改善策の提案を行い、最後に私たちが考える齋場御嶽の改善後の姿を再現し説明することで、より詳しく現実的に“世界遺産の真の価値をどのようにすれば知ること、伝えることができるのか”という問いに対する解決策を提示しようと思います。

このように片方だけでなく遺産側と観光客側が互いに歩み寄ることによって世界遺産の真の価値を知る、伝えることができるのではないのでしょうか。

発表者氏名：大瀧愛莉、高橋麻理子、佐野奈々美、榊林佳生子、石川紗綾、齊藤美紀、中澤美智、藤巻夏実、保土田千鶴

所属ゼミ：森村・川村ゼミ

発表タイトル：表裏一体 ～精神病者のリアル～

発表概要：【インスタレーション概要】

抗うことができない幻聴や止まらない幻覚や妄想、自ら発した言葉と意図しているものが合致せず、他者とコミュニケーションがうまくはかれないなど、精神病者が日々苦しみ、戦っている“現実（リアル）”をテーマにインスタレーションを行う。

今回の展示空間は、本来の機能を失ったイスのオブジェ、シニフィアンとシニフィエがずれてしまった絵画、自分を攻撃する言葉だけが浮き出た文字などで構成しており、来場者に精神病者の“リアル”を体験し、その意味を考えてもらう。

【コンセプト】

森村ゼミでは、今年度、『犯罪・アートの精神分析』をテーマに、精神病者が引き起こした犯罪から、彼らが何におびえ、なぜ罪を犯してしまったのかを、ラカンの理論を用いて学んでいる。これを手掛かりに、今回のインスタレーションを発案・制作した。

「人は皆、精神病である」—— これは、フランスの精神分析家ジャック・ラカンの残した有名な言葉である。無意識に抑圧された心の闇は必ずや回帰し、その人を支配し続けるとラカンは語る。それは、誰もが心に闇を抱え、それを隠そうとするが、結局は逃れることはできないということである。そして、そのような「心の闇」の部分こそが「人間」だと語っている。

精神病者は、その理解できない行動や言動からしばしば私たちに恐怖を与える。そして私たちは、彼らを「異常」とし遠ざけ、自分たちは「正常」だと思い込んでいる。しかし、人は自分以外の“リアル”、言い換えれば、他者が見ている世界を体験することはできない。つまり、自分の“リアル”を「正常」だと言える根拠はどこにも無いと言える。そもそも、「正常」「異常」とは何であろうか。精神病患者たちの“リアル”も、彼らにとってはそれが“現実”であり、「正常」なのである。むしろ、「自分はおかしくない」と思い込んでいる私たちが「異常」なのかもしれない。

本作品を通して、精神病者の“リアル”、彼らの日々の“現実”を僅かながらでも考えてみて欲しい。そして、「正常」「異常」などの線引きなどこの世界にはなく、私たちにも精神病になりうる可能性が十分に潜んでいるということを感じていただきたい。

発表者氏名：伊東 菜南, 松枝彩香, 石原千尋, 大沢愛絵, 鈴木理美子, 金子綾花, 近藤郁美, 奈良春花, 岡田亜美, 澤井薫, 山口幸奈, 樋川聖佳, 西村碧, 山添真優, 廣田夏香, 今村友里乃, 長田花純, 長谷川菜々子

所属ゼミ：桐谷ゼミ

発表タイトル：スマホを失くした日

発表概要：「人々が文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるためその人たちには忘れっぽい性質が植えつけられることになるだろう」というのは、プラトンが著書で述べた言葉です。彼はこの本の中で文字という発明が人びとに悪影響を与えるとして痛烈に批判しました。しかし今、私達にとって文字のない生活は考えられません。

文字だけではなく、蒸気、電気、コンピューター等、人類の歴史はあらゆる道具の進化によって支えられてきました。しかしその反面で、文字が人の記憶する力を衰えさせてきたように、私たちは道具によって様々なものを失ってもいます。道具によって便利になった生活は、道具によって奪われた生活でもあるのです。そして今、歴史の最先端にいる私達は道具によって何を奪われているのでしょうか。

とは言え、近代文明と現代科学技術を批判してばかりではいられません。どの時代においても、人びとは常にその時々「技術革新」による取捨選択を重ねてきました。何を取り、何を捨てるのか、を決定してきたのは「技術革新」の発明者ではなく、それを用いるごく普通の「私たち」であるからです。だからこそ、私たちは、その責任を自覚し、その責任を負わなければなりません。

インスタレーション「スマホを失くした日」では、私たち現代人にとって手放せないものとなったスマートフォンという道具に関する差展示・体験を通して私達が何を失ったか・何を選び取ってきたのかを探ります。この展示では参加者にスマートフォンを失う疑似体験をしてもらうことで、その価値を逆説的に提示します。

今一度、当たり前になっていることを見つめなおすきっかけとなれば幸いです。

発表者氏名：矢富 百夏, 飯高 光輝, 伊藤 隆生,

一ノ瀬 由梨, 落合 慶太, 中村 拓美, 石本 真子, 阿部 早也香, 山口 万柚子, 今井 奏, 新崎 椋司, 福田 愛, 河田 智大, 米川 昌杏, 若宮 樹, 中西 真由佳, 濱口 彩華, 土方 日向, 小松 玲菜, 栗原 邑珠

所属ゼミ：表象文化演習 コミュニケーションとアート (稲垣立男)

発表タイトル：WILL・意思と未来

発表概要：表象文化コース稲垣立男ゼミによるインスタレーション作品。

新未来派宣言

1909年、イタリアの詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティにより未来主義成立宣言が起草された。未来派とは近代社会のスピード感を称え、過去の芸術の破壊と機械による効率化された社会を讃えた前衛的芸術活動である。

この"未来派"は現代の大量消費社会を見事に表した芸術運動であったが、近年わたしたちは未来派の速さにすでに慣れきている。インターネットとスマートフォンの普及によりコミュニケーションはみてもれない速さとなり言葉が溢れかえっている。私たちは未来派が賞賛する速さに美しさを感じなくなることに加えてその速さを認識することさえなくなってきた。現代社会の高速化、効率化されたコミュニケーションはもはやありふれた平凡なものであり、そこに前衛的な芸術性はみられない。

そこで私たちはこのインターネットやスマートフォンを利用し高速化されたコミュニケーションの時代において"新未来派宣言"をする

WILL・意思と未来

この社会において必要とされるコミュニケーションとはなんだろうか。いつ、誰とでもすぐにコミュニケーションできるにも関わらず、わたしたちの心に虚しさが残る。

私たちが仮定した未来、"新未来"において既にコミュニケーションは速さを十分とし誰とでもすぐに繋がることのできるコミュニケーションツールが開発され人々は不自由することはない。しかし人々はその

自由なコミュニケーションにも満足することができず、関係性の希薄さや、対人コミュニケーションの少なさによる鬱憤とした空気が漂う社会が問題視されてきた。

そこでとある企業が開発したのが、最新型コミュニケーションツールの数々である。それは"新未来派"の観念に基づき、コミュニケーションの速さを人間的なスピードまで落とし、その内容や方法を豊かにすることで人々の距離感を縮めることを実験的に可能にした。

早まりすぎたスピードを人間的な時間軸に落とす、新未来派の運動はまさに画期的で前衛的なものとして話題を呼び始めている。"新未来派"のコミュニケーションツールはとある企業の製品発表会という形態で展示をする。より新未来派の登場を鮮やかに想像できるよう、近い未来を想定し、よりリアリティを感じられるようその未来においての企業の製品発表会という形のインスタレーションを制作する。

具体的な製品内容としては、旧来の電話のように他人と生の声で繋がることのできる新未来型コミュニケーションツール、知らない人同士が手紙を交換できる手紙の自動販売機などである。

これらのインスタレーションを用いて私たち稲垣ゼミは未来派とコミュニケーションについて考える機会をつくり、また新しい未来(WILL)への意思(WILL)を提唱したい。

発
る。

発表者氏名：安井一起、黛昂希、秋森祐奈

所属ゼミ：甲ゼミ

発表タイトル：ツナグ～教科書とリアルを～

発表概要：私たちは SA で現地の生の文化に触れたことにより、より深く理解し実のある知識を得ることができた。日本での文化教育では得られなかった深い学びがあったと感じ、従来の文化教育が果たして十分であるのだろうかという疑念を抱いた。

日米の 4 年制大学の 2~4 年生に向けた「多文化・異文化に関する大学での経験の調査」(馬淵、2011)によると、文化に関する授業の受講が 41.2% (米) に対し

39.2% (日)、異文化理解体験が 27.6% (米) に対し 7.3% であり「多文化・異文化に関する学習成果に関する自己評価」(学習の理解度)が、アメリカは日本を大きく上回った。馬淵氏によれば、異文化体験が少ないことや、学習成果に関する自己評価が低い結果は「授業などから得られる知識の理解だけではなく、実践への架け橋を意識した教育課程の構築がされていないことが要因の一つである」という。今後、少子化が加速することで外国人労働者が増加し、日本はさらにグローバル化が進むことが見込まれると考える。よって現代の小学生は外国人とともに生きていく場面が増えるだろうが、大学教授の堀家氏によると「文化教育と英語教育が同義になっているのが実情である」という。以上のことから文化教育が不十分であるという問題意識をもち、より文化教育の学びを深める方法を検討した。

小学校での文化教育は体験学習の時間を十分に確保できていないという現状がある。博物館の展示は視覚や触覚に重視したものが多い。私たちが定義する文化とは、多くの要素が複雑に絡まりあって構築されおり、視覚や聴覚、教科書から得た知識だけでは文化の様々な要素のごく一部でしかない。一方で SA 生活ではそれらの知識に加えて肌で感じた実体験をしたことで、活きた異文化理解ができたのではないだろうか。一見繋がりが見えない要素同士も、多様な知識によりそれらが結びつき、より深い理解となるのではないだろうか。

以上のことから、従来の文化教育で重視されていた教科書や触覚、視覚による学びだけでなく、五感を通じて体験する文化教育を提案する。

ことで人々の距離感を縮めることを実験的に可能にした。

早まりすぎたスピードを人間的な時間軸に落とす、新未来派の運動はまさに画期的で前衛的なものとして話題を呼び始めている。"新未来派"のコミュニケーションツールはとある企業の製品発表会という形態で展示をする。より新未来派の登場を鮮やかに想像できるよう、近い未来を想定し、よりリアリティを感じられるようその未来においての企業の製品発表会という形のインスタレーションを制作する。

作品を展示する。加えてワークショップのアイデアやプロセス、制作した作品に対する個々の意見なども紹介したい。

ワークショップの概要

1. テンプル大学、法政大学のワークショップ参加学生はお互いの大学空間を訪問、調査し、それぞれの特徴を示す一つの「見出し語」を決める。
2. その見出し語をそれぞれお互いの大学生と交換する。交換する際に使用するメディアを指定する。
3. 交換した見出し語を基に作品を作る。テンプル大学の学生は法政大の学生の選んだ（テンプル大学に関する）見出し語を基にした作品を制作し、法政大学の学生はテンプル大学生の選んだ（法政大学に関する）見出し語を基にした作品を制作する。
4. メディアの形式は詩、小説、絵画、映像、パフォーマンスなど自由とするが、このワークショップの一つの目的にお互いの大学に関する要素を抽出し、収集してそれぞれの大学のいわばマルチメディア「辞書」を作成することにあるので、制作の際にそのことを意識することが大切となる。
5. 交換する際に、見出し語の制作者は何か具体的な作品についてのイメージがあれば、作品の制作者に参考としてそのイメージを伝えることができる。例えば「この言葉を基に詩を書いて欲しい」「白を基調とした作品を想像している」など

ワークショップ・スケジュール

ワークショップ 1

プロジェクトの説明及び取材

場所：法政大ゼミ→テンプル大学日本校（9月27日：15:00~）

テンプル大ゼミ→法政大学国際文化学部（9月27日：18:00~）

ワークショップ 2

顔合わせとディスカッション（10月11日:16:50）

場所：法政大学

ワークショップ 3

プレゼンテーション（11月1日:16:50）

場所：テンプル大学

発表者氏名：飯高 光輝、伊藤 隆生、一ノ瀬 由梨、落合 慶太、矢富 百夏、中村 拓美、石本 真子、阿部 早也香、山口 万柚子、今井 奏、新崎 椋司、福田 愛、河田 智大、米川 昌杏、若宮 樹、中西 真由佳、濱口 彩華、土方 日向、小松 玲菜、栗原 邑珠

所属ゼミ：表象文化演習 コミュニケーションとアート（稲垣立男）

発表タイトル：テンプル大学日本校アート学科+法政大学国際文化学部稲垣ゼミによる共同制作のためのアートワークショップ

発表概要：表象文化演習稲垣ゼミでは、研究活動として背景の違う様々な人々とともに国内外でコラボレーションのアートプロジェクトやワークショップを実施している。この10年の間に僧侶、青果市場の売り子さん、保育園の子どもたち（それぞれタイ、チェンマイ）神田の古書店、デザイン専門学校の学生、新潟や福島の農村の人々、山手線の通勤、通学者、千代田区近郊で活動しているストリートミュージシャン（日本）と共に作品制作をしてきた。お互いに背景の違う同志のコラボレーションは、言語や考え方の違いなどを乗り越えていく必要があり、必ずしもうまくいかないことあって苦労も多い。コミュニケーションの困難を乗り越えてやり遂げた時の達成感はかけがえない体験となっている。

2017年度の研究活動では、テンプル大学日本校アート学科と共同制作のためのアートワークショップを実施、お互いの大学を往復しながら制作を進めている。今回の国際文化情報学会でのインスタレーションによる発表はテンプル大学とのワークショップの成果展である。アメリカの大学の日本校で学ぶ学生と海外留学経験のある日本の大学に所属する学生たちのアイデアの交換を通じて学べることは大きいと考えており、学会のインスタレーションはその成果を確認する機会となる。

展覧会では、ワークショップを通じて実際に制作した

成果の発表

法政大学国際文化情報学会（11月25日）

場所：法政大学

国際文化学会での発表について

学会の発表では、双方の大学の学生でアイデアを出し、協力して展示作業を行う。具体的な展示物としては、

1 完成した作品

2 制作プロセスの記録

3 写真ドキュメント

などである。

作品の発表に加えて、制作のプロセスもわかりやすく伝えていきたいと考えている。

発表者氏名：佐藤 健志朗(サトウ ケンシロウ)、工藤 誠己(クドウ トモキ)、小林 凌典(コバヤシ リョウスケ)、川畑 芽朗(カワバタ メロウ)、住田 美怜(スミダ ミサト)、中澤 由貴(ナカザワ ユキ)、宮崎 信吾(ミヤザキ シンゴ)、大野 義佳(オオノ トモヨシ)、吉田 瑞季(ヨシダ ミズキ)、伊弉末 和磨(イサマツ カズマ)、竹尾 華(タケオ ハナ)、須田 彩花(スダ アヤカ)、増村 遥佳(マスムラ ハルカ)、門脇 ゆうり(カドワキ ユウリ)、赤坂 瑠也(アカサカ リュウヤ)、金山 紗己(カネヤマ サキ)、柳田 有希奈(ヤナギダ ユキナ)、笠原 佑華(カサハラ ユウカ)、大越 康貴(オオコシ コウキ)、山崎 佳奈(ヤマサキ カナ)、渡井 純希(ワタイ ジュンキ)

所属ゼミ：榎木ゼミ

発表タイトル：“Million Dollar Baby” of America

発表概要：「父がアクセル(飼犬)にしたことを、私にしてほしい。」

これはアメリカ映画『ミリオンダラー・ベイビー(2004)』の劇中、主人公マギーが言い放った台詞である。マギーはボクシングの世界一を競うリーグ、WBAウォルター級でチャンピオンを獲るという大きな夢を目前にして、二度とボクシングができない体になってしまった。貧しいながらも並々ならぬ努力によって試合に勝ち進んできた彼女。家族はそんな彼女を心配する様子もなく、死後に勝利金を奪う契約を交わしに来た。

そんなマギーに「殺してくれ」と頼まれた指導者兼パートナー、フランキーは多量のアドレナリンを彼女に注射することによって、マギーの命を絶った。

もしも大切な人に「殺してくれ」と頼まれたら、あなたはどのような決断をするだろうか。また、その際にどのようなことを思い浮かべるだろうか。

私達榎木ゼミはメインテーマとして、映画『ミリオンダラー・ベイビー』のラストにもみられる“尊厳死”を、サブメインテーマとしてアメリカの“宗教”を提示する。

私達が上記2つをテーマに設定した理由は3つある。

1つ目は、正解が一つでない決断を体験して頂きたいからだ。“尊厳死”は現代でも議論がなされており、絶対的な正解が存在しない。正解・不正解の二項対立に捉われない決断を通して、自分を信じて結論を出すことを皆様に体験して頂きたいと考えた。

2つ目に、身近に感じられないかもしれない社会問題でも、私達にとって身近な映画に多く反映されていることを伝えたいからである。普段何気なく鑑賞している映画をミクロな視点で観察してみると、私達と社会問題がいかに密接に関係しているかということに気づかされる。私たち榎木ゼミはそのような視点を皆さんに体感して頂きたい。

3つ目は、アメリカ社会の面から、“尊厳死”における新しい視点を提供したいからだ。“尊厳死”は日本でも話題になる大きなテーマである。しかし、アメリカ社会から“尊厳死”について考えた時、日本人の多くは考慮しない1つがあることに私達は注目した。それは、“宗教”の存在だ。人口の約70%がキリスト教信者(2016年現在)であるアメリカでは、“尊厳死”が問題視される一つの要因として宗教が関わる。キリスト教では、自殺や殺人は絶対悪であり、それを犯したら天国に行くことができない。キリスト教信者にとって、神と“尊厳死”のどちらを重んじるかという判断は、今までの人生を覆すか否かの非常に大きな決断となる。アメリカにおける“尊厳死”が、“宗教”という文化的背景に大きく関わることに私達は着目した。

最後に、本作品は皆様各々の視点をもって初めて完成することを言い添えたい。私達は、上記3点の他に

も、私たちが榎木ゼミで勉強したことを作品に散りばめている。この作品をもって皆様各々が感じた考え方を共有しあうことで、私達榎木ゼミと皆さんで作品を完成することができればと考えている。

-----キリトリ-----

教員審査結果通知 申請用フォーマット

詳細は、本プログラム冒頭の「国際文化情報学会の教員審査の結果通知を希望する人へ」参照。

必要事項に記入し、切り取った上で国際文化学部窓口に提出すること。

発表部門(いずれかに○)	A B C D
発表者名(グループ発表の場合は代表者名)	
学生区分(いずれかに○)	学部生 大学院生
発表タイトル	
ゼミ名	
<u>※グループ発表者のみ記入すること</u> 教員審査結果通知の申請を行うことは グループ全体で確認済みですか？	はい いいえ